

インクルーシブ教育システムの構築に向けた通常の学級における学びを支える方途

小 中 高

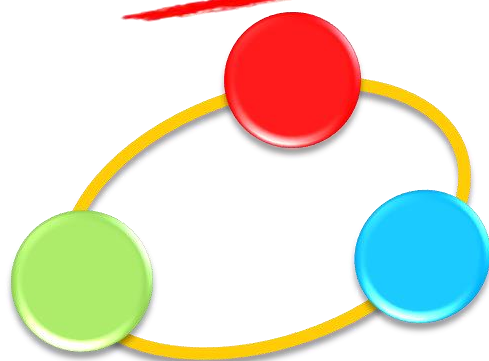
学びを支える

3 つの要素

合理的配慮・

適切と思われる**配慮**

学級の**支持**的風土



ユニバーサルデザイン (UD) の視点

校内委員会等との協働
保護者との連携
関係機関との連携

必見!

平成31年3月

福岡県教育センター

インクルーシブ教育システムについて

「インクルーシブ教育システム」(inclusive education system, 署名時仮訳：包容する教育制度)とは、人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組みであり、障害のある者が「general education system (署名時仮訳：教育制度一般)」から排除されないこと、自己の生活する地域において初等中等教育の機会が与えられること、個人に必要な「合理的配慮」が提供される等が必要とされている。

文部科学省 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)概要(H24)より

本書(学びを支える3つの要素)で使用している用語や表現については、読みやすさやスペースの都合上、次のような規則に準じて使用していることがあります。

一般的な用語・表現	本書で使用している用語・表現
ユニバーサルデザイン	UD
特別支援教育に関する校内委員会	校内委員会
特別支援教育コーディネーター	特支 Co
スクールカウンセラー	SC
スクールソーシャルワーカー	SSW
ソーシャルスキルトレーニング	SST

「福岡県障がい者を理由とする差別の解消の推進に関する条例」の基本理念に則り、本書においては「障がい」の表記を用いています(引用文を除く)。

はじめに

平成 19 年 4 月、改正学校教育法の施行に伴い、「特殊教育」から「特別支援教育」へ転換され、様々な体制整備や取組が行われてきました。「障害者基本法」の改正や「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」の公布など、様々な制度改革が進められ、平成 26 年 1 月には、我が国において「障害者の権利に関する条約」が批准されました。

福岡県においては、平成 29 年 4 月に「福岡県特別支援教育推進プラン」が策定・公表されました。この中で、「通常の学級には特別な支援を必要とする児童生徒が一定数在籍しており、個々の困難さへの対応として、児童生徒理解に基づく、学習面・生徒指導面の適切な対応が喫緊の課題となっている。」「学校全体での組織的な対応が課題として挙げられる。」ことが示されています。

本調査研究は、これまでの研究「通常の学級におけるユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり」「インクルーシブ教育システムの構築に向けた特別支援教育の充実～合理的配慮提供の 7steps～」を発展させ、「通常の学級における全ての児童生徒の学びを支える方途」として、授業における具体的な手立てや校内支援体制、保護者との連携等の在り方を明らかにすることを目指しました。1 年次は、学びを支える方途として、3つの要素「合理的配慮・適切と思われる配慮」「ユニバーサルデザインの視点」「学級の支持的風土」を授業に取り入れることの重要性を明らかにしました。2 年次は、3つの要素を取り入れた授業実践とともに、担任の校内委員会等との協働や保護者との連携、関係機関との連携の在り方について実践的に研究を進めました。成果をまとめた「研究紀要」「校内研修スライド」は、各校の実状を踏まえながら具体的な取組に活用していただけるものです。既存の校内組織を動かし、保護者や関係機関と連携し、通常の学級における授業づくりを進める仕組みを整理しました。

本書が、小学校・中学校・高等学校の通常の学級に在籍する全ての児童生徒の学びを支える一助となれば幸いです。

おわりに、本書の作成に当たり、貴重な御指導、御協力を賜りました関係各位に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成 31 年 3 月

福岡県教育センター
所 長 原 田 靖

本書の使い方

本書には、インクルーシブ教育システムの構築に向けて取り組んでいる小学校・中学校・高等学校の、初任者の先生から校長先生までが参考になる情報が詰まっています。

■ まずは自校の現状をチェック！

取組が進んでいる学校も、これから取組を始める学校も、まずは、p. 4の「チェック表」を活用し、自校の強みと今後取り組む必要があることを把握してみましょう。

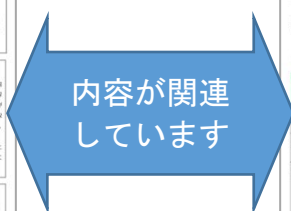
	I	II	III
A	口学級に在籍する、支援を要する児童生徒が何に困っているか把握している。	口香段から、UDの視点を生かした授業を行っている。	口授業の中で、学級の支持的風土を醸成する働き掛けを意識して行っている。
B	口校内委員会など、複数で児童生徒への個別の支援の検討や評価をしている。	口校内又は学年内、教科内で、UDの視点を生かした授業づくりについて共通理解し、取り組んでいる。	口校内又は学年内で、学級経営やホームルーム経営についての方針を共通理解し、意識して取り組んでいる。
C	口校内での対応が難しい場合は、必要な場合に関係機関と連携して取り組んでいる。	口UDの視点を生かした授業づくりについて、必要な場合に、関係機関と連携して取り組んでいる。	口学級づくりや時間づくりについて、必要な場合に、関係機関と連携して取り組んでいる。
D	口保護者や本人の、個別の支援に関する要望を把握している。又は、個別の支援について保護者と建設的対話ができている。	口日頃から、全ての児童生徒にとって分かりやすい授業をしていることについて、通信や懇談会等を通して、通信や懇談会等を通して、保護者全員に理解を促す取組をしている。	口保護者が、「我が子は学級や学校にとって大切な存在なのだ」と実感できるよう、意識して働き掛けている。

■ 学びを支える「3つの要素」とは何だろう？ という方は

第1章理論編に、3つの要素の説明や、学校全体で取り組む上での大切な考えをまとめています。本書には、福岡県教育センター研究紀要 平成26年度「ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり」及び平成28年度「インクルーシブ教育システムの構築に向けた特別支援教育の充実～合理的配慮提供の7 steps～」と関連する情報が多くあります。さらに詳しく知りたい場合は、これらの研究紀要も併せて御覧ください。

■ 実践例を知りたい方は

第2章実践編に、研究協力校の実践をまとめています。校内組織がどのような動きをして学校全体として取組を進めているのか、校内での動きを踏まえてどのような授業づくりを行ったのか、1つの事例につき「校内での動き」と「授業の実際」を併せて御覧いただくと流れが分かるようになっていきます。



■ 実践編ページの見方

小 中 高
校種を示すアイコン

Point 1 支援を要する児童への個別の支援の具体化と情報の引継ぎ
 異なる児童については、毎年夏季休業中までに、各担任を含めた複数の教員でリポートシートを活用し、実態を把握しています。明らかになった情報は、学年で共有し、必要に応じてチーム運動会等を経て、連携や支援の方向性、保護者への対応等について検討しています。
 これらの情報は、担任が変わっても確実に引き継ぐことができるよう、個人別又は学年別にファイルを作って管理をしています。各学年担任は引き継いだ情報を基にして、さらに関係職員と協議をしながら支援方法を検討しています。

Point 2 研究協議によるUDの視点も有用な支援の具現化
 主題研究では、複数年わたってUDの視点を生かした授業研究と研究協議を重ねています。研究部による授業と授業研究、研究協議によって全教員が共通理解し取り込んでいます。取組を続けてきたことでUDの視点を取り入れた授業づくりが職員に浸透し、学校全体で共通化したことが数多くあります。教員の仕方やアートの取り方は、全ての学年で統一したルールを設けました。また、各担任による研究取組では、学年別と連携し、よりよい工夫を検討して実践につなげています。
 研究授業では、授業全体の観察記録とは別に、支援を要する児童の観察記録も役割として設定しています。自身の担当学級外の児童を観察する機会を設け、観察記録を基に協議をすることで、学級状況の取組を高めることにつながっています。

Point 3 人権尊重の視点を基にした「分かる・できる」授業の実施
 人権尊重の視点を基として、主題研究の取組と連携しながら支持的風土を育むようにしています。この取組は、中学校区で共通しています。
 自己存在感や自己肯定感を育む上で、授業づくりの視点には「分かる・できる」授業の実施を掲げています。校内委員会では、学級上の課題だけでなく、学校生活全般や課外活動、関係機関との連携等の広範囲にわたる支援について協議を行います。例えば、複数の教員で実態を協議したことで、気持ちを落ち着かせるための場所と機会を確保し、学級に参加できるようになった事例等があります。

Point!
1
左の図中で示したポイントを右で詳しく説明しています。

特徴的な取組を
図示しています。

UD 手順、思考の流れ、キーワードの可視化（ユニバーサルデザインの視点）
 児童が活動の視座しをもつことができるように、手順の流れを提示しました。また、児童が思考しやすいように、板書とノートを選択し、「手順の可視化」した。また、板書とノートを選択し、「手順の可視化」した。また、板書とノートを選択し、「手順の可視化」した。

配慮 課題に応じた手順の選定場面の設定（合理的配慮の提供）
 児童Eへの支援として、自認図、手順書、図形の紙を準備して提供し、使い方や取組を説明し、活用するかどうか本人に任せました。児童Eは、自認図や図形カードを自ら選び、問題解決に活用しました。児童E自身が、自分に合った学び方で学習するよさを受け取った。

支持 関や考えを促して伝え合うペア交流（学級の支持的風土）
 交流時には、関や考えを促して伝え合うペア交流。交流時には、関や考えを促して伝え合うペア交流。

UD
左の表中で示した3つの要素を右で詳しく説明しています。

授業の概略です。
3つの要素をどこに取り入れたのかを示しています。

「校内での動き：Point1」とは、**Point!**
1 のことです。

■ 校内研修で、この内容について学びたい！ という研修担当者の方は

福岡県教育センターのホームページにアクセスし、校内研修スライドをダウンロードして御活用ください。どの内容も、10～15分程度の時間があれば研修できるように作っています。読み原稿も付いているので、すぐに使うことができます。

福岡県教育センター 3つの要素 検索

目次

- はじめに
- 本書の使い方

第1章 理論編

- 1** 福岡県のインクルーシブ教育システムの構築に向けた取組状況・・・・・・・・・・ 1
- 2** 学びを支える「3つの要素」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
 - 「合理的配慮・適切と思われる配慮」とは？
 - 「ユニバーサルデザインの視点」とは？
 - 「学級の支持的風土」とは？
- 3** 学校みんなで取り組むには？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
 - (1) 校内委員会等との協働
 - (2) 関係機関との連携
- 4** 保護者との連携・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
- 5** さあ、自校に「3つの要素」を取り入れましょう・・・・・・・・・・ 15
 - 「3つの要素」を授業に取り入れるイメージ（小学校）
 - 「3つの要素」を授業に取り入れるイメージ（中学校・高等学校）

第2章 実践編

事例1【A小学校】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

校内での動き：児童が安心して学習に参加できるように、
3つの要素を取り入れた授業づくりを組織的に実践しているA小学校
授業の実際：第5学年 理科，第1学年 生活科

事例2【B小学校】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

校内での動き：ユニバーサルデザインの視点を中心としながら
3つの要素を取り入れた授業づくりに取り組んでいるB小学校
授業の実際：第5学年 道徳科，第1学年 道徳科

事例3【C小学校】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30

校内での動き：UDの視点を生かした授業づくりと、
「チーム援助会議」で個別の支援を検討しているC小学校
授業の実際：第2学年 算数科，第3学年 算数科，第5学年 算数科

事例4【D小学校】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38

校内での動き：学級担任と校内委員会が協働し、
保護者と連携して支援体制の構築に取り組んでいるD小学校
授業の実際：第4学年 算数科，第5学年 算数科

事例5【E小学校】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44

校内での動き：校内委員会を機能化して、支援体制の構築に取り組んでいるE小学校
授業の実際：第2学年 国語科，第6学年 国語科

事例6【F小学校】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50

校内での動き：担任及び特支Coを中心に校内組織及び保護者と連携・協働し、
授業づくりにおける具体的な支援を検討しているF小学校
授業の実際：第2学年 道徳科，第5学年 道徳科

事例 7 【G 中学校】	56
--------------	----

校内での動き：生徒会と連携して教室環境整備や学習規律の確立に取り組んでいる
G 中学校

授業の実際：第 3 学年 技術・家庭科 家庭分野，第 2 学年 外国語科

事例 8 【H 中学校】	62
--------------	----

校内での動き：主幹教諭，特支 Co，養護教諭，スクールカウンセラー等が協働して，
支援体制の構築に取り組んでいる H 中学校

授業の実際：第 1 学年 理科，第 2 学年 国語科

事例 9 【I 高等学校】	68
---------------	----

校内での動き：インクルーシブ教育推進校として，ユニバーサルデザインの視点を
生かした授業づくりに取り組んでいる I 高等学校

授業の実際：第 2 学年 地理歴史科，第 2 学年 外国語科

事例 10 【J 高等学校】	74
----------------	----

校内での動き：支援を要する生徒が多く在籍し，合理的配慮・適切と思われる配慮を
開校当初から提供している J 高等学校

授業の実際：美術科，数学科

第3章 コラム編

1 保護者との連携	80
2 関係機関との連携	81
3 異校種間の連携	82
4 校内の工夫	83

- 参考文献・参考ウェブサイト
- おわりに
- 調査研究協力員・調査研究協力校 特別支援教育チーム

第1章

理論編

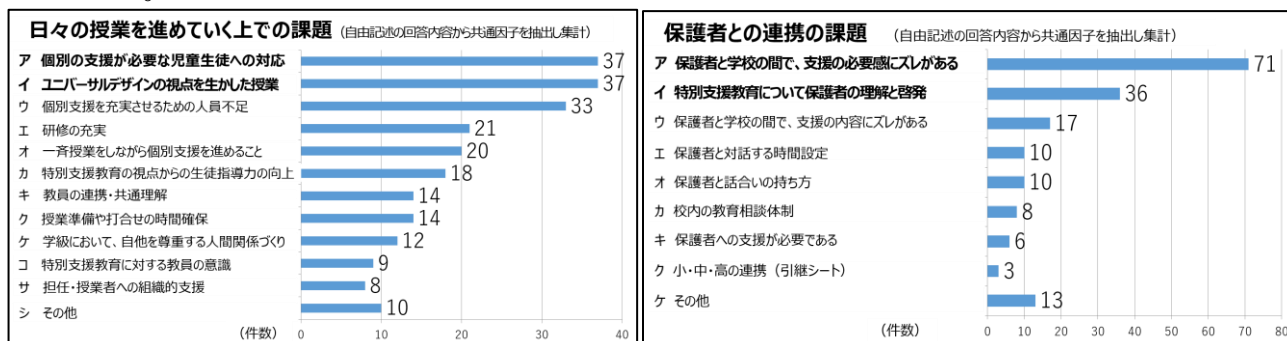
1 福岡県のインクルーシブ教育システムの構築に向けた取組状況

福岡県の公立小・中・高等学校における、インクルーシブ教育システムの構築に向けた取組の状況はどのようになっているのでしょうか。

福岡県教育センターが、福岡県内の公立小・中・高等学校のうち2割の学校を無作為に抽出して実施した「インクルーシブ教育システムの構築に関する実態・意識調査」※では、次のような状況が明らかになりました。

- ・ 97%の学校で、全職員対象の特別支援教育に関する校内研修を実施している。
- ・ 全ての校種で、特別支援教育を推進しようという意識が高い教職員が多い。
- ・ 全ての校種で、特別支援教育に関する校内委員会において支援を要する児童生徒の情報共有をしている。

これらのことから、特別支援教育について関心が高く、インクルーシブ教育システムの構築に向けて、学校全体で組織的な取組を進めようとしている学校が多いことが分かりました。しかし、その一方で、授業づくりや連携体制の面では取組がまだ十分でないと感じた学校が多くありました。下に示すグラフは、自由記述の欄から、共通因子を抽出して集計したものです。授業づくりに関する課題や、保護者との連携に関する課題が多く挙げられました。



そこで、今後、学校が自校のインクルーシブ教育システムを構築するために、以下のように着目した取組を進めることを提案します。

- ・ 全ての児童生徒の学びを支える授業づくり
- ・ 校内委員会等との協働
- ・ 関係機関との連携
- ・ 保護者との連携

※「インクルーシブ教育システムの構築に関する実態・意識調査」は、平成29年度に福岡県教育センター 特別支援教育チームが福岡県内の公立小・中・高等学校の2割の学校にアンケート調査をしたものです。質問項目とその結果は次頁に示しています。

インクルーシブ教育システムの構築に関する実態・意識調査

質問事項		小学校	中学校	高校	全体
特別支援教育の現状	1 特別支援教育を推進しようという教職員の意識は高まっている。	3.6	3.3	3.3	3.5
	2 特別支援教育コーディネーターの役割は校内で周知されており、教職員の協力が得られている。	3.6	3.3	3.3	3.5
	3 特別支援コーディネーターの役割は、保護者に周知されている。	2.6	2.2	2.8	2.5
	4 特別支援教育について、貴校の保護者の理解は進んでいる。	2.8	2.6	2.8	2.8
	5 特別支援教育を進めるための校内体制は機能している。	3.4	3.1	3.3	3.3
特別な配慮を要する児童生徒	6 通常学級における特別な配慮を要する児童生徒の実態把握が、適切に行われている。	3.5	3.3	3.6	3.5
	7 通常学級における特別な配慮を要する児童生徒についての情報を教職員が共有できている。	3.6	3.4	3.5	3.5
	8 通常学級における特別な配慮を要する児童生徒について、個別の指導計画を作成している。	3.5	2.7	3.3	3.2
	9 通常学級における特別な配慮を要する児童生徒について、個別の教育支援計画を作成している。	3.3	2.6	2.9	3.1
	10 通常学級における特別な配慮を要する児童生徒に対して指導記録等をつけ、より適切な指導や支援に生かしている。	3.0	2.7	3.1	3.0
	11 通常学級における特別な配慮を要する児童生徒に対して合理的配慮を提供することが望ましいと考えられる場合、保護者との話し合いをすすめている。	3.3	3.0	3.5	3.3
	12 通常学級における特別な配慮を要する児童生徒の保護者から協力が得られている。	2.9	2.6	3.3	2.9
連携	13 通常学級における特別な配慮を要する児童生徒の入学時や卒業等に際して、他校種との引き継ぎを実施し、十分な情報交換を行っている。	3.5	3.3	2.9	3.4
	14 通常学級における特別な配慮を要する児童生徒の支援に必要なスクールカウンセラーや専門機関等との連携を積極的に行っている。	3.7	3.4	3.6	3.6
	15 特別支援教育に関する情報を貴校の保護者に発信している。	2.7	2.3	2.9	2.6
校内委員会	16 校内委員会において、特別な配慮を要する児童生徒の指導や支援を行うための具体的な方策を示している。	3.3	3.1	3.4	3.3
	17 校内委員会において、特別な配慮を要する児童生徒の指導や支援を進めるために、全職員を対象とした校内研修を実施している。	3.7	3.4	3.2	3.5
	18 校内委員会において、保護者との連携を図るための手立てを検討している。	3.2	2.7	2.8	3.0
	19 校内委員会で話し合ったことは、全職員に報告し、共通理解を図っている。	3.5	3.2	3.0	3.4
授業における支援	20 通常学級における授業の中で、特別な配慮を要する児童生徒に対して特性に応じた支援をしている。	3.1	2.8	3.3	3.1
	21 校内研修等で、ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくりについて職員が学ぶ機会をつくっている。	3.3	2.9	2.7	3.1
	22 ユニバーサルデザインの視点を生かして、焦点化・視覚化・共有化を意識した授業を行っている。	3.0	2.7	2.8	2.9
	23 ユニバーサルデザインの視点を生かして、児童生徒が落ち着いて授業が受けられるような教室の環境整備を行っている。	3.1	2.9	2.7	3.0
	24 ユニバーサルデザインの視点を生かして、児童生徒がお互いにサポートし合うような学級づくりを行っている。	3.2	2.9	2.8	3.0
	25 一人ひとりの違いを理解し、お互いを認め合えるように学級経営の工夫をしている。	3.4	3.2	3.5	3.4
	26 道徳・学活・LHR以外の各教科の授業の中でも、お互いに認め合う人間関係の育成をねらいとした学習が意図的に設定されている。	3.2	3.2	3.2	3.2
	27 仲間づくりの視点から、構成的グループエンカウンター、ソーシャルスキルトレーニング、ピア・サポート活動等の取組を計画的に実施している。	2.9	2.7	2.5	2.8

※評価基準・・・ 当てはまる「4」、どちらかといえば当てはまる「3」、どちらかといえば当てはまらない「2」、当てはまらない「1」

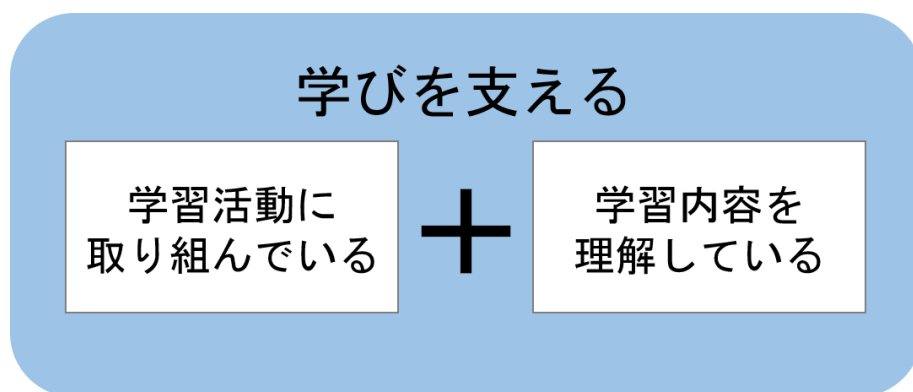
※平均値が3.0未満の値には、印を付けている。

※「全体」の平均値は、(小学校、中学校、高校全ての回答値の総和)÷(回答した全学校数)で求めている。

2 学びを支える「3つの要素」

学びを支えるとは、通常の学級に在籍している全ての児童生徒が、学習活動に取り組むことができ、学習内容を理解できるようにすることです。

インクルーシブ教育システムでは、障がいのある児童生徒と障がいのない児童生徒とが可能な限り一緒に教育を受けることを目指しています。そのためには、障がいのある児童生徒が、十分な教育を受けることが重要です。「障がいのある児童生徒は、どのような配慮があれば本来の能力が発揮できるだろうか」という発想に基づいて支援方法を構想します。



学びを支えるために必要なことは、次の3つです。

- 合理的配慮・適切と思われる配慮
- ユニバーサルデザイン（UD）の視点
- 学級の支持的風土



これらを、**学びを支える「3つの要素」**とといいます。

学校全体でインクルーシブ教育システムの構築に取り組むためには、全職員が授業に「3つの要素」を取り入れることを意識しておく必要があります。「3つの要素」を取り入れるに当たって、順序はありません。自校の現状を踏まえて取り組むことが大切です。下の表は、自校が「3つの要素」をどの程度意識しているか、自校の現状を知るためのチェック表です。当てはまる欄の□にチェックし、自校の強みと、今後の取組の方向性を明らかにしていきましょう。

	I	II	III
A	<input type="checkbox"/> 学級に在籍する、支援を要する児童生徒が何に困っているか把握している。	<input type="checkbox"/> 普段から、UDの視点を生かした授業を行っている。	<input type="checkbox"/> 授業の中で、学級の支持的風土を醸成する働き掛けを意識して行っている。
B	<input type="checkbox"/> 校内委員会など、複数で児童生徒への個別の支援の検討や評価をしている。	<input type="checkbox"/> 校内又は学年内、教科内で、UDの視点を生かした授業づくりについて共通理解し、取り組んでいる。	<input type="checkbox"/> 校内又は学年内で、学級経営やホームルーム経営についての方針を共通理解し、意識して取り組んでいる。
C	<input type="checkbox"/> 校内での対応が難しい場合は、必要な場合に関係機関と連携して取り組んでいる。	<input type="checkbox"/> UDの視点を生かした授業づくりについて、必要な場合に、関係機関と連携して取り組んでいる。	<input type="checkbox"/> 学級づくりや仲間づくりについて、必要な場合に、関係機関と連携して取り組んでいる。
D	<input type="checkbox"/> 保護者や本人の、個別の支援に関する要望を把握している。又は、個別の支援について保護者と建設的対話ができている。	<input type="checkbox"/> 日頃から、全ての児童生徒にとって分かりやすい授業をしていることについて、通信や懇談会等を通して、保護者全員に理解を促す取組をしている。	<input type="checkbox"/> 保護者が、「我が子は学級や学校にとって大切な存在なのだ」と実感できるよう、意識して働き掛けている。

表をタテに見て、Iが多かった場合は、「合理的配慮・適切と思われる配慮」が強みです。

IIが多かった場合は、「UDの視点」が強みです。

IIIが多かった場合は、「学級の支持的風土」が強みです。

表をヨコに見て、Aが多かった場合は、「授業づくり」の取組が強みです。

Bが多かった場合は、「校内委員会等との協働」の取組が強みです。

Cが多かった場合は、「関係機関との連携」の取組が強みです。

Dが多かった場合は、「保護者との連携」の取組が強みです。

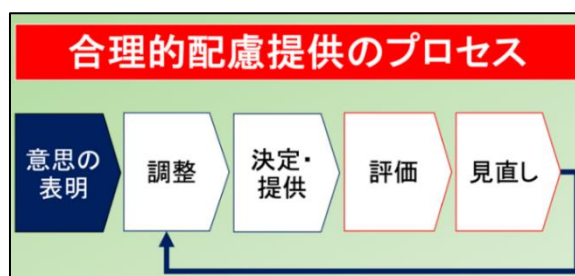
次頁から、学びを支える「3つの要素」について、詳しく説明をしていきます。

○ 「合理的配慮・適切と思われる配慮」とは？

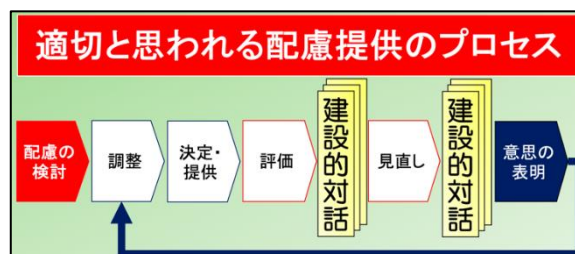


合理的配慮は、障がいのある児童生徒が、他の児童生徒と平等に「教育を受ける権利」を享有・行使することを確保するために、学校の設置者及び学校が必要かつ適当な変更・調整を行うことで、児童生徒に個別に提供されるものです。合理的配慮と適切と思われる配慮は、配慮の検討から決定・提供、評価、見直し等のプロセスに違いはありますが、障がいのある児童生徒が、学習活動に取り組めるようにする、学習内容を理解できるようにするなど、その目的は共通しています。

合理的配慮は、本人又は保護者の意思表示からスタートします。一人一人の障がいの状態や教育的ニーズに応じられるよう、校内委員会や保護者等と調整し、合意形成を経て、配慮を決定・提供します。その際、サポートヒントシート*を活用することで、個別に必要な配慮が見つかります。その後、評価、見直しを行い、必要に応じて調整を行って、決定・提供します。



適切と思われる配慮は、本人又は保護者の意思表示がなくても、必要な配慮の検討から始めます。一人一人の障がいの状態に応じられるよう、校内委員会等で調整し、サポートヒントシート*を活用し配慮を決定・提供します。配慮を提



供した結果を評価し、本人や保護者との対話を始めます。配慮を提供することで見られた児童生徒の成長を、本人や保護者と共有します。必要に応じて、提供した配慮を見直すときや校内委員会等で見直した後にも、本人や保護者と建設的対話を繰り返します。このような取組を通して、配慮の必要性について本人や保護者が気づき、合理的配慮の意思表示につながる場合もあります。また、本人や保護者と配慮の内容について合意形成が図られると、より一層、保護者の信頼を得られ、効果が期待でき、満足度の高い配慮提供につながります。

*「サポートヒントシート」については、以下の資料（福岡県教育センターホームページ）を参照ください。平成 28 年度 福岡県教育センター研究紀要 インクルーシブ教育システムの構築に向けた特別支援教育の充実～合理的配慮提供の 7steps～

○「ユニバーサルデザインの視点」とは？



ユニバーサルデザインの視点とは、シンプル、クリア、ビジュアル、シェアの4つです。

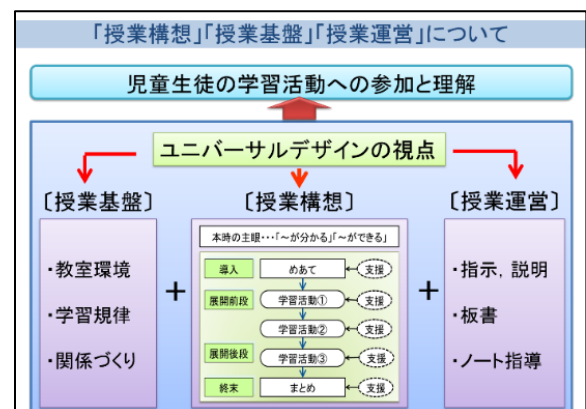
UD の視点を生かした授業とは、全ての児童生徒にとって分かりやすい授業のことです。

UD の視点を生かした授業は、学習活動への参加と学習内容の理解を保障します。

それぞれの視点を確認していきましょう。

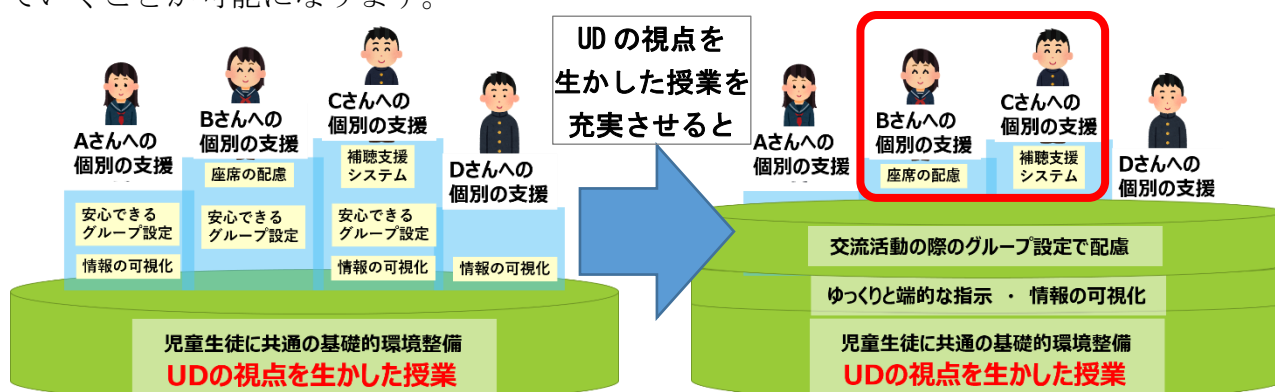
	学習内容の理解のために	学習活動への参加のために	ポイント
シンプル	本時のねらいや発問を絞ります。	余分な刺激をなくし、必要な情報に絞ります。	意識や思考を焦点化しながら学習活動に取り組めるようにします。 ※学習のレベルを下げることはありません。
クリア	授業展開の道筋を明確にします。	活動の内容や順序などを明確にします。	授業全体を見通しながら、段階的に学習内容についての理解を深めていけるようにします。
ビジュアル	視覚情報や具体物を併用します。		思考や言語などの情報を絵や写真，図，動作などに変換し，視覚的に働き掛けます。
シェア	少人数の話し合い場面を設定し，全ての児童生徒の発言機会を保障します。		少人数による話し合いを位置付けたり，話し合いの場面において教師が児童生徒の発言を整理したりします。

UD の視点は、授業基盤や授業運営にも取り入れることで、取組がより充実します。



※「UD の視点を生かした授業づくり」については、以下の資料（福岡県教育センターホームページ）を参照ください。平成 26 年度 福岡県教育センター研究紀要 通常の学級におけるユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり

「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進」では、「基礎的環境整備」の必要についても述べられています*。基礎的環境整備とは、合理的配慮の基礎となる環境整備のことで、児童生徒に対して共通に整備されるものです。基礎的環境整備には、下図のように、UDの視点を生かした授業を行うことも含まれているといえます。UDの視点を生かした授業を日々実践することで、児童生徒に共通の基礎的環境整備が次第に充実していき、下図のように個別に提供する合理的配慮を焦点化していくことが可能になります。



ワンポイント アドバイス

UDの視点は、4つとも取り入れるのですか？

まずは「シンプル」と「クリア」から。「ビジュアル」と「シェア」は目的を明確に！

一単位時間の授業は、いくつかの学習活動を通して本時のねらいに迫っていくものです。そこで、ねらいやめあてを絞ること（シンプル）、授業展開の道筋を明確にすること（クリア）は特に重視します。

写真やICT活用など、ビジュアルの視点を意識した取組はかなり広まってきました。しかし、写真やICTによる視覚的な情報が多すぎると、困難さのある児童生徒にとっては、かえって刺激になることもあります。情報を可視化しようとする際には、本当に必要があるものかどうかを吟味しましょう。

交流活動をシェアの視点から取り入れることについても、どのような目的で、何をどのように話し合わせるのかを明確にしましょう。

*「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（中教審初等中等教育分科会報告）」（平成24年）では、「共生社会の形成に向けて」「就学相談・就学先決定の在り方」「合理的配慮や基礎的環境整備」「多様な学びの場の連続性」「教職員の専門性向上」等が提言されました。理念だけで終わらずに、教育の仕組みをつくることで、共生社会の形成を目指しています。

○ 「学級の支持的風土」とは？



「学級の支持的風土」とは，一人一人が自己存在感を感じ，学び合いを通して，互いのよさを尊重し，認め合える，全ての児童生徒にとって居心地のよい環境のことです。

担任や教科担任は，授業を含む全ての教育活動において，これらが醸成されるよう働き掛けを行うことが大切です。教師の意識や具体的な手立てが，学級の児童生徒を変容させ，さらには児童生徒同士の関係も高まっていきます。

学級の支持的風土を醸成するためのポイントは，以下のとおりです。

◎自己存在感をもたせましょう



教師の意識
教師の手立て

- ・ 一人一人の実態やニーズを詳細に把握し，活動の場づくりを工夫する。
- ・ 結果にこだわらず，自由な発想や方法，思考過程や学習過程を認める。
- ・ 「名前と呼ぶ（〇〇さん）」「目を見て話す」「話をよく聞く」「承認・称賛・励ましの言葉を掛ける」等，一人一人を大切に示す姿勢を示す。

Aさんが
いて
よかった

私は役立っ
ているな



そうすると・・・

- 学習に参加していると実感できる。
- 他者からの評価により，自己有用感を感じる。

◎共感的人間関係を育成しましょう



教師の意識
教師の手立て

- ・ 一人一人を受け入れて褒め，自由に発言できる雰囲気をつくる。
- ・ 自分の考えとは異なる意見や感情を理解する姿勢を育てる。
- ・ 児童生徒の発言は，言い終わるまで待つ。

いいね、
分かるよ

ありのままの
自分でよいのだな



そうすると・・・

- 安心して自分の思いを表現できる。
- 自分が受け入れられていることを実感できる。

◎自己決定の場を設定しましょう



教師の意識
教師の手立て

- ・ 複数の課題や教材・教具の中から自分に合ったものを決定できる機会を設定する（学習課題や計画，教材，学習方法，表現方法，学習形態や学習場所，振り返りの方法など）。

私は〇〇
を使って
調べるね

□□の方法で
調べようかな

いろんな方
法があるん
だね！



そうすると・・・

- 自分の役割を自覚できる。
- 責任ある行動をとることができる。

学級の支持的風土が醸成されると、児童生徒同士が「一人一人，得意・不得意や学び方が違っていい」と、互いの在り方や多様性を尊重するようになります。このような学級においては、支援を要する児童生徒は、合理的配慮の意思表示をしやすくなります。つまり学級が、合理的配慮・適切と思われる配慮の下で安心して学ぶことができる居場所となります。



授業で「学級の支持的風土」を意識した

手立てを講じるのはなぜですか？

教師の授業中の児童生徒との関わりがモデルとなるからです。

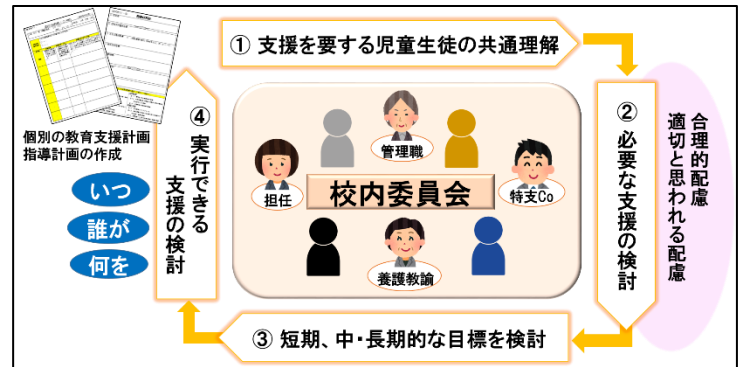
学級の支持的風土は、教育活動全体を通して醸成していくものです。では、児童生徒が学校で最も長く過ごしている時間は何でしょうか。それは、授業です。授業において、支持的風土を醸成する「仕掛け」「働き掛け」を意識的・意図的に行うことが、学びを支える重要なポイントとなります。その方針を学校全体で共通理解し、取組を進めていくことで、誰が学級担任や教科担当になっても、学びを支え続けることができます。

3 学校みんなで取り組むには？

(1) 校内委員会等との協働

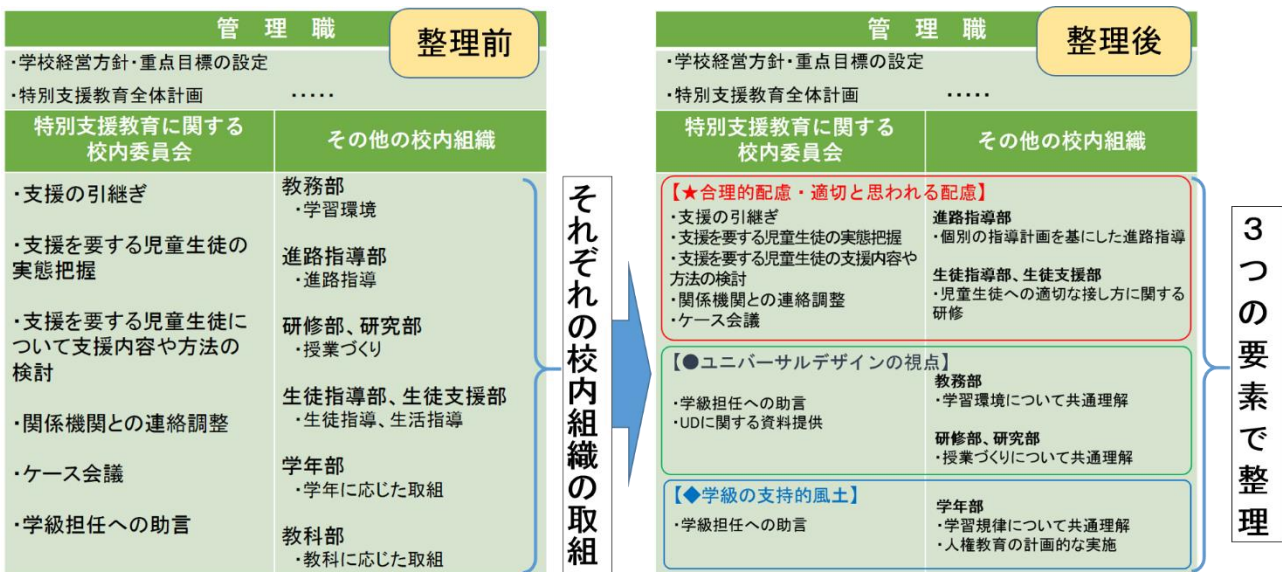
校内委員会とは、校長のリーダーシップの下、全校的な支援体制を確立し、発達障がいを含む障がいのある児童生徒の実態把握や支援方策の検討等を行う組織です。

校内委員会では、右図のような手順で支援を要する児童生徒への支援を検討し、実行します。このようにして、継続して支援できる仕組みをつくります。



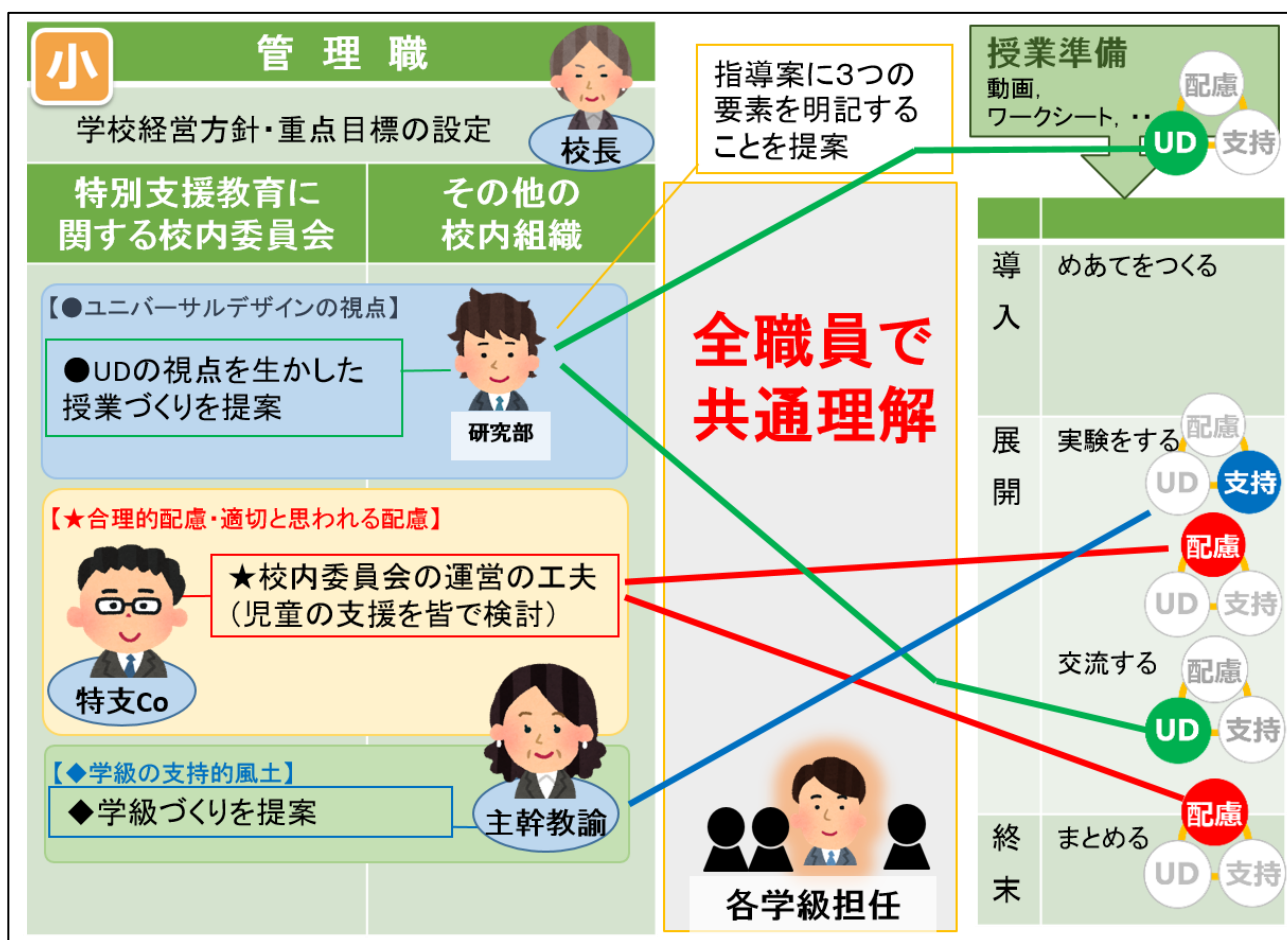
その他にも各学校には、教務部、生徒指導部、進路指導部、教育相談部、研究部、学年部等、既存の校内組織があります。授業者は、校内委員会で検討された個別の支援について情報を共有し、共通理解します。同時に、学級に在籍する全ての児童生徒への授業中の指導や支援の方針についても、既存の校内組織と連携して「3つの要素」で検討します。

自校の校内委員会及び校内組織の取組を「3つの要素」で整理してみましょう。



このように、校内委員会や他の校内組織の取組を3つの要素で整理し、全職員で共通理解することにより、授業者は授業に3つの要素を取り入れやすくなります。また、校内全体で取り組むことができます。

例えば、主題研究としてUDの視点を生かした授業づくりに取り組んでいて、校内委員会で支援を要する児童の支援について検討や評価をしており、主幹教諭が学級づくりの方針について提案している小学校の場合、その取組を3つの要素で整理すると、下図のようになります。

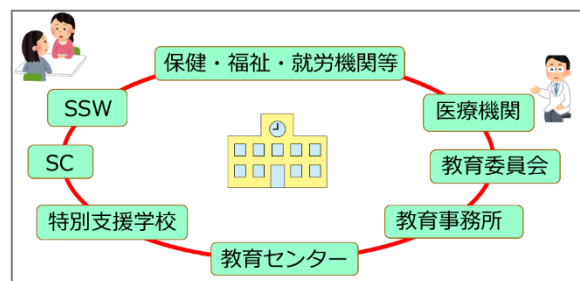


授業者は、校内委員会や他の校内組織の取組を取り入れ、授業をつくります。授業づくりのイメージについては、小学校編を p. 16, 中学校・高等学校編を p. 17 に示しています。

教科担任制である中学校や高等学校では、校内委員会等から提案された取組を、学年会等で共通理解します。そして、どの教科等の授業においても、3つの要素で指導や支援を行うことができるように、各教科担当で情報を共有します。そうすることで、全ての生徒の学びを、全ての教科等で一貫して支えることができます。

(2) 関係機関との連携

関係機関との連携とは、「SC」「SSW」「保健・福祉・就労機関等」「医療機関」「教育委員会」「教育事務所」「教育センター」「特別支援学校」等、学校を取り巻く機関と共に児童生徒を支援していくことです。目的は2つあります。1つは、児童生徒の実態や教育的ニーズに応じて、よりよい支援を提供するためです。2つは、学級担任等が一人で問題を抱え込むことなく、チームによる支援を行うためです。



関係機関との連携により、どのような内容や方法で支援を行えばよいのか、UDの視点を生かした授業になっているか、学級づくりや仲間づくりはどのように進めればよいのかなどの授業づくりのヒントを得て支援につなぐことが大切です。

■ 連携の進め方

事前：関係機関に関する情報を収集し、整理しておく。(特支 Co を中心に)

- ① 関係機関との連携の必要性を協議する(校内委員会等)。
 - ② 関係機関との連携の必要性及び連携先を判断をする。(管理職)
 - ③ 相談内容を整理する。(校内委員会等)
 - ④ 関係機関との連絡調整を行う。(特支 Co を中心に)
 - ⑤ 必要な資料を作成し、準備する。(校内委員会等)
 - ⑥ 関係機関に相談し、助言をもらう。(担任、特支 Co 等)
 - ⑦ 助言内容を共有し、支援の方向性を検討する。(校内委員会等)
- ※ 適宜、保護者と情報を共有する。

■ 連携を進める上で大切なこと

◎十分な検討と共通理解を図り、目的を明確にしましょう

何について助言を得たいのか相談内容を焦点化し、これまでの検討内容や指導の経過を、個別の教育支援計画や個別の指導計画を基に伝えるようにします。

◎個人情報の取扱いに留意しましょう

情報は、目的に合わせて、必要なものに精選します。

◎保護者の心情に配慮しましょう

保護者と情報共有を進めていく際には、保護者の心情に十分配慮しながら、得た情報を分かりやすく伝えていくことが大切です。



4 保護者との連携

保護者との連携とは、保護者をパートナーとして情報を共有し、共に児童生徒を支援していくことです。支援を要する児童生徒の保護者だけでなく、全ての保護者との連携を進めることで、インクルーシブ教育システムの構築につながっていきます。さらに支援を要する児童生徒の保護者からの情報は、正確な実態把握や興味・関心を生かした教材準備等の授業づくりにつながります。

■ 全ての保護者と連携するポイント

◎学校だよりや学級通信、保護者懇談会を通して連携を深めましょう

3つの要素について学校で大切にしていること、児童生徒の様子や頑張りを、定期的に伝えるようにします。学校として、日常の取組を伝えることは、保護者へ安心感を与え、信頼関係構築への一歩となります。

◎障がいについての理解を深める機会をつくりましょう

インクルーシブ教育システムの構築に向けて、障がいについての理解を深めることが大切です。PTA 主催の研修会で発達障がいや他の障がいについての研修を行うなどの取組で、障がいに対する理解啓発を進めることができます。



■ 個別の保護者と連携するポイント

◎保護者の思いや考えを知りましょう

児童生徒が抱える困難さに対する捉え方は、保護者によって異なります。また、保護者は将来への不安や周囲の偏見や誤解等、様々な悩みを抱えています。このような悩みや心情を知ろうとする姿勢が大切です。対話の中に相づちやうなずきを入れることで、気持ちや考えを受け止めてもらえていると感ずることが出来ます。保護者の気持ちに寄り添い、共に考えていきたいという姿勢を示しながら、対話を進めていくようにします。

◎できていることから、支援の必要性へと話を進めていきましょう

児童生徒が頑張っていることやできていることを丁寧に伝えます。併せて、適切と思われる配慮を行っている場合は、配慮の内容を加え、児童生徒ができていることを具体的に伝えていきます。



そうすることで、困難さを示す原因が、児童生徒自身ではなく環境等の外的な要因であることや、困難さを軽減する支援の必要性を感じることができます。支援内容を伝える際には、やわらかく提案します。保護者と教員は、児童生徒を育てるパートナーであることを伝えながら、一方的な話し合いにならないように心掛けることが大切です。

◎支援内容と結果を具体的に伝えましょう

支援を行った結果、児童生徒がどのような様子だったのかを、具体的に伝えることで、支援の効果を共有することができます。どのように取り組み、何が身に付いたのかを分かりやすく伝える対話は、支援の必要性への気づきを促し、合理的配慮の意思表示へつながっていきます。



5 さあ、自校に「3つの要素」を取り入れましょう

ここまで、インクルーシブ教育システムを構築するための取組について説明をしてきました。



児童生徒の学びを支える授業には、3つの要素が必要です。

全ての児童生徒にとって分かりやすい授業にするために、UDの視点が必要です。支援を要する児童生徒には、合理的配慮・適切と思われる配慮が必要です。全ての児童生徒が安心して学んだり、困難さのある児童生徒が合理的配慮の意思表示をしたり、配慮の下で学んだりするためには、学級の支持的風土が必要です。

3つの要素を取り入れた授業づくりは、校内委員会等の既存の校内組織と協働して行うことで、より充実します。さらに、学校全体として、継続的に保護者と連携したり、必要な場合には関係機関と連携したりすることが、インクルーシブ教育システムを構築するための大切なポイントです。

校内の動き

管理職

- 学校経営方針・重点目標の設定
- 学校経営要綱の中に、特別支援教育の位置付け
- 特別支援教育推進計画の作成
- 保護者への学校経営方針等の説明（学校により、PTA総会）

特別支援教育に関する校内委員会

その他の校内組織

【★合理的配慮・適切と思われる配慮】

- ★ 支援→引継ぎ（校内・学校間）
- ★ 困っている児童の抽出（サポートシート）
- ★ 困っている児童の共通理解 **p.30**
- ★ 必要な配慮についての検討
- ★ 個別の教育支援計画・指導計画作成の呼び掛け
- ★ ケース会議
- ★ 学級担任への助言 **p.44**
- ★ SC・SSWとの連携
- ★ 巡回相談員との連携

研究部（研修部）

- ★ 3つの要素についての三研修の実施

学年会

- ★ 具体的支援の共通理解

【●ユニバーサルデザインの視点】

研究部（研修部）

- 3つの要素についての三研修の実施
- 授業基盤の統一
- 学校としての授業づくりのポイント共通理解

学年会

- 学年としての授業づくりのポイント共通理解

【◆学級の支持的風土】

研究部（研修部）

- ◆ 3つの要素についての三研修の実施
- ◆ 授業基盤の統一

人権教育部

- ◆ 障がいについての理解啓発（人権教育）



p.〇〇：参考となる実践編の掲載ページを示しています。



準備

- ・実態把握
- ・教材研究…等

毎日の授業

導入	前時までの学習を振り返る。 めあてをもち。
展開	学習の見通しをもち。 自分の考えをつくる。
終末	まとめる。

A君について、引き継いだ支援内容を保護者と確認しておこう。

巡回相談員からの助言を生かし、文章が読みやすいように、行当てを用意してみよう。

研修会で学んだように、3つの要素を取り入れているか、意識し指導上の留意点を考えてみよう。**p.21**

何を学ぶのかが分かりやすくなるように、めあてを焦点化してみよう。

サポートシートを使って、支援のヒントが分かったから、カードを操作しながら物事を関連付けて考えられるような思考ツールを使ってみよう。

言語情報や場面の状況を構造図や表情図で示してみよう。**p.29**

自分の考えを友達と共有できる交流学習を設定してみよう。**p.41**

話し合い活動の中で、自分の考えが変化したことを発表する場をつくり、十分に称賛しよう。**p.55**

校内の動き

管理職

- 学校経営方針・重点目標の設定
- 学校経営要綱の中に、特別支援教育の位置付け
- 特別支援教育推進計画等の作成
- 保護者への学校経営方針等の説明 (学校だより, PTA総会)

特別支援教育に関する校内委員会

その他の校内組織

【★合理的配慮・適切と思われる配慮】

- ★ 支援→引継ぎ (3月) 校内・学校間
- ★ 困っている生徒の抽出 (サポートピクト)
- ★ 困っている生徒の共通理解
- ★ 必要な配慮についての検討
- ★ 個別的教育支援計画・個別の指導計画作成の呼び掛け
- ★ ケース会議
- ★ 学級担任・教科担当への助言
- ★ SC, SSW・巡回相談員との連携

進路指導部
★ 個別的教育支援計画を基に進路について話し合う

生徒指導部・生徒支援部
★ 具体的な生徒への接し方の研修

【●ユニバーサルデザインの視点】

- 学級担任, 教科担当への助言
- UDOの視点を生かした授業づくりに関する資料作成

教務部・研究部 (研修部)
● 授業基盤の統一
研究部 (研修部)
● 学校としての授業づくりのポイント
共通理解

【◆学級の支持的風土】

- ◆ 学級担任, 教科担当への助言

学年部
◆ 学期始めに授業ルールを明示 (共通理解)
◆ 障がいについての理解啓発 (人権教育)

どうやって授業につながるかな？

授業者 (教科担当)

Aさんへの合理的配慮として、☆☆の準備をしよう。

生徒Aさんに授業で関わる先生たち

私の学級のAさんは、○○の場面で、□□のような困難があります。☆☆の支援をすれば、困難さが軽減されます。

それでは、授業中に○○の場面があるときは、☆☆のような支援をしましょう。

担任

教科担当

ローシートを作成する際には、本時の思考の流れが分かるような構成にしよう。

何を学ぶのかを理解して学び始められるように、本時のねらいを伝えるようにしよう。

全ての生徒が、どのように学ぶのか見通しをもちることができるよう、研究部の提案どおりに、初めに50分間の授業の流れを説明しよう。

全ての生徒が安心して発言できるように、交流のときには、肯定的な反応をするよう声を掛けよう。

本時の振り返りを自分で書くか、提示したキーワードを使って○文字以内で書くか、自己決定させて取り組ませてみよう。また、いくつかの難易度の中から、課題を選択させてみよう。

準備
・ 実態把握
・ 教材研究
...等

毎日の授業

前時までの学習を振り返る。
めあてをもち。

学習の見通しをもち。

自分の考えをつくる。

考えを交流する。

まとめる。

終了

第2章

実践編

事例 1

小

児童が安心して学習に参加できるように、3つの要素を取り入れた授業づくりを組織的に実践しているA小学校

校内での動き

学級の全ての児童が安心して学習に参加できるように、3つの要素を取り入れた授業を組織的に実践している学校です。A小学校では、3つの要素を取り入れた授業が共通実践となるように、学習指導案の展開の指導上の留意点に3つの要素を表記しています。そのことで授業者が3つの要素を意識した活動や手立てを仕組むことができます。また、授業検討会や整理会では、3つの要素から活動や手立ての評価をし、適切な支援の提供が行われています。

【組織的に3つの要素を取り入れた授業実践に取り組むまでの流れ】

《年度当初》



《5月》

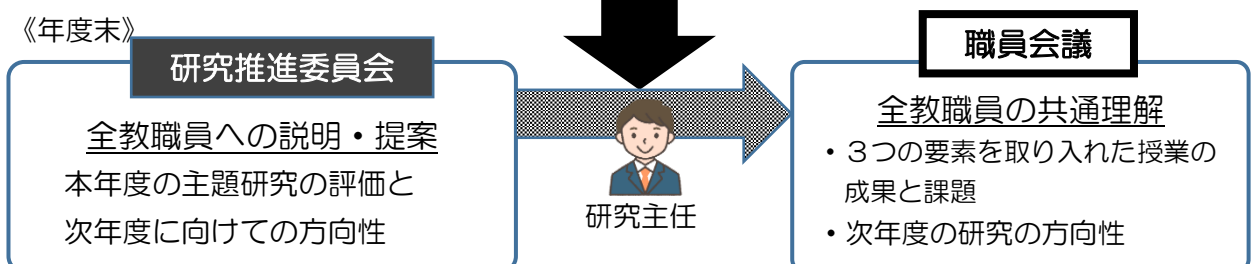


《6月》




全学級の授業検討会・研究授業・授業整理会の実施

《年度末》



Point!
1

3つの要素を示した学習指導案の本時の展開記述例

	【UDの視点】	★合理的配慮・ 適切と思われる配慮	◇(学級の支持的風土)
<p>3 考察する (1)自分の考えをまとめる。</p> <p>わたしの予想と同じでした。実験結果から、ふりがが1往復する時間は、糸の長さが50cmのときは1.4秒、25cmのときは1.0秒、100cmのときは2.0秒になりました。</p> <p>つまり、糸の長さを長くすると、ふりがが1往復する時間は長くなり、短くすると1往復する時間も短くなります。</p> 	<p>○考察に使わせたいキーワード「糸の長さ」を確認してカードで示したり話型を確認したりする。【シェア】</p> <p>※例1</p> <p>※例2</p>	<p>○話型にそった書き込み式のワークシートを用意し、文章で表現する量を軽減する。★</p> <p>〔評価〕ふりがの運動の変化とその要因を関係付けて考察し、自分の考えを表現している。《ノート(考察)》</p>	
<p>(2)ペア交流をする。</p>	<p>○交流の際、友達との考えと共通する部分に赤線を引かせ、共通点を視覚的に理解しやすくする。【シェア】</p>	<p>○どのように説明すればいいのか確認させておく。交流の際は、配慮が必要な児童から説明をさせ、共通点を見つけてさせることで自信をもたせる。★(自己存在感)</p>	
<p>(3)全体交流をする。</p>	<p>○ICTを活用しノートを拡大表示して、子どもの考え方を視覚化して交流させ、見方や考え方を深めさせることができるようにする。【シェア】★(共感的人間関係)</p>		

「A小学校の学習指導案の本時の展開より」

授業者は、3つの要素を意識して1単位時間の授業づくりを行います。例えば、上記の「※例1、例2」の部分は、UDの視点に関する記述です。「考察に使わせたいキーワードを確認して、カードを黒板に示したり、話型を確認したりする」「交流の際、友達との考えと共通する部分に赤線を引かせ、共通点を視覚的に理解しやすくする」というように、手立ての意図と手順を明確に記述するようにしています。このように記述することで、授業での手立てがどの要素を意識したものが明確になります。さらに、授業構想段階からも3つの要素が意識できます。

Point!
2

個別の支援の在り方について協議する授業検討会やケース会議

授業検討会では、支援を要する児童について、特支 Co をはじめ対象児童に関わる教員から、手立てについて意見をもらいます。授業整理会においても、その支援が適切であったかを協議します。協議を行う中で、支援の効果が吟味され、より効果的な支援へと高まります。3つの要素から、どのような支援があれば支援を要する児童が学びやすいかを常に考え続けています。そのことが全ての児童が安心して学習に取り組み、分かる授業づくりにつながっています。

上記のように、支援を要する児童への適切な支援につながる協議ができるのは、支援を要する児童の実態を、サポートヒントシートを活用して把握しているからです。把握した実態は月に1回のケース会議で情報交換を行い、様々な支援の在り方について協議し、出された意見を具体的な支援へとつなげています。



【授業整理会の様子】

このような
本時目標で

「ふりこの長さ」「おもりの重さ」「振れ幅」の条件制御の実験を通して、ふりこの1往復する時間は、ふりこの長さで変わることができることを理解することができる。

このような
実態の児童たちが

理科に対する興味・関心が高い。実験の結果を基に考察を言葉で表すことを苦手としている。

支援を要する児童 A の実態

理科への関心は高い。情報の入力と注意集中の持続が難しい。

見通しをもって学習に参加できるように

情報を取り入れたり、注意集中を持続したりできるように

互いを認め合うことができるように

ユニバーサルデザインの視点

- 学習の流れの視覚化
- 実験結果の視覚化

合理的配慮・適切と思われる配慮

- ★ 書き込み式ワークシートの活用
- ★ ICT 機器の活用

学級の支持的風土

- ◆ グループ活動での一人一人の役割の明確化

3つの要素をこのように取り入れて指導しました

	主な学習活動	指導上の留意点 (●:UD / ★:配慮 / ◆:支持)
導入	1 振れ幅を変えて実験した前時の学習を想起し、本時のめあてを話し合う。 めあて ふりこが1往復する時間はふりこの長さによって変わるのか調べよう。	○本時のめあてをつかませるために、前時までの学習の流れを想起させる。 ●学習の見通しがもてるように黒板を3分割し、流れが分かるカードを提示する。 UD
展開	2 グループでふりこの実験を行い、実験結果を考察する。 (1)実験方法と変える条件・変えない条件を確認する。 変える……ふりこの長さ 変えない…おもりの重さ、振れ幅 (2)ふりこが1往復する時間は、ふりこの長さによって変化することに気付くためのグループ実験をする。 (3)グループの実験結果を基に、全体で考察をする。	○どのグループも同じ条件で実験ができるように実験方法を提示する。 「3回測定」「10往復の時間の平均を計算」 「1往復の時間の平均を計算」 ★児童 A へ2つの支援をする。 ・ICTによる動画や写真の提示 ・書き込み式のワークシートの活用 ◆一人一人がグループの一員として認め合えるように、実験での役割分担を明確にする。 配慮 支持
終末	3 本時で分かったことを話し合う。 ・ふりこの1往復の時間はふりこの長さで変わる。 ・ふりこの長さが長いほど1往復の時間がかかる。	○本時の学習の達成度を実感できるように、ワークシートに振り返りを記述させる。



クリアとビジュアルの視点を取り入れた板書の工夫

板書に「実：実験」「結：結果」等のカードを貼付し、本時の学習の見通しが視覚的に分かるようにしました。この支援が学習の見通しをもたせ、学習に参加しようとする意欲の喚起につながりました。

また、各グループでまとめた実験結果を、黒板に掲示した結果表にシールで貼付して、視覚化しました。実験結果を視覚化したことで、その共通点や差異点、傾向性などが明確に分かり、理解の深まりにつながりました。



【視覚的な配慮を意識した板書】

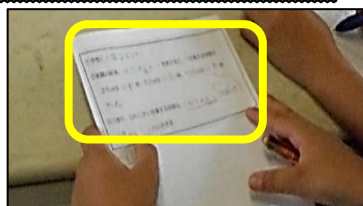


「校内での動き：Point 1」で述べたように、全ての児童が学習の見通しをもって、学習に参加できるようにするために生まれた手立てです。



ICT等を活用した合理的配慮・適切と思われる配慮の提供

児童 A が必要な情報に着目できるように、書き込み式のワークシートを準備しました。また、学習の展開段階に、ICTを活用して、ふりこの動きの動画を提示*しました。児童 A は、最後まで授業に集中し、ふりこが1往復する時間は、ふりこの長さによって変化することを、動画を見ることによってさらに理解を深めることができました。



- ①予想と()。
- ②実験の結果、()を変えると、1往復する時間は、25cmでは()秒、50cmでは()秒、100cmでは()秒でした。
- ③つまり、ふりこが1往復する時間は()によって()。

【書き込み式のワークシート】

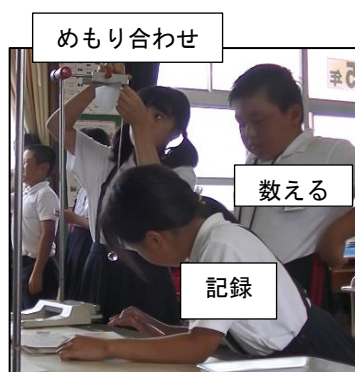
「校内での動き：Point 2」で述べたように、児童 A に対する支援は、授業検討会で生まれた手立てです。

*この手立ては、p. 16 で示した内容と関連しています。



グループ活動による学級の支持的風土の醸成

実験場面では、実験を進める上での個々の役割をグループで決め、一人一人が役割を果たすことができる場を設定しました。グループの中での自分の役割を自覚し、進んで活動する児童の姿を見ることができました。また、このような協働的な学習は、相手意識をもつと同時に、相手のことを認めたり、自己存在感を感じたりすることにつながりました。



【グループでの実験の様子】

授業者のコメント



3つの要素を取り入れた授業を行うことで、どの児童も安心して活動できるようになったと感じています。児童 A は ICT 機器を活用したことで、最後まで学習に集中して取り組むことができました。

このような
本時目標で

「レベルアップカード」を基に、おもちゃを作り直して遊ぶ活動を通して、自分が考えた改良点を生かして遊ぶことの楽しさに気付くことができる。

このような
実態の児童たちが

生活科の学習への意欲が高い。自分で遊び道具を作って遊ぶ経験が少ない。

支援を要する児童Bの実態

学習には意欲的であるが、注意集中の持続と、考えを話して表現することが難しい。

学習の見通しをもって参加できるように

学習に集中し、考えたことを話すことができるように

互いの考えを認めることができるように

ユニバーサルデザインの視点

- 学習のねらいの焦点化
- 学習の見通しの視覚化

合理的配慮・適切と思われる配慮

- ★ 活動の手順や指示の可視化
- ★ 発表のための話型モデルの提示

学級の支持的風土

- ◆ 視点を明確にした振り返り活動
- ◆ 児童一人一人の活動と協働的な学びの価値付け

3つの要素をこのように取り入れて指導しました

	主な学習活動	指導上の留意点 (●:UD/★:配慮/◆:支持)
導入	1 前時の学習を想起し、本時のめあてを話し合う。 めあて おもちゃをつくりなおして、もっとたのしくあそぼう。	● 学習の見通しがもてるように、一人一人のレベルアップカードに学習の流れを示す。 UD ● ねらいを焦点化するために、前時のレベルアップカードから改善点を発表させる。
展開	2 おもちゃを作り直しながら遊ぶ。 (1)各自のレベルアップカードを見ながら、おもちゃを作り直す。 (2)「水をとばす」「水に浮かべる」など作り直したおもちゃで遊ぶ。 <活動場所>・作成コーナー・材料コーナー ・お試しコーナー・見本コーナー	★ 児童Bが授業に集中し、考えを発表できるように、以下の支援を行う。 ・おもちゃを作り直す活動の手順や指示をレベルアップカードに示す。 配慮 ・特に大切な活動には、付箋紙に書いて貼付する。 ・発表しやすいように話型モデルを活用する。 ・活動場所が分かるように視覚的な表示をする。
	3 作り直しの工夫や気付き、楽しかったことを全体で交流する。	◆ 自他の頑張りに気付くことができるように「くふう・はっけん・なかよし・おしえ」の視点で振り返るよう促す。
終末	4 本時の分かったことを話し合い、次時の活動の見通しをもつ。	◆ 児童一人一人の活動のよさや学び合いに価値付けをし、次の活動への意欲を喚起する。 支持

UD

ねらいを焦点化し、学習の見通しをもたせるUDの視点

本時の学習の見通しをもてるように、ビジュアルの視点から、レベルアップカードに学習の流れを示しました（下欄【児童Bのレベルアップカード】参照）。また、本時のめあてを話し合う際、シンプルな視点から、前時までに自分で作ったおもちゃをどのように改善したいか、前時のレベルアップカードに記入させた後に発表させました。そのことで、本時のねらいは「改善」に焦点化されました。



【一人一人の改善点を視覚化した板書】

「校内での動き：Point1」で述べたように、全ての児童が見通しをもって学習に参加できるようにするために考えられた手立てです。

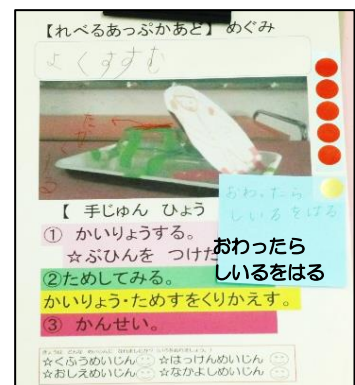
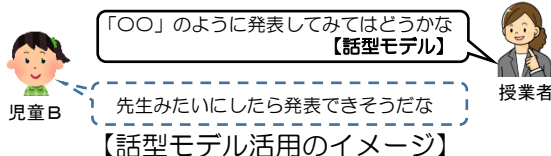


配慮

手順等の可視化や話型モデルを活用した合理的配慮・適切と思われる配慮の提供

児童Bに対し、活動の詳細な手順や、「おわたらしいる（シール）をはる」という指示を、レベルアップカードに書き込んだり付箋紙で示したりしました。そのことで、児童Bは学習に集中することができました。

発表の際は、児童Bの伝えたいことを教師が聞き、伝え方のモデルを示しました（話型モデル）。このことで、児童Bはモデルを使って、自信をもって発表することができました。



【児童Bのレベルアップカード】

支持

振り返り活動を生かした学級の支持的風土の醸成

自他の頑張りを認めることができるように、「くふう・はっけん・なかよし・おしえ」のように、視点を明確にした振り返り活動を行いました。この活動は、互いのよさに気づき、認め合うきっかけとなりました。さらに、よさを認め合う姿を教師が価値付けしたことで、学び合うことのよさに気付かせることもできました。これらのことが共感的な人間関係を育み、学級の支持的風土の醸成につながりました。



【振り返りの視点を示した板書】

授業者のコメント



3つの要素を取り入れた授業を行うことで、児童Bだけではなく、どの児童も自信をもって学習活動に取り組む姿勢が見えてきました。

事例 2

小

ユニバーサルデザインの視点を中心としながら3つの要素を取り入れた授業づくりに取り組んでいるB小学校

校内での動き

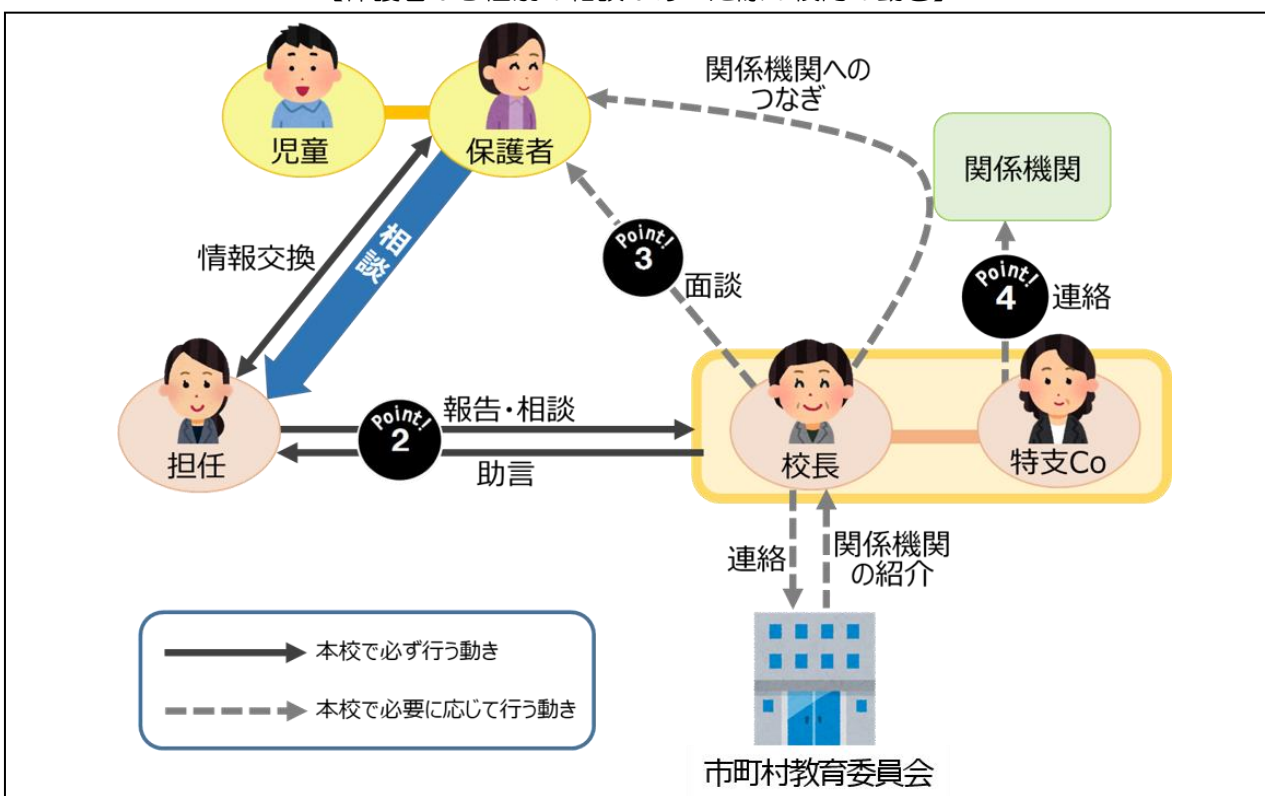
主題研究として、3年前からユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりを中心に取り組んでいる学校です。また、支援を要する児童への配慮については、特支Coが中心となり、サポートヒントシートを活用して検討しています。保護者からの相談があった際には、担任が、校長及び特支Coに報告・連絡・相談を行い、組織的に取り組んでいます。

【3つの要素を取り入れた授業づくりに取り組む流れ】

4月	<ul style="list-style-type: none"> ○特支 Co による提案…サポートヒントシートを用いた児童の実態把握、個別の教育支援計画・個別の指導計画、前年度担任及び保育園・幼稚園からの引継ぎ内容の共通理解 ○主幹教諭による提案…一人一人を大切にする支持的風土のある学級づくりについての共通理解 ○研究推進委員会による提案…研究構想（ユニバーサルデザインの視点を生かした道徳科の授業づくり）についての共通理解
5月	○研究推進委員会…研究主任による提案授業の学習指導案審議，模擬授業
6月	○校内研修会…研究主任による提案授業，授業整理会
2学期	○校内研修会…全学級分の学習指導案審議，模擬授業，研究授業，授業整理会

Point! 1

【保護者から個別の相談があった際の校内の動き】



Point!
1

全教職員が関わってつくる授業

研究主任による提案授業を受け、校内研修会において全学級分の学習指導案審議、模擬授業、研究授業、授業整理会を行います。学習指導案審議に入る前には、授業構想シートを用いた授業検討を行います。ユニバーサルデザインの視点を生かした手立てや合理的配慮・適切と思われる配慮等について、事前に検討した上で、学習指導案作成に入ります。このように、授業構想の段階から全教職員が授業者に関わりながら授業づくりを行っています。

① さりを守れたこと、守れなかったこと
② 学校のさり 学校外のさり (公園、図書館、学道、道路)

2学期の道徳研究授業に向けて< / 年> さりを守るために大切なことをふくらませよう。

資料名	さいりい ベンチ
ねらい	約束や <u>さり</u> を守り、みんなが使うものを大切にすることができるようにする。
主な発問 (◎主発問)	○ 紙飛行機を飛ばしていた時、2人はどんな気持ちだ、たてよう。 ◎ ほらとして 顔を見合わせた時、2人はどんな気持ちだ、たてよう。
主な手立て	UD (ビジュアル) の視点 絵や写真 (表情図?) (ペアシート) ③ 困るのはお母さんと女の子だけ?
検討会可能日	23日 24日 25日 26日 27日

*可能な日のすべてに、○をつけてください。

表情回
↓
ワークシート記入
↓
ペア交流
↓
全体交流 (自分の席でペアシート)
↓
ゆらゆら
↓
大切ポイント

【UDの視点を中心とした手立てを取り入れた授業構想シート】

Point!
2

保護者から担任への相談を校長及び特支 Co に報告・連絡・相談

保護者からの相談について、担任は校長及び特支 Co に報告・連絡・相談を行います。担任が一人で抱え込むことのない体制を整えています。また、保護者が担任に相談しやすいように、日頃の連絡帳及び学期末個人面談等で、できていることやどのような工夫でできるようになったのかなどを中心に伝えるようにしています。

Point!
3

校長による保護者との面談の実施

担任から報告を受けた保護者からの相談内容について、関係機関へつなぐことが必要な場合は、校長が保護者と面談を行っています。校長は、事前に担任から当該児童の実態について聞いたり、日頃から教職員間の情報交換を密に行ったりすることで、保護者との対話をしやすいようにしています。また、当該児童の校内での支援体制を計画して全教職員に提案し、組織で取り組む体制を整えています。

Point!
4

関係機関との連携の中心となる特支 Co

保護者と校長との面談を通じて、関係機関と連携することになった場合には、特支 Co がパイプ役となっています。児童の実態や授業中の様子などについて、担任からこまめに情報収集することを大切にしています。

このような
本時目標で

三人の登場人物の考えの相違点を明らかにし、三人の考えのよさを話し合うことを通して、友情を深めるためには、相手のことをよく考え、相手の立場になって関わるのが大切であることを理解するとともに、相手の状況や気持ちを理解し、よりよい人間関係を築こうとする意欲を高める。

このような
実態の児童たちが

お互いの発言に関して興味・関心をもって聞く姿勢が身に付いている。自分の考えを表現したり、友達の考えに対して自分の考えをもったりすることが苦手な児童もいる。

支援を要する児童Cの実態

自分の考えを書くことが難しい。例文があると、自分の考えを書きやすくなる。

見通しをもったり、思考を深めたりするために

資料の内容を理解し、考えを言語化するために

互いの考えや発言のよさに気付くために

ユニバーサルデザインの視点

- アンケートからめあてを焦点化
- 学習の道筋を明確化する発問
- 手順表や資料の構造図の提示
- ネームカードやホワイトボードを用いた交流

合理的配慮・適切と思われる配慮

- ★ 学習の手順や活動内容の事前提示
- ★ 構造図を机上にも提示
- ★ 発問とヒントカードを机上に提示

学級の支持的風土

- ◆ ネームカードにより自分の立場を明示
- ◆ 離席して様々な立場の友達と行う交流

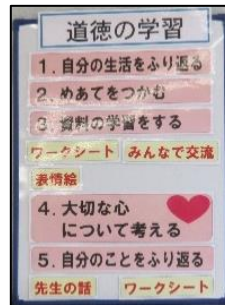
3つの要素をこのように取り入れて指導しました

	主な学習活動	指導上の留意点 (●:UD/★:配慮/◆:支持)
導入	1 本時学習の方向をつかむ。 めあて 友情を深めるために大切な心について考えよう。	● 「友情を深めることができた経験」についてのアンケート結果を提示し、めあてを焦点化する。
展開	2 資料「ロレンゾの友達」を基に、真の友情について考え、話し合う。 (1)資料の状況について確認する。 (2)「ロレンゾの友達」の気持ちを中心として話し合う。 (3)大切な心について考える。	● 4種の発問（基本・中心・深める・高める）で学習を構成する。 ● 手順表や資料の構造図を提示する。 ● 三人の登場人物の考えの違いを明確にするために、顔の絵と名前、考えのキーワードを色分けして提示し、ホワイトボードを用いて交流する。 ★見通しをもって活動できるように事前に学習の流れを手順表で提示するとともに、資料の内容を視覚的に理解できるように構造図を机上にも提示する。 ★自分の考えが出せないときは、考えの手掛かりとなる例文を書いたヒントカード提示する。 ●◆自分の共感する立場の人物を明確にするために、黒板にネームカードを貼る活動を仕組む。 ◆考えを広げ深めたり自信をもたせたりするために、様々な立場の友達と交流する場を設定する。
終末	3 自分の中の大切な心をあたためる。 (1)自分の生活を見直す。 (2)学習で学んだことを生活のどんな場面で生かしていきたいかを考える。	○具体的な実践場面における実践意欲を高めさせることができるように、本時で学んだ価値について振り返らせる。

UD

見通しをもたせ、思考を深める工夫

教室前方に、学習の手順表や読み物資料の構造図を提示することで、学習の見通しをもったり、場面の状況を把握したりしやすくしました。また、話し合った内容をグループごとにまとめたホワイトボードを使い発言内容を可視化して全体交流を行うことで、本時で考える大切な心についての考えをまとめやすいようにしました。



【学習の手順表】 【ホワイトボードによる考えの交流】

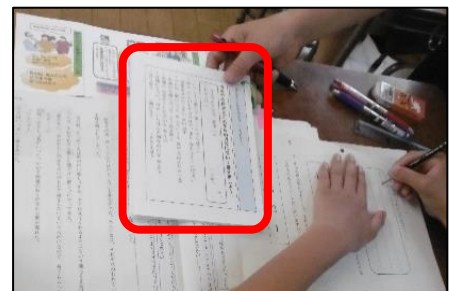


「校内での動き：Point1」で述べたように、研究主任の立場から、UDの視点を生かした手立てを中心とした授業構想について提案しました。

配慮

考えの手掛かりとなる例文の提示

児童Cが、それぞれの発問について、自分の考えをもつことができるように、発問と手掛かりとなる例文を書いたヒントカードを机上に提示しました。ヒントカードの支援によって、児童Cはよりよい人間関係を築くための大切な心について考えることができました。

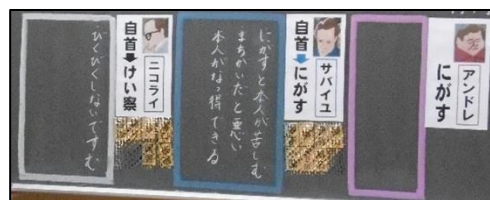


【ヒントカードの活用】

支持

異なる意見を認め合う交流活動

三人の登場人物の気持ちについて話し合う場面では、共感する立場について、黒板に一人一人のネームカードを貼らせました。また、スクランブル交流（離席して様々な立場の友達と交流）を行い、考えを広げ深めさせたり、自分の考えに自信をもたせたりしました。児童に自己存在感を味わわせたり、共感的人間関係を育成したりすることができました。



【一人一人の立場を表すネームカード】 【スクランブル交流の様子】

授業者のコメント



少人数の学級で人間関係が固定化しがちですが、スクランブル交流では、普段とは違う人間関係での交流が見られ、児童の発言や発表が増えてきたように感じています。また、研究主任として、UDの視点を生かした手立てを中心とした授業を提案し、職員間の共通理解と共通実践につなげました。

小

B小学校 第1学年 道徳科 「きまりを守って」 C-(10)規則の尊重 「きいろいベンチ」

授業の
実際

このような
本時目標で

みんなが気持ちよく安心して過ごすためには、約束やきまりを守ることが大切であることが分かり、みんなで使う場所や物をすすんで大切にしようとする意欲を高める。

このような
実態の児童たちが

意欲的に発表し、友達の考えを聞く姿勢が身に付いている。自分と異なる考えを共感的に受け入れたり、友達の考えを最後まで集中して聞いたりすることが苦手な児童もいる。

支援を要する児童Dの実態

読んで理解したり書いて表現したりすることが難しい。絵などの視覚情報があると理解しやすい。

見通しをもったり、思考を深めたりするために

資料の内容を理解し、考えを言語化するために

温かい雰囲気の中で考えを発表できるようにするために

ユニバーサルデザインの視点

- アンケートからめあてを焦点化
- 学習の道筋を明確化する発問
- 手順表、構造図、表情図の提示
- ペープサートによる全体交流

合理的配慮・適切と思われる配慮

- ★ 構造図や表情図を机上にも提示
- ★ 発問とヒントカードを提示

学級の支持的風土

- ◆ 机間指導で一人一人を称賛する言葉掛け
- ◆ 友達の考えを認めるうなずき

3つの要素をこのように取り入れて指導しました

	主な学習活動	指導上の留意点 (●:UD/★:配慮/◆:支持)
導入	1 本時学習の方向をつかむ。 めあて きまりをまもるために たいせつなところを ふくらませよう。	● 「きまりを守ることが出来た経験」についてのアンケート結果を提示し、めあてを焦点化する。
展開	2 資料「きいろいベンチ」を基に、約束やきまりを守る大切さについて考え、話し合う。 (1)資料の状況について確認する。 (2)「たかし」と「てつお」の気持ちを中心に話し合う。 (3)大切な心について考える。	● 4種の発問（基本・中心・深める・高める）で学習を構成する。 ★ 資料内容の整理や考えの言語化をしやすいように、構造図の簡略版や表情図を机上に提示する。 配慮 ★ 平仮名表やヒントカードを提示する。 ● 手順表、構造図を教室前方に提示する。 ● 人物の気持ちに合う表情図を選択してワークシートに記述させる。 UD ◆ 机間指導で一人一人の考えを称賛する言葉掛けを行う。 支持 ◆ 友達の発言に注目させることを徹底する。
終末	3 自分の中の大切な心をあたためる。 (1)自分の生活を見直す。 (2)学習で学んだことを生活のどんな場面で生かしていきたいかを考える。	○ 具体的な場面を振り返ることができるように、日頃の児童の様子を写した写真を電子黒板で提示する。

配慮

場面の様子や登場人物の心情を理解しやすくする「図」

児童Dが場面の様子を理解できるように、教室前方に提示した構造図を簡略化して机の上に置きました。また、人物の心情を想像しやすいように、表情図シールを児童Dの机の上の構造図に貼りました。児童Dは、図を基に自分の考えをワークシートに記述することができました。



【児童Dの机の上に置いた簡略化した構造図及び貼付した表情図シール】



「校内での動き：Point2・3」で述べたように、保護者からの相談後、校長や特支 Co に報告・連絡・相談して児童Dへの配慮内容を検討し、授業での様子を保護者に伝えていきます。

UD

思考を助けたり深めたりする視覚情報

人物の気持ちを考える際、ビジュアルの視点から、4つの表情図^{*}を示すと気持ちが可視化され、思考の助けとなりました。全体交流では、ペープサート（紙人形劇）を用いたことで、人物の気持ちに迫ることができました。



【表情図を選択する様子】



【ペープサートを用いた発表の様子】

※この手立ては、p. 16 で示した内容と関連しています。

支持

一人一人を大切にする言葉や態度

授業の様々な場面で、授業者は一人一人に丁寧な言葉掛けや花丸付けによる称賛を行い、自己存在感をもたせるようにしました。日頃から、児童には、友達の発言に注目して、うなずくなどの反応を示すよう指導しています。授業でも同じように指導することで、児童は、自分が認められていることを実感し、安心して自分の考えを発言することができていました。



【机間指導で丁寧に言葉掛けをする様子】

授業者のコメント



校内研修会等を通じて、特支 Co をはじめ多くの先生方から具体的な助言をいただくことができ、授業者として非常にありがたいと感じています。一人一人の児童の考えを称賛する言葉掛けを大切にすることで、全ての児童が安心して自分の考えを発表できるようになってきています。

事例 3

小

UDの視点を生かした授業づくりと、「チーム援助会議」で個別の支援を検討しているC小学校

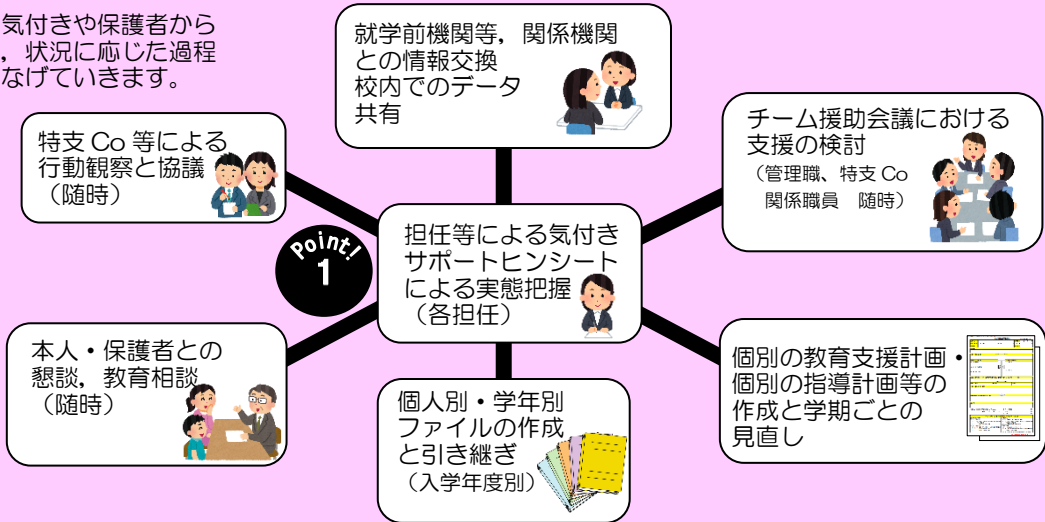
校内での動き

主題研究としてUDの視点を生かした算数科の授業づくりに取り組んでいます。研究部を中心に、全員で授業研究と研究協議を行い、UDの視点を生かした有用な支援を共有しています。学級担任は、関係職員と協議をしながら「分かる・できる」を実感できるよう、様々な工夫をしています。支援を要する児童については、サポートヒントシートを活用して、支援方法の検討を随時行っています。検討は、「チーム援助会議」で行うなど、チームでの検討を大切にしています。

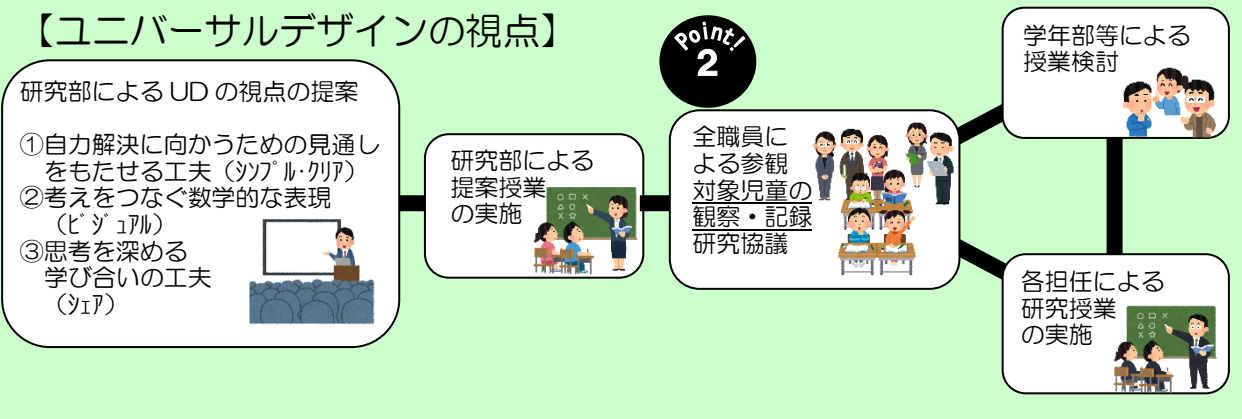
【合理的配慮・適切と思われる配慮】

※この取組は、p.16で示した内容と関連しています。

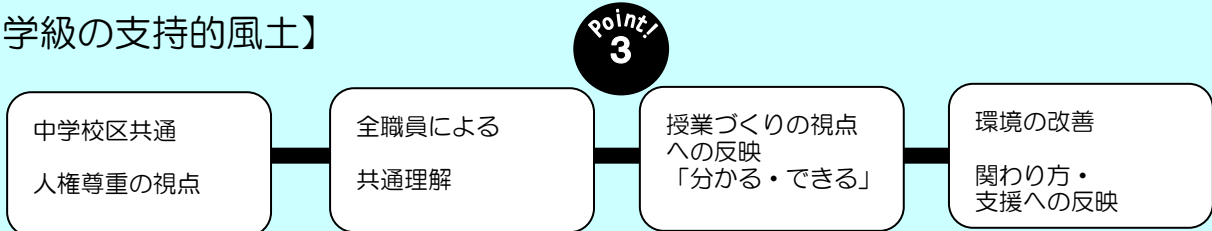
担任等による気づきや保護者からの相談を起点に、状況に応じた過程を経て支援につなげていきます。



【ユニバーサルデザインの視点】



【学級の支持的風土】



Point!
1

支援を要する児童への個別の支援の具体化と情報の引継ぎ

気になる児童については、毎年度夏季休業中までに、各担任を含めた複数の教員でサポートヒントシートを活用し、実態を把握しています。明らかになった情報は、学年で共有し、必要に応じてチーム援助会議等を経て、連携や支援の方向性、保護者への対応等について検討していきます。

これらの情報は、担任が変わっても確実に引き継ぐことができるよう、個人別又は学年別にファイルを作って管理をしています。各学級担任は引き継いだ情報を基にして、さらに関係職員と協議をしながら支援方法等を検討していきます。

Point!
2

研究協議によるUDの視点と有用な支援の共有化

主題研究では、複数年にわたってUDの視点を生かした授業研究と研究協議を重ねています。研究部による提案と提案授業、研究協議によって全教員が共通理解し取り組んでいます。取組を続けてきたことでUDの視点を取り入れた授業づくりが職員に浸透し、学校全体で共通化したことが数多くあります。板書の仕方やノートの取り方は、全ての学年で統一したルールを設けました。また、各担任による研究授業では、学年部と連携し、よりよい工夫を検討して実践につなげています。

研究授業では、授業全体の観察記録とは別に、支援を要する児童の観察記録も役割として設定しています。自身の担当学級外の児童を観察する機会を設け、観察記録を基に協議をすることで、学習状況の見取りを高めることにつながっています。

Point!
3

人権尊重の視点を基にした「分かる・できる」授業の実施

人権尊重の視点を基盤として、主題研究の取組と連携しながら支持的風土を育むようにしています。この取組は、中学校区で共通しています。

自己存在感や自己肯定感を育む上で、授業づくりの視点には「分かる・できる」授業の実施を掲げています。校内委員会では、学習上の課題だけでなく、学校生活全般や環境設定、関係機関との連携等の広範囲にわたる支援について協議を行います。例えば、複数の教員で実態を協議したことで、気持ちを落ち着けるための場所と機会を確保し、学習に参加できるようになった事例等があります。

このような
本時目標で

空位のある3位数について、数字で表したり構成したりできる。

このような
実態の児童たちが

数直線や図式の取扱いや、数学的な表現を
用いて説明することが、まだ十分ではない。

支援を要する児童Eの実態

事物の関連性をつかみにく
いが、色分けや枠があれば関
連性を理解できる。

考え方の説明ができるように

数の大きさと、表記の仕方を
関連付けられるように

児童同士が安心してやりとり
できるように

ユニバーサルデザインの視点

- 板書とノート、プリントの内容の一致
- 位取り表、手順表、話型カード
(児童Eのための支援を、他の児童が必要とした場合のために)

合理的配慮・適切と思われる配慮

- ★色分けした位取り表
- ★話型カードと手順表
- ★ノートテイクを減らす問題文の貼り付け

学級の支持的風土

- ◆交流が安心して行える座席の設定
- ◆話し合ったペアでの発表場面の設定

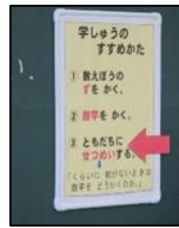
3つの要素をこのように取り入れて指導しました

	主な学習活動	指導上の留意点 (●:UD/★:配慮/◆:支持)
導 入	1 本時学習の方向をつかむ。 めあて 位に数がないときの数字の書き方を、図を使って説明しよう。	●前時までのノートを見るよう促し、板書横に既習内容を提示して、注目を促す。
展 開	2 二百八の数字の表記について考える (1)「二百八」の読み方を確かめる。 (2)自力解決をする。 ・位取り図を書いて、考えを作る。 (3)ペア交流をする。 (4)全体交流をする。	○声に出して読むことで、空位があることに気付くことができるようにする。 ●板書に手順表を提示し、前時までの流れを説明しながら、活動の見通しを示す。 UD ●板書とノート、プリントが合致するよう、構造化して提示する。 ★活動の状況に応じて、位取り図、手順表、話型カードを配布し参照を促す。 配慮 ◆隣の友達と、図や考えを見せ合いながら、考えを確かめる場面を設ける。 支持 ◆話し合ったペアで一緒に発表する場面を設ける。
終 末	3 本時学習のまとめをする。 <まとめ> 位がないときには、0を書く。 ・振り返りシートを記入する。	●振り返りの際に、学習で用いたキーワードを板書に提示する。

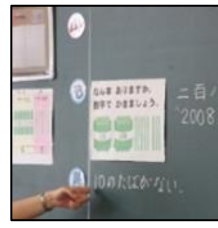
UD

手順、思考の流れ、キーワードの可視化

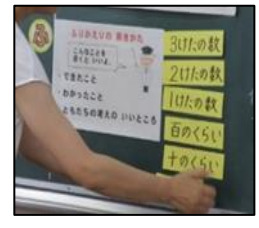
児童が活動の見通しをもつことができるように、学習の流れを提示しました。また、児童が思考しやすいように、板書とノートを構造化しました。まとめでは、振り返る視点として学んだことのキーワードを提示しました。必要な情報を絞って可視化したことで、学習内容の理解につながりました。



【学習の流れの提示】



【板書の構造化】



【キーワードの提示】

配慮

課題に応じた手掛かりの選択場面の設定

児童Eへの支援として、位取り図、手順表、説明の話型カードを準備していました。使い方や効果を説明し、活用するかどうかを本人に尋ねました。児童Eは、位取り図や話型カードを自ら選び、問題解決に活用しました。取組を繰り返すことで、児童E自身が、自分に合った学び方で学習するよさに気付くつあります。



【位取り図の活用を選択する場面】



「校内での動き：Point1」で示したように、サポートヒントシートの活用、特支Co等との連携によって工夫した手立てです。

支持

図や考えを見せて伝え合うペア交流

交流時には、図や書いた文を見せながら懸命に考えを伝えようとする姿が見られました。日頃からの、見せ合うことも交流であるとする指導が、安心して思いを表現できる学級の支持的風土を醸成しています。答えを確かめ合った後には、自信をもって挙手し、発表する姿が見られました。



【ペア交流の様子】

授業者のコメント



課題解決の手掛かりとなる教材・教具を複数準備して、選択を促すことは自分に合った学び方があるのだということを児童が気付くために、大切なことであると感じています。また「自分でやりたい」という思いをもつ児童の気持ちを尊重しながら、さらに細かい手立てを工夫していきたいです。

このような
本時目標で

余りの処理を説明する活動を通して、場面や目的に応じ、余りを切り上げたり切り捨てたりする場面があることを理解することができる。

このような
実態の児童たちが

算数への関心・意欲が高い。全体的に、自信をもって考えを伝えたり発表したりすることを苦手な児童もいる。

支援を要する児童Fの実態

解決の見通しをもつことが難しい。図や表があれば、問題の意味を理解できる。

学習の見通しをもち全員が参加できるように

問題の意味を理解し、解決の見通しをもつことができるように

全員が安心して発表できるように

ユニバーサルデザインの視点

- 問題場面の説明のアニメーション化と提示
- 活動の順序を示す手順ボードの提示と移動

合理的配慮・適切と思われる配慮

- ★必要な情報を整理し、考えを文章化するための「説明シート」(全体への指示や黒板上に示す図、手順などの情報が含まれている)

学級の支持的風土

- ◆考え方の視点の提示
- ◆聞き方・伝え方の指導

3つの要素をこのように取り入れて指導しました

	主な学習活動	指導上の留意点 (●:UD/★:配慮/◆:支持)
導入	1 前時までの学習を確認する。 2 余りを切り上げる問題を読む。 めあて あまりの数をどうするか考え説明しよう。	★●本時で求める余りのイメージを視覚的に捉えることができるよう、アニメーションを用いる。 UD
展開	3 余りを切り上げる問題を解く。 (1) 題意を確認し、自力解決をする。 (2) ペア交流後、全体交流をする。 4 余りを切り捨てる問題を解く。 (1) 問題文を読み、題意を確認する。 (2) 全体で立式し、答えと余りを出す。 (3) 余りを切り上げるか切り捨てるか考える。	●切り上げの処理を視覚的につかむため、余りの数に印を付けるよう促す。 ★●順を追って活動できるよう手順ボードを掲示する。 ★説明シートを渡す。 ★問題の意味を理解し、考えを書くことができるように、説明シートの使い方を確認する。 配慮 ◆話すことを明確にするための考え方の視点を確認し、提示する。 支持 【視点】「あまりの数は何か」 「あまりの数を切り上げていいか」 ◆考えを認め合えるように、ペア交流では体を向けて最後まで考えを聞くように指示する。
終末	5 本時でできるようになったことや友達の考えのよさを話し合う。	●話し合った考え方や解き方のイメージを視覚的にとらえることができるよう、ICTを用いて提示する。

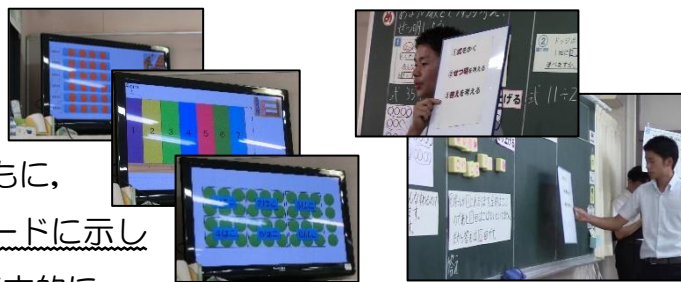


活動への参加を保障する視覚的な手立て

問題場面のイメージと解決
の手順の共通理解は重要であると考え、

問題場面をアニメーション化するとともに、
問題解決の手順を簡潔に可視化してボードに示し
ました（手順ボード）。手順ボードは基本的に、

問題の近くに置き、児童が問題を解きながら常に確認できるようにしました。



【問題場面のアニメ】 【手順ボードの提示】



「校内での動き：Point2」に示された研究協議で共有した有用な支援について、単元の内容に応じて工夫していきました。



見通しをもちやすくする説明シートの活用

学習全体や、問題解決の見通しをも
ちやすくするために、全体に指示することや、
黒板上で示す図、手順、考えを文章化する際の
話型などの情報を一枚の紙にまとめ、「説明シー
ト」として児童Fが活用できるようにしました。

説明シートのおかげで見通しをもつことができ、学習内容の理解につながりました。



【取り組む箇所の確認】 【説明シートの活用】



交流の視点の共有と、聞き方・伝え方の確認

普段から「相手に体を向けて聞く」等の聞き方・伝え方について指導を重ね、
一人一人の自己存在感を高めています。

交流活動では、全員で視点を明確にして
共通理解したことで、余りの処理につい
て、友達の考えを取り入れたり、自分の
考えを修正したりして、考えを深めるこ

とができました。このことは、共感的人間関係を育成することにもつながりました。



【考え方の視点の提示】 【安心できる聞き方・伝え方】

授業者のコメント



3つの要素を取り入れた授業を行うことで、支援を要する児童だけでなく学級全員の学習内容の理解につながりました。また、安心して自信をもって発表したり交流したりする姿が増えたと感じています。

このような
本時目標で

日常生活の中での単位量あたりの考え方が用いられる場面を知り、2つの観点から量の大きさを比べることができる。

このような
実態の児童たちが

学習に意欲的に取り組む。数直線図が表すことを理解して立式したり、手順に沿って課題解決したりすることが苦手な児童もいる。

支援を要する児童Gの実態

複数の事象を同時に処理することは難しいが、情報を1つずつ確認すれば処理できる。

解き方の手掛かりを得ることができるように

既習内容を使って、複数の事象を順序立てて処理できるように

考えを確かなものにするように

ユニバーサルデザインの視点

- 前時までの学習を提示
- 活動の順序を示す手順表の提示

合理的配慮・適切と思われる配慮

- ★ 事象に関する数の色分け
- ★ 指示内容を個別に1つずつ確認する場面の設定

学級の支持的風土

- ◆ 選んだ解決手法ごとに、色分けして、考えが同じ人同士で交流し、確かめてから全体で交流する場面の設定

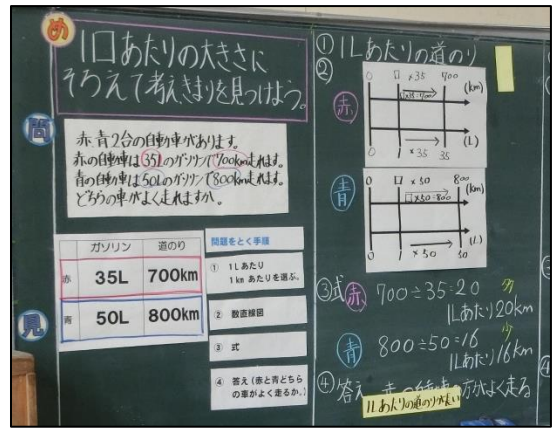
3つの要素をこのように取り入れて指導しました

	主な学習活動	指導上の留意点 (●:UD/★:配慮/◆:支持)
導入	1 前時までの学習を想起する。	● 前時までの学習 (数直線の書き方) の掲示物を示して、内容の想起を促す。
展開	2 本時のめあてをつかむ。 めあて 1単位あたりの大きさにそろえて考え、きまりを見つけよう。	★ 板書上の文章題の中から、手掛かりとなる数が、2つずつあることに気付くことができる 配慮
	3 異なる燃料量で異なる距離を走る2台の車のうち、どちらが良く走るのかについて考える。 (1) 考えを作る。 (2) 交流する。	● 板書に手順表を提示し、前時までの流れを説明しながら、活動の見通しを示す。 UD
	4 本時のまとめをし、適応題を解く。 <まとめ> 1単位あたりの数をわる数にして考えるとよい	★ 文章題での色分けを手掛かりに、立式も2つずつあることを説明し、板書する。 ◆ 同じ考えの友達と考えを確かめ合うよう促す。 支持
終末	5 本時でできるようになったことや友達の考えのよさを話し合う。	○ 考え方のイメージを視覚的に捉えることができるよう、アニメーションを用いて提示する。

配慮

色分けによる、問題に含まれる情報の整理

問題に含まれる複数の事象の意味と関係を理解できるように、「事象①に関する情報は赤、事象②に関する情報は青」など、色分けして印を付けました。児童Gは、色を手掛かりにして立式し、問題を解決することができました。



【文章題の色分け】

UD

複雑な解決の道筋を、クリアに示した手順表

問題に複数の事象が含まれるため、情報を整理したり立式したりする上で児童が混乱してしまうことが予想されたことから、解決の道筋をクリアにした手順表を提示しました。手順は、短い文章と番号で示し、簡潔にしました。全ての児童は、手順表を手掛かりにして、思考を止めることなく自分で問題を解くことができました。



【手順表】

支持

考えを確かめ合う場の設定

普段から、自分の考えが確かなものになるよう、友達と確認する場を設けています。日常的に取組を進めているので、児童たちはどのようにして確かめ合うのか理解して臨んでいます。確かめた後、不十分な点に気付いた場合は、付加修正して全体交流で発言します。最終的に、全員「できた」につながるように心掛けています。



【確認のための交流場面】



「校内での動き：Point 3」で述べたように、日頃から「様々な考え方がること」や「確かめ合うことの価値」を伝えるようにしています。

授業者のコメント



全ての児童が学習内容を理解するために、既習事項をどのように関連させて解決させるかが課題でした。この点は学年主任と頻りに検討しました。

3つの要素を取り入れることで、支持的風土がさらに醸成され、自分の学び方に対する自信をもつ児童が増えました。

事例 4

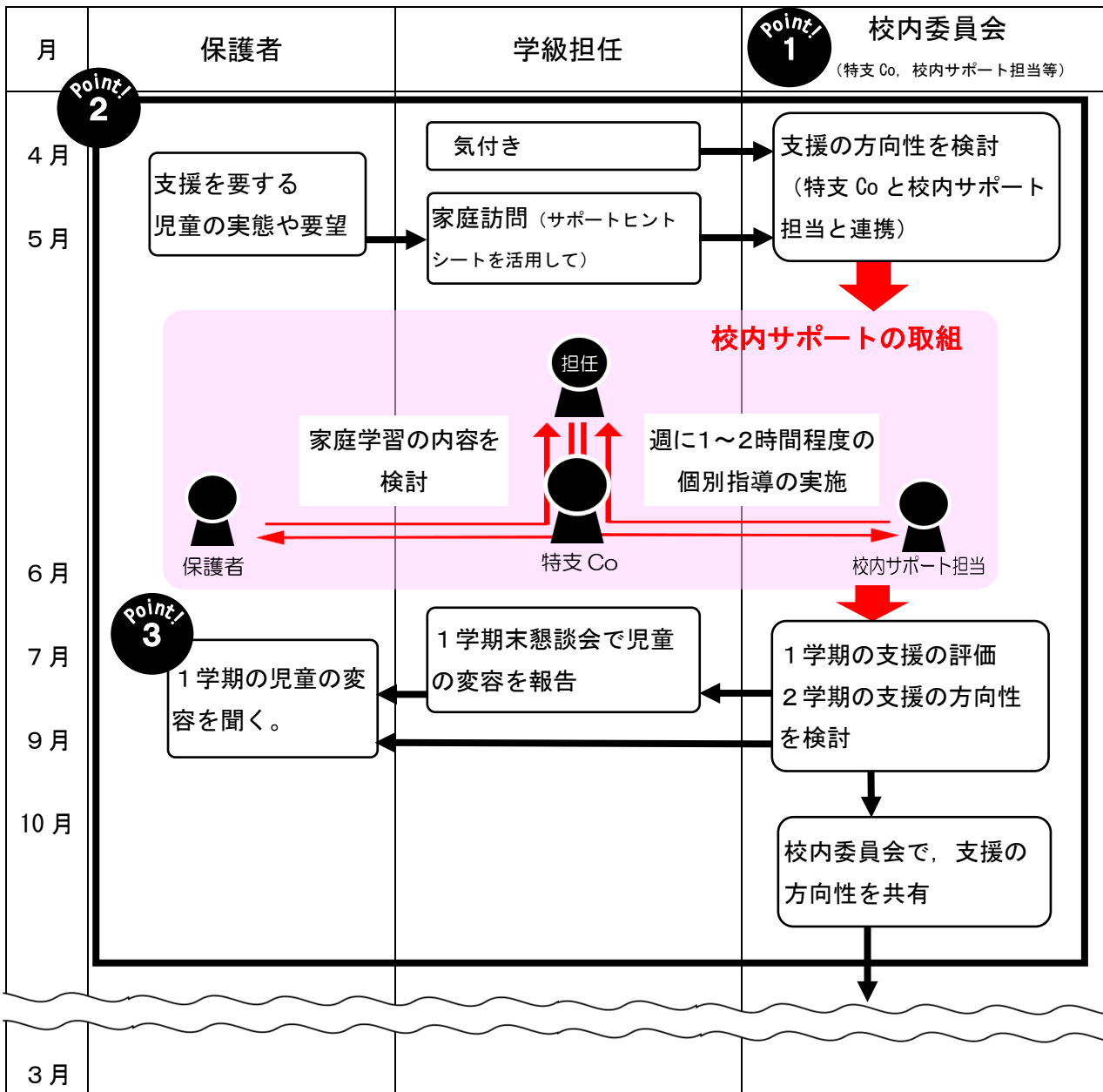
小

学級担任と校内委員会が協働し、保護者と連携して支援体制の構築に取り組んでいるD小学校

校内での動き

通常の学級に在籍する、学習上の困難さがある児童を対象にした少人数指導を「校内サポート」として校内支援体制の中に位置付けている学校です。担任、特支 Co、校内サポート担当が連携をとり、校内サポートを受ける児童の個別の支援を検討し、計画的に個別指導をしています。

校内研修においては、学級の支持的風土づくり（協働学習）に重点を置いた取組を行っています。算数科を中心に、児童が協働的に学びを深めていくことを目指して取り組んでいます。



Point!
1

学習上の困難さを把握し、支援システムにつなぐ校内委員会

校内委員会は、年間を通して計画的に開催しています。校内委員会は、学級担任の気付きや保護者からの情報を基に児童の困難さを把握・共有し、「支援システム」につなぐ重要な役割を果たしています。「支援システム」とは、通常の学級に在籍する困難さがある児童に対して、学級担任と校内委員会とで保護者と連携して行う支援の仕組みのことです。その中で、特支 Co が学級担任や保護者等の相談窓口となり、関係者をつなぐ役割を担っています。

Point!
2

児童が学びやすい環境づくりを目指す「校内サポート」の取組

通常の学級において、特に学習上の困難さがある児童に対しては、児童に合った学び方で学習内容の習得が図れるよう「校内サポート」の取組をしています。保護者から校内サポートの要望があることもあります。その場合は、教頭が窓口となり、児童の実態や保護者の要望を丁寧に聞き取る面談を行い、校内委員会で支援の方向性を検討し、特支 Co や学級担任、校内サポート担当等につないでいます。校内サポート担当は、学級担任の週案を基に、一人当たり週1～2時間程度の個別指導の計画を立てます。児童の学習状況については、校内サポート担当がサポートノートを通して、児童の変容やつまずきを学級担任や保護者へ伝えるように工夫しています。

Point!
3

児童と保護者の願いを叶えるきめ細かな個別指導

4月の家庭訪問に際して、事前の引継ぎ資料から、「かけ算やわり算」に対する学習内容の習得や定着が十分でないため、つまずくことが多いという児童の実態を把握し、訪問しました。保護者からは、特に算数科の学習内容の理解が十分でないため、宿題の内容を検討してほしいという要望が出されました。そこで、担任は、校内サポート担当と宿題の内容を検討し、児童が家庭で困ることなく力を伸ばすことができるように、「かけ算」の問題を個別に作成したり、補充したりしました。その結果、1学期の保護者懇談会では、取組の成果が上がっている報告を受けました。さらに、保護者の要望を受け、宿題の内容の再検討（かけ算からわり算へ）を行いました。

このような本時目標で 1と0.1, 0.01, 0.001 を数直線で表し、それらの関係を説明する活動を通して、1000分の1の位までの仕組みを捉えることができる。

このような実態の児童たちが 小数の加法や減法は得意である。小数の仕組みや数の相対的な見方が十分に定着していない。

支援を要する児童Hの実態
自分の考えをつくるのが難しい。声掛けをすると困ったことを表現できる。

解決方法の見通しをもつことができるように

自分の考えをつくり、表現することができるように

協働的に学び合うことができるように

ユニバーサルデザインの視点
● 学習の見通しの明確化
● 解決方法の視覚的な掲示

合理的配慮・適切と思われる配慮
★ 交流での意図的なペアリング
★ 数の関係の図式化(個別の支援)

学級の支持的風土
◆ 学び合いの手順の共有化
◆ 様々な考えの友達との交流活動

3つの要素をこのように取り入れて指導しました

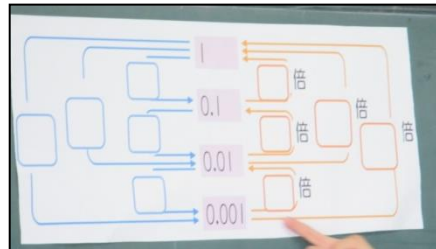
	主な学習活動	指導上の留意点 (●:UD / ★:配慮 / ◆:支持)
導入	1 本時の問題と前時までの学習を比較し、めあてをつかむ。 めあて 1と0.1, 0.01, 0.001 の関係を調べよう。	● 前時の学習内容を提示したり、既習学習を想起させたりしながら、本時との違いを明確にし、問いを焦点化することができるようにする。 UD
展開	2 1と0.1の関係を基に、1と0.1, 0.01, 0.001の関係を考える。 (1)一人学びで小数の関係を考える。 (2)協働学びでそれぞれの考えを伝え合う。 (3)全体交流で小数の仕組みをまとめる。 3 小数と整数を比較し、十進位取り記数法の考えを拡張する。	★ 自分の考えがもてない児童Hに対して、解決方法の見通しがもてるように、ペアリングを工夫したり、それぞれの数の関係を図式化し個別に説明したりする。 配慮 ● 学び合いの手順を示し、共有化する。 ◆ 数直線をもとにペアで1と0.1, 0.01, 0.001の関係を説明する交流活動を通して、1000分の1の位までの小数の仕組みを理解することができるようにする。 支持
終末	4 練習問題を解き、学習を振り返る。	○ 練習問題に取り組み、振り返ったことをノートに記述させる。



学習や解決の見通しを明確にする視覚的な支援

導入段階では、前時の学習と比較することで、本時の問題との違いに気づき、本時のめあてを明確にすることができるようにしました。また、1と0.1、0.01、0.001の関係を表した関係図を提示することで、

数直線を用いて、それぞれの関係を考え、それぞれの関係を考え、それぞれの関係を考えるという見通しをもつことができるようにしました。



【数の関係図や既習学習の提示】



安心して学び合える意図的なペア活動

自分の考えをつくったり説明したりすることが苦手な児童Hに対して、解決の方法を見いだすために、意図的なペア活動（協働学び）を行ったり、それぞれの数の関係を図式化し個別に支援したりしました。児童Hによく声を掛けてくれる児童とのペア活動ができるように配慮したことで、「自分の考えと同じだな。」ということに気づき、児童Hは自信をもって他の児童と交流することができました。

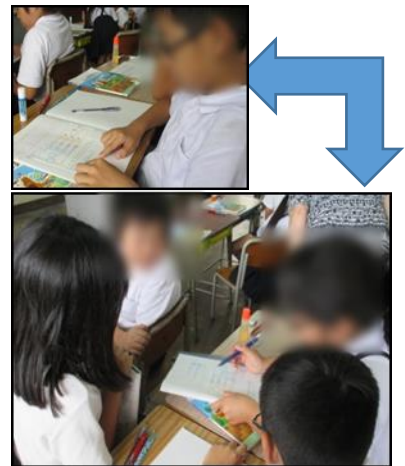


「校内での動き：Point 1」で述べたように、学級担任が把握した児童の困難さを校内委員会で共有し、算数専科教員がペアリングを工夫しました。



自己存在感を味わう学び合いの工夫

展開段階では、解決方法の見通しをもつために、一人学び→協働学び→全体交流という学び合い※に学校全体で取り組んでいます。そのため、学習活動の様々な場面で自然に学び合う姿が見られます。このような学び合いを通して、児童同士の間関係も深まり、自分の考えに自信をもつことができるようになっていきます。



【一人学びから協働学びを行う児童の様子】

※この手立ては、p. 16 で示した内容と関連しています。

授業者のコメント



一人学び→協働学び→全体交流という学校全体で行っている学び合いにより、児童が自分の考えをしっかりともてるようになってきました。学級担任や校内サポート担当の情報を基に、児童Hに対する個別の支援（意図的なペア活動）を行うことで、自信をもって自分の考えを友達に説明することが少しずつできるようになってきています。

このような
本時目標で

小数÷小数につながる考え方である、整数÷小数の計算の仕方について、数直線とわり算の性質を使って説明する活動を通して、除数を整数にする方法を見いだすことができる。

このような
実態の児童たちが

整数のわり算の計算の仕方はよく理解できている。小数の意味や表し方についての理解が十分でない。

支援を要する児童 I の実態

問題場面から必要な情報を取り出し、関連付けるのが難しい。かけ算はできる。

解決方法の見通しをもつことができるように

情報を関連付け、解決方法を見出せるように

自己存在感をもち学び合うことができるように

ユニバーサルデザインの視点

- 既習学習の提示
- 学び合うポイントの掲示
- 課題の焦点化

合理的配慮・適切と思われる配慮

- ★ 意図的な座席の配慮
- ★ 数直線図を用いた個別の指導・支援（机間指導）

学級の支持的風土

- ◆ 自己決定の場の位置付け
- ◆ 様々な考えの友達とのスクランブル交流

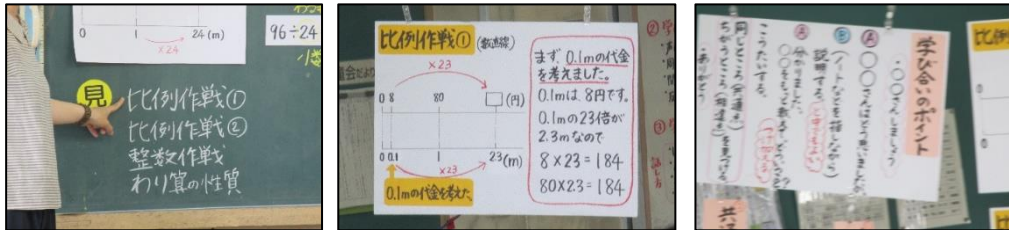
3つの要素をこのように取り入れて指導しました

	主な学習活動	指導上の留意点（●：UD／★：配慮／◆：支持）
導入	1 前時の学習を想起し、本時のめあてをつかむ。 めあて「わる数が整数ならできる」ことを生かして、(整数)÷(小数)の計算の仕方を考えよう。	● 課題を明確にするために、前時の問題との違いを問うたり、既習学習の提示をしたりすることで、めあてを焦点化することができるようにする。 UD
展開	2 整数÷小数の計算の仕方を考える。 (1)一人学びで計算の仕方を考える。 (2)協働学びでそれぞれの考えを交流する。 (3)全体交流で整数÷小数の計算の仕方をまとめる。	★ 答えの見通しをもつことができるように、数直線図を提示する。グループ構成を工夫したり、個別の支援を行ったりする。 配慮 ● 解決方法の見通しをもつことができるように、数直線や式を提示する。 ◆ 自分や友達の考えを比較検討することができるように、解決方法を板書に整理し、自分の考えを自己決定することができるようにする。 支持
終末	3 練習問題を解き、学習を振り返る。	○ 本時習得した数理の有用性を実感できるように、練習問題を提示したり、振り返ったことをノートに記述する活動を設定したりする。



視覚的な支援を中心としたユニバーサルデザインの視点

導入段階では、前時の学習との違いを基に、本時のめあてを明確にすることができるよう、発問を焦点化したり、既習学習や学び合いのポイントの提示を行ったりしました。この手立てにより、学習のゴール像が明確になり、見通しをもちながら学習を進めることができました。



【解決方法の見通しをもたせるための既習学習や学習の進め方の提示】



特支 Co や校内サポート担当からの情報を生かした個別の支援

問題場面から必要な情報を取り出し、既習の知識と関連付けることが苦手な児童Ⅰに対して、解決方法が見出せるように、数直線図等を用いて、答えの見通しをもたせたり、個別の支援を行ったりしました。また、この支援は全員の児童にとっても有効な手立てであると考え、既習学習に帰着しながら、掲示物を基に説明しました。児童Ⅰだけでなく、他の児童も解決方法への見通しをもつことができました。

「校内での動き：Point2・3」で述べたように、特支 Co やサポート担当からの情報を生かして、数直線図を活用する等、担任は適切な支援を行いました。



自己決定の場を位置付けた協働的な学び合い

展開段階では、解決方法の見通しをもつために、一人学び→協働学び→全体交流という段階を学校全体で取り組んでいます。そのため、一人学びにおいて、自分なりの解決方法をもてた児童は、ペアで相手を変えながら、自分の考えと友達の考えを比較検討するスクランブル交流を行っています。板書に整理されたそれぞれの考えに、ネームカードを貼る自己決定の場を設定することで、多様な考えに気付いたり、自分の考えに自信をもったりすることができました。



【スクランブル交流後の自己決定の様子】

授業者のコメント



校内サポート担当との連携により、どのような支援をすることが効果的なのか明確になってきました。また、その支援は、学級の他の児童に対しても有効です。児童Ⅰへの日常の支援については、次の3つのことを心掛けています。①指示は分かりやすく明確に行う。②学習を進める手掛かりとなる掲示物を提示する。③一斉学習における机間指導は最初に行う。

上記の支援により、児童Ⅰは小数のわり算の理解が深まっています。

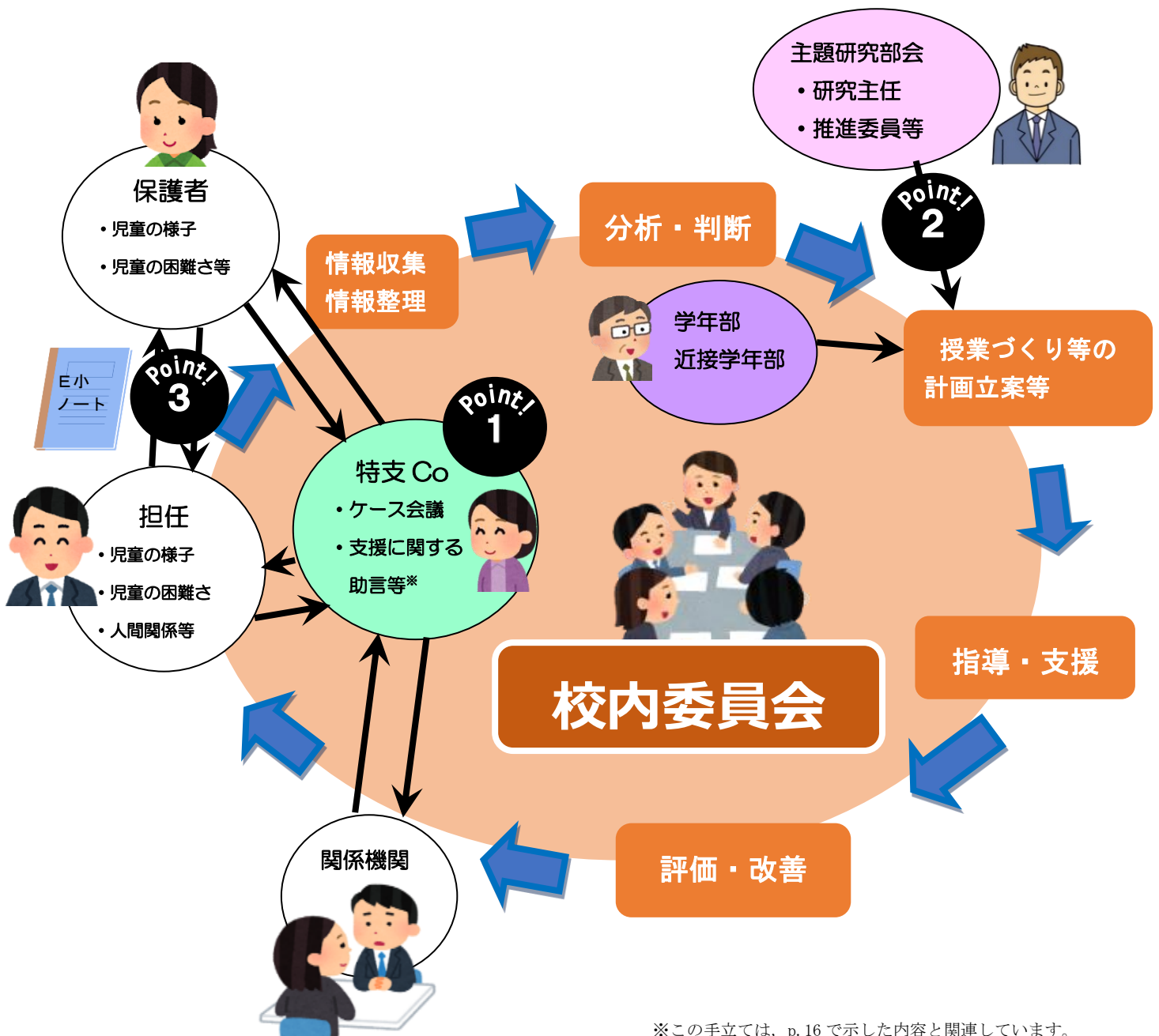
事例 5

小

校内委員会を機能化して、支援体制の構築に取り組んでいる
E小学校

校内での
動き

担任の気づきを支援につなぐために、特支 Co や研究主任が中心となり、校内委員会を機能化して支援体制の構築を目指している学校です。特支 Co や管理職は、気づきの内容について、担任が気軽に相談したり発信したりすることができる環境づくりに努めています。担任と保護者をつなぐ、「E小ノート」の役割も重要です。また、主題研究部会は校内委員会と協働して、国語科を中心に、ユニバーサルデザインの視点を生かして学びを深めていく校内研修に取り組んでいます。このように、一人一人の児童に応じ、多様な学びを保障する校内支援体制づくりを目指しています。



※この手立ては、p. 16 で示した内容と関連しています。

Point!
1

担任、保護者、関係機関をつなぐ特支 Co

担任や保護者等の相談窓口となり、関係者をつなぐ役割を特支 Coが行っています。年間を通して計画的に開催される校内委員会では、支援を要する児童の状況や保護者からの情報を共有し、具体的な支援内容を検討するなど、支援体制構築のために運営を工夫しています。特支 Co は、日常的に相談を受けたり、指導・支援のための助言をしたりしながら、担任を支えています。このように、校内委員会を機能化し、活用しながら全校児童の情報共有を図り、安心して学べる環境づくりに努めています。

Point!
2

全職員が協働して作り出す主題研究

言語活動の充実と全員が「分かる」授業づくりを目指し、国語科を中心に主題研究を行っています。主題研究部が中心となって、学年部、近接学年部、校内研究推進委員会などの既存の組織を活用しながら、学習環境づくりや学び合いのための仕組みづくりなどに取り組んでいます。支援を要する児童への具体的な支援は、授業者任せにせず、研究授業の前後で、全員による検討・評価を行います。

Point!
3

児童と保護者と担任をつなぐ「E小ノート」等の工夫

4月、担任は、前担任から支援を要する児童に関する情報を引き継ぎ、実態を把握します。さらに、家庭訪問での聞き取りの内容も含め、学年部会等で児童の困難さや支援の内容を共有します。その後も、担任は、保護者と情報を交換しながら支援を続けます。担任と保護者をつなぐツールとなっているのが、児童が毎日書く「E小ノート（連絡帳と自主学習が一体となったノート）」です。担任は、児童ができていることを中心にコメントを書きます。保護者との信頼関係を築いたり、児童に自己肯定感を与えたりすることにつながっています。

○月○日 明日の連絡	担任のコメント
宿 持 連	
【日記】	
	保護者のコメント

【E小ノート】

このような
本時目標で

時を表す言葉や理由を表す言葉に着目させることを通して、倒れていたたんぽぽの軸が起き上がって伸びていく様子とそのわけを読み取ることができる。

このような
実態の児童たちが

書かれていることの大体の内容を読み取ることができる。説明の順序の意味を考えたり感想をもって読んだりしたことは少ない。

支援を要する児童Jの実態

左耳が聞こえにくい。情報を聞いて理解することは難しいが、具体物を提示すると理解できる。

学習の見通しをもつことができるように

内容を理解することができるように

共感的人間関係づくりができるように

ユニバーサルデザインの視点

- 既習学習や挿絵の提示
- 学習の進め方の提示

合理的配慮・適切と思われる配慮

- ★ 聞きやすい座席の配慮
- ★ 読みを深めるVTRの提示
- ★ キーワードの提示

学級の支持的風土

- ◆ 話し方・聞き方モデルの提示
- ◆ 交流活動の工夫

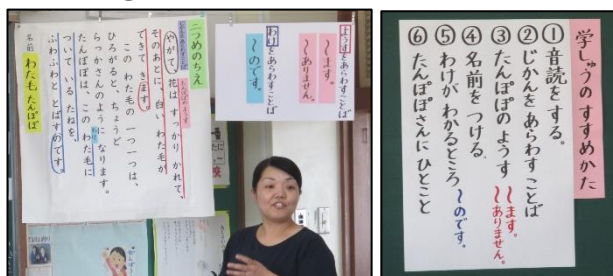
3つの要素をこのように取り入れて指導しました

	主な学習活動	指導上の留意点 (●:UD/★:配慮/◆:支持)
導入	1 前時までの学習を振り返り、本時のめあてをつかむ。 めあて たんぽぽのちえ③を読みとろう。	●たんぽぽのちえ①, ちえ②をまとめたことを想起することができるように、前時までの学習掲示物やワークシートで振り返る活動を設定する。 UD
展開	2 「たんぽぽのちえ」の第6, 7段落の、ちえ③とそのわけを読み取る。 (1)第6, 7段落を音読する。 (2)時を表す言葉を見つける。 (3)たんぽぽの様子を読み取る。 (4)たんぽぽの軸がのびていくわけを話し合う。 3 ちえ③のわけを本文から書き抜く。 4 たんぽぽのちえ③を読み取って、思ったことや感じたことを書く。	●時間を表す言葉は黒丸、たんぽぽの様子が分かるころには赤のサイドラインをひくように指示したり、学習の進め方を提示したりする。 ★読み取ったわけを記述できるように、ヒントになる言葉を提示し、記述する内容を選択できるようにしたり、個別に支援したりする。 配慮 ◆一人一人の思いや考えをしっかりと聞いたり話したりするための交流活動(ペア交流)を設定したり、話し方・聞き方モデルを提示したりする。 支持 ★読み取った内容への理解を深めることができるように、VTRでたんぽぽの様子を提示し、指示棒で着目するところを示すようにする。
終末	5 本時学習の振り返りをする。	○自分の考えを書くときに、ヒントになる言葉や文末表現を掲示し、ノートに記述できるようにする。



読みの見通しをもたせる工夫

前時までの学習を想起させるために、学習掲示物や挿絵を基に振り返らせました。そうすることで、たんぼぼのちえ③も、前時までに身に付けた読み方で読めそうだという見通しをもたせることができました。また、一連の読み方や印の付け方などをまとめた「学習の進め方」を提示することで、学習活動全体の見通しをもたせることもできました。



【既習学習等や学習の進め方の掲示】

配慮

特支 Co や学年部からの情報を生かした個別の支援

児童 J への支援として、いくつかのキーワードや解決のヒントになる言葉を文字として提示しました。読み取ったわけを書く際には、その中から必要なものを選んで書くよう促しました。また、VTR 視聴時には、指示棒の先を大きくして着目すべきところを指し、児童 J の注目を促しました。児童 J は大切な情報を落とさずに学習活動に取り組み、たんぼぼのちえを読み取ることができました。



【着目すべき箇所を指示】

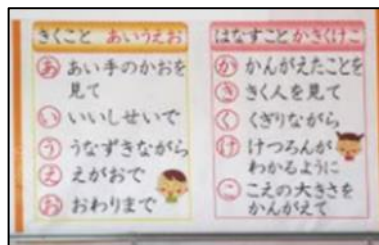
「校内での動き：Point 1・2」で述べたように、学級担任が把握した児童の困難さを校内委員会で共有し、適切な支援を行いました。



支持

安心して学び合う工夫を基にした共感的人間関係づくり

担任は、普段から「間違ってもいいよ」という言葉が掛けています。そのおかげで、児童は自己存在感をもって安心して学んでいます。また、話し方・聞き方モデルを教室前面に掲示し、日常的に互いの考えを確かに聞いたり話したりする指導をしています。どの児童も自分の思いや考えを自信をもって発言することができています。



【話し方・聞き方モデル】



【読み取ったことを交流している様子】

授業者のコメント



特支 Co との連携により、どのような支援をいつ行うことが効果的か明確になってきました。また、その支援は、学級の他の児童に対しても有効です。読み取ったわけを書く際には、語群からキーワードを選べるようにするなどの支援を行うことで、児童 J は少しずつ文章の内容を読み取ることができるようになりました。

このような
本時目標で

4つの事柄を取り上げた筆者の意図は何か考える活動を通して、事例は読者を主張に共感させる効果があることに気づき、主張と事柄との関係を考えながら、自分の考えをまとめることができる。

このような
実態の児童たちが

資料と文章を対応させながら、筆者の意図を考えることができつつある。筆者の主張について自分の考えをまとめることはしていない。

支援を要する児童Kの実態

手順が理解できると自分の考えを整理したり、表現したりすることができる。

授業展開の見通しをもつことができるように

自分の考えを整理したり表現したりできるように

自己存在感をもち共感的人間関係づくりができるように

ユニバーサルデザインの視点

- 既習学習の提示
- 手順表の掲示
- 板書とワークシートの連動

合理的配慮・適切と思われる配慮

- ★ 自分の考えをまとめるための書き方モデルの提示

学級の支持的風土

- ◆ 共通点や相違点を基に交流する工夫（共感バロメーター）
- ◆ 自己決定の場の位置付け

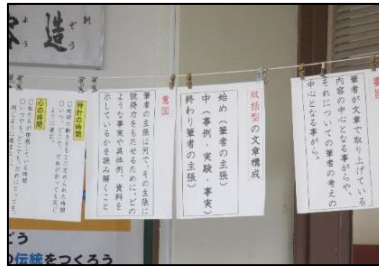
3つの要素をこのように取り入れて指導しました

	主な学習活動	指導上の留意点（●：UD／★：配慮／◆：支持）
導入	1 前時までの学習を振り返り、本時のめあてをつかむ。 めあて 4つの事例を挙げた筆者の意図をとらえよう。	● 本時のめあてをつかみ、焦点化することができるように、前時にまとめた要点や手順表を提示し、主張と事例の内容を振り返る活動を設定する。また、児童が主体的に筆者の意図を読み取ることができるために、板書とワークシートを連動する。 UD
展開	2 事例①から事例③の順番で取り上げた筆者の意図を話し合う。 (1)事例①を最初に取り上げた筆者の意図について話し合う。 (2)事例②、③を続けて取り上げた筆者の意図について話し合う。 3 視点を変えた事例④を取り上げた筆者の意図を話し合う。	◆ 自分の考えをもって交流に臨ませるために、事前に予習をさせ、一人一人の読み取った内容を確認する。 ◆ 身近な体験を基にしている事例①を最初に取り上げた意図を捉えさせるために、事前に調査した「共感バロメーター」を提示し、その理由について話し合う。 支持 ● 実験結果の事例を続けて示した筆者の意図を捉えさせるために、既習の実験の経験を想起することができるようにする。
終末	4 本時学習の振り返りをする。	★ 見通しをもって自分の考えをまとめることができるために、書き方モデルを提示する。 配慮



読みの力を培うための導入段階の工夫

前時までの学習を想起させるために、学習掲示物や手順表をもとに振り返りました。そうすることで、前時までの読みの技を確かめながら、本時のめあてをつかむことができました。また、板書とワークシートを連動するように工夫することで、児童が見通しをもち、主体的に内容を読み取りながら、筆者の意図にせまる姿が見られました。



【既習学習等や手順表の掲示】



全員の児童の考えを可視化する手立ての工夫

担任の言葉掛けが常に穏やかで落ち着いた雰囲気の中、学んでいます。一人一人の思いや考えを明確にするために、「共感バロメーター」を提示し、自分と同じ考えの友達の存在に気づき、読み取ったことを自信をもって発言する姿が見られました。

担任は、児童が自分の考えを明確にしながらか学習に臨めるように、事前に予習をさせ、一人一人の読み取った内容を整理しています。

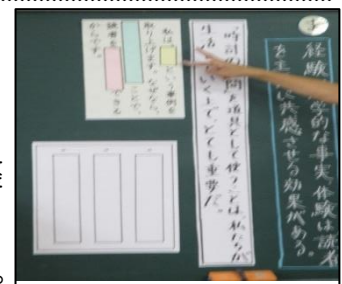


【共感バロメーターの提示】



事前研修会で検討された「書き方モデル」

児童 K への支援「書き方モデル」は、事前研修会で話題になったことをヒントにして考えました。「書き方モデル」とは、とらえた筆者の意図や主張を振り返り、自分の考えを書く際に使用するものです。文例の中に、事例の種類、内容、効果を書き込む枠を色分けして提示したことで、児童 K は、自分の考えを整理して書くことができました。研究授業に限らず、日常的に、授業や児童についての悩みを相談して、ヒントをもらっています。



【書き方モデルの提示】



「校内での動き：Point 1」で述べたように、特支 Co と連携して、学級担任が適切な支援を行いました。

授業者のコメント



「E 小ノート」から家庭学習の様子や学習の定着度を把握し、つまずきに
 応じた課題を児童 K に出しています。筆者の意図を読み取る予習を課題とした時は、保護者の了承を得た上で、下校前に予習の手順を説明したり、課題を一緒に解いたりして、解き方の見通しがもてるように支援しました。

事例 6

小

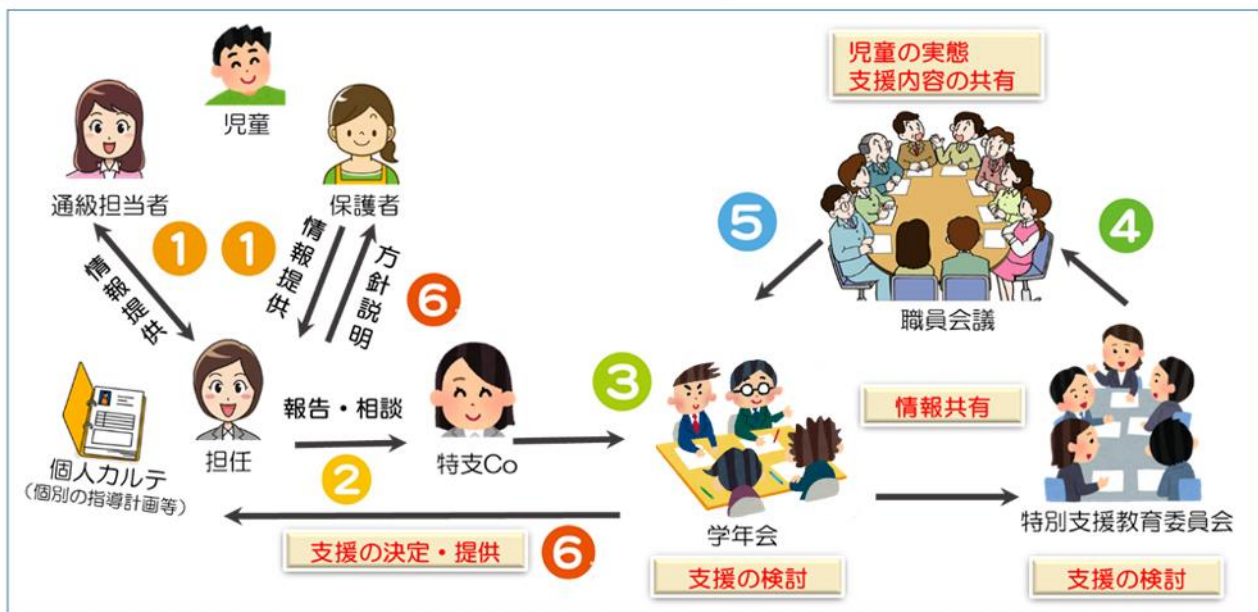
担任及び特支 Co を中心に校内組織及び保護者と連携・協働し、授業づくりにおける具体的な支援を検討している F 小学校

校内での動き

児童一人一人を大切にしたい授業づくりを心掛けています。支援を要する児童に対しては、合理的配慮・適切と思われる配慮を提供するために、担任及び特支 Co が中心となり、児童の情報収集と支援内容の検討を校内組織、保護者と連携・協働して推進している学校です。

情報収集と情報共有が連携・協働の要！

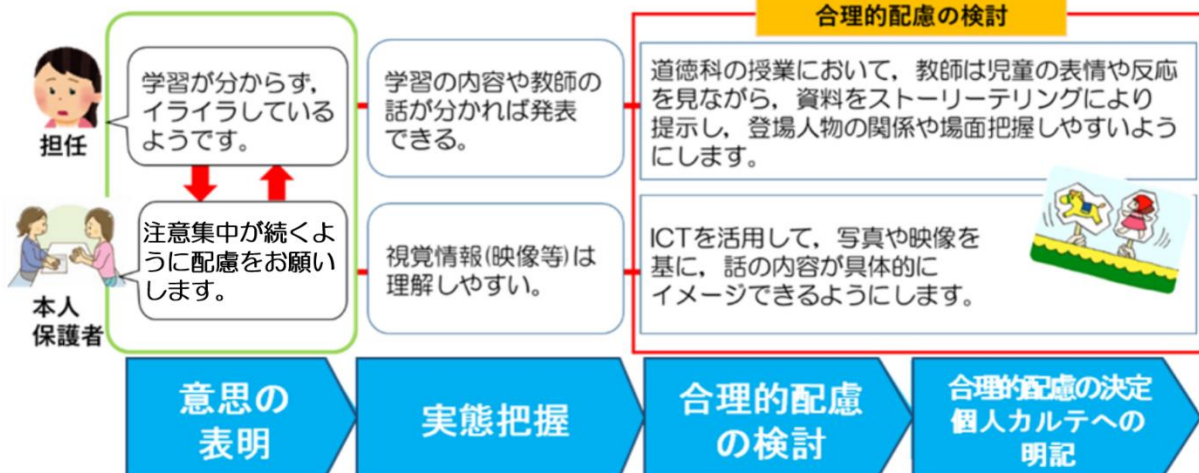
①～⑥は、支援の決定・提供までの手順



支援は焦点化する！

Point!
3

合理的配慮は焦点化し、具体的に提供します。



Point!
1

「報告・連絡・相談」の情報を共有する場の設定

学年会では、週の時間割や行事等の連絡・調整はもとより、中心内容は、児童の支援について情報を共有し、共通理解を図ることです。その情報は、校内委員会を経て、職員会議等でも共有します。担任は、支援を要する児童についての具体的な内容を「個人カルテ」に記入し、次年度以降も引き継ぎます。支援を要する児童の情報共有は、年間3回（5，9，2月）、全体で行います。

Point!
2

できる文脈で支援体制を具体的に伝えることで、保護者も安心

児童の様子を伝える際、つまずきだけを一方的に伝えると、保護者も不安になります。そのため、個別の支援を拒んだり遠慮されたりしたこともありました。そこで、保護者に支援の方針を伝える際には、どのように支援をしていくのかを具体的に伝えるようにしました。まず、担任は特支 Co や学年と連携して支援内容を検討します。次に、担任と特支 Co は、検討したことを校長に相談し承認を得ます。そして、どのような支援があればできるようになるか、という視点から、支援体制や支援内容、その効果を丁寧に説明します。こうすることで、保護者は安心し、個別の支援について合意形成を図ることができました。

Point!
3

合理的配慮・適切と思われる配慮を焦点化して提供する

学習上の困難さがある児童に個別の支援を提供する過程においては、学年会や校内委員会で、担任の気づきや保護者からの情報などをすり合わせ、困難さの背景にある要因を探ることを大切にしています。

例えば、学習中イライラしているある児童に関して、様々な情報のすり合わせから、学習中に集中が続きにくい要因は、聞くことによる情報処理の苦手さにあるのではないかと考え、視覚情報を中心とした合理的配慮を提供することを決定しました。このような経緯があり、道徳科においては、五感に訴える指導方法（場面の把握を促す映像資料、資料のストーリーテリングによる提示等）の開発に至りました。

本校では、普段から情報を共有し合える風通しのよい環境づくりに努めています。また、校内のOJTを活用して、3つの要素を取り入れた授業実践について、互いに学ぶ機会を設けています。情報共有ができる校内環境は、支援を要する児童への具体的に効果のある支援提供が可能になると同時に、担任の抱え込みを防ぐことにもつながります。



F 小学校 第2学年 道徳科「相手を思いやって」 B-(6)親切, 思いやり 「ぐみの木と小鳥」

授業の
実際

このような
本時目標で

相手のことを考えた親切な行動は、相手も温かい気持ちになることを理解し、相手のことを考え、困っている相手に優しく接しようとする態度を養う。

このような
実態の児童たちが

困っている友達に優しい言葉掛けができるが、親切や思いやりが自分本位になってしまいうことがある。

支援を要する児童Lの実態

授業や課題に対して、興味・関心が向けば、集中して取り組むことができる。

問題場面や葛藤場面を視覚的に把握できるように

集中を持続し、問題場面や状況把握できるように

自分の考えをもち、交流場面で安心して発表できるように

ユニバーサルデザインの視点

- 映像的資料の提示 (ビジュアル)
- 問題場面の焦点化 (シンプル)

合理的配慮・適切と思われる配慮

- ★ 資料のストーリーテリングによる提示
- ★ 注意の集中を促してから、指示を出すこと

学級の支持的風土

- ◆ 登場人物に自分を置き換える、投影的発問により、人物の行為の意味を考える自己決定の場の設定

3つの要素をこのように取り入れて指導しました

	主な学習活動	指導上の留意点 (●UD / ★配慮 / ◆支持)
導入	1 アンケートを基に、生活経験を想起し、本時学習のめあてについて話し合う。 めあて しんせつには、どんなよいことがあるのかを考えよう。	○主題の価値に対する経験を掘り起こし、問題意識を焦点化するために、アンケート結果をまとめたものを提示する。
展開	2 「ぐみの木と小鳥」を基に、親切にするものの価値について考え、話し合う。 (1) りすにぐみの実を届けた小鳥の気持ちについて話し合う。 (2) 自分だったら、「嵐の中、りすのところへ行くか」を考え、話し合う。 (3) 小鳥が嵐の中、りすのところへ行った理由について話し合う。 3 親切にするものの意味や価値について、話し合う。	★ 児童が場面把握や登場人物の関係を把握できるように、教師は読み物資料を暗記し、ストーリーテリングにより提示する。 ● 問題場面の把握を促すために、資料の要点を示した掲示物を提示する。 ● 嵐をイメージできるように、嵐の様子を映像と音で提示する。 ◆ 自分だったら嵐の中「行くか、行かないか」を選択・決定する自己決定の場を設定する。 ◆ 道徳的行為の後の快感情を共有したり、道徳的価値のよさを実感したりできるように、役割演技の場を設定する。
終末	4 本時学習のまとめをし、これからの生き方について考える。	○道徳的実践意欲を喚起するために、日常場面の写真を提示する。

配慮

集中を促す合理的配慮・適切と思われる配慮の提供

児童Lが問題場面や状況を把握することができるように、ストーリーテリングの手法を用いて資料を提示しました。教師は、読み物資料を暗記し、児童の表情や反応を見ながら考えさせたい場面を印象付けるようにして話しました。児童Lは顔を上げて聞き、考えを表現することもできました。

児童Lのための支援でしたが、全ての児童にとっても学びやすい支援となりました。



【資料のストーリーテリングによる提示】



【考えを書く児童】



合理的配慮の内容は、日常観察による担任の気づきを基に、特支Coへの相談や学年会及び特別支援教育委員会での支援の検討を経て決定していったものです。

UD

問題場面の把握を促すユニバーサルデザインの視点

全員が問題場面を把握できるようにするために、資料の読み聞かせの後に、資料の要点を構造化した掲示物を使って、登場人物の立場や相互の関係を確認しました。また、登場人物の道徳的行為の意味を理解させるためには、嵐の状況を共通理解しておく必要があると考え、嵐の様子を動画で見せました。児童は相手のことを思う行為の価値に気付くことができました。



【要点を構造化した掲示物】

支持

道徳的行為の判断場面における学級の支持的風土の醸成

登場人物の行為の意味を理解できるように、「自分が小鳥だったら、嵐の中でも、りすのところに行くか」という行為を選択・決定できる自己決定の場を設定しました。また、行為の後の快感情に共感できるように、役割演技を行い、感想を交流させました。交流の場では活発な意見交流が見られ、児童一人一人が学習に参加しているという意識を高めることができました。



【役割演技の様子】



【感想交流の様子】

授業者のコメント



3つの要素を取り入れた授業を行うことで、支援を要する児童だけでなく、学級全員の学習意欲の向上につながりました。また、他教科の学習においても、問題解決に粘り強く取り組もうとする姿勢が見られるようになりました。

このような
本時目標で

法やきまりは自分や周りの人が気持ちよく安全に生活するためにあることが
分かり、法やきまりを自ら進んで守ろうとする態度を育てる。

このような
実態の児童たちが

罰則があるからきまりは守るという意識
があり、人との関わりの中で、自ら守るも
のという意識が低い。

支援を要する児童 M の実態

興味や関心があるものには
集中を持続して取り組むこ
とができる。

道徳的行為に対する自他の考
えの違いを把握できるように

集中を持続し、問題場面や
状況把握できるように

自分の考えをもち、交流場面
で安心して発表できるように

ユニバーサルデザインの視点

- 行為と意識のずれの視覚化
- ネームプレートの活用

合理的配慮・適切と思われる配慮

- ★ ワークシートの工夫
- ★ 注意の集中を促してから、指示を出す

学級の支持的風土

- ◆ 自由交流と全体交流の場の設定
- ◆ 道徳的行為の実践を促す自己決定の場の設定

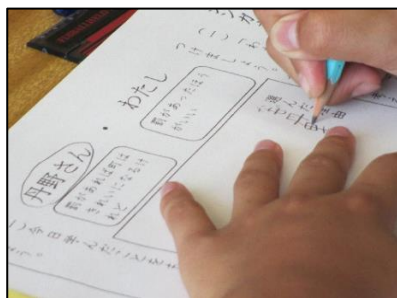
3つの要素をこのように取り入れて指導しました

	主な学習活動	指導上の留意点 (●UD / ★配慮 / ◆支持)
導 入	1 アンケートを基に生活経験を想起し、本時学習のめあてについて話し合う。 めあて きまりを守るときに大切な心について考えよう。	●きまりに対する意識と行為のずれに気付くことができるように、アンケート結果をグラフ化して提示する。
展 開	2 「シンガポールの思い出」を基に、きまりを守ることの価値について考え、話し合う。 (1)きまりに対して「わたし」と「丹野さん」がもっている異なる考えのどちらに共感するか自己決定し、その理由について話し合う。 (2)きまりを守るときに大切な心について話し合う。 3 本時学習した道徳的価値を基に、これまでの自分を振り返り、これからの自分の生き方をノートに書く。	◆きまりに対する価値を考えることができるように、「わたし」と「丹野さん」の行為のどちらに共感できるかを自己選択・決定する場を設定する。 ★共感する人物の行為を選択し、その理由を表現できるように、ワークシートに記述する手順を示す。 配慮 ●登場人物の行為に対する考えの異同を可視化できるようにネームプレートを活用する。 UD ◆きまりに対する自分の考えを発言しやすくするために、自由交流と全体交流を連続して設定する。 支持
終 末	4 本時学習のまとめをし、これからの生き方について考える。	○道徳的実践意欲を高めることができるように、日常の実践場面の写真を提示する。

配慮

集中を持続させる合理的配慮・適切と思われる配慮の提供

児童 M が、登場人物の行為に共感し、その理由を表現できるように、ワークシートを工夫しました。どの欄に、何を、どのような順番で記述するのかが分かるようにしたことで、児童 M は、集中して自分の考えを書くことができ、それを基に、隣の席の友達との交流することができました。



【手順を示したワークシート】



【考えをペアで交流する】



合理的配慮の内容は、個人カルテの支援内容や日常観察による担任の気づきを基に、特支 Co への相談や学年会での支援内容の検討を経て決定していったものです。

UD

問題場面や自他の考えの異同を明確にするユニバーサルデザインの視点

きまりに関するアンケート結果をグラフ化して提示し、意識と行為のずれを視覚的に把握できるようにしました。また、登場人物「わたし」と「丹野さん」の行為のどちらに共感できるか決めた後、ネームプレートを用いて黒板で立場を整理しました。自分と他者は考えが異なることを視覚的にとらえた上で、道徳的行為のもつ意味を双方の立場から話し合うことができました。



【ネームプレートの活用】

支持

交流によって学級の支持的風土を醸成

きまりに対する価値を見出しやすくするために、2人の登場人物の行為のどちらに共感できるか自己決定する場を設定し、その理由を話し合う場を設定しました。また、自由交流によって同じ立場の考えを共有させた後、全体交流を設定して、異なる考えと共通する考えを捉えることができました。



【自由交流の様子】



【全体交流の様子】

授業者のコメント



3つの要素を取り入れた授業を行うことで、教師自身が、児童のよさを見付けて、褒めて、伸ばすことを大切にするようになりました*。その結果、学級に互いを認め合う雰囲気広がってきました。

※この手立ては、p.16 で示した内容と関連しています。

事例 7



中

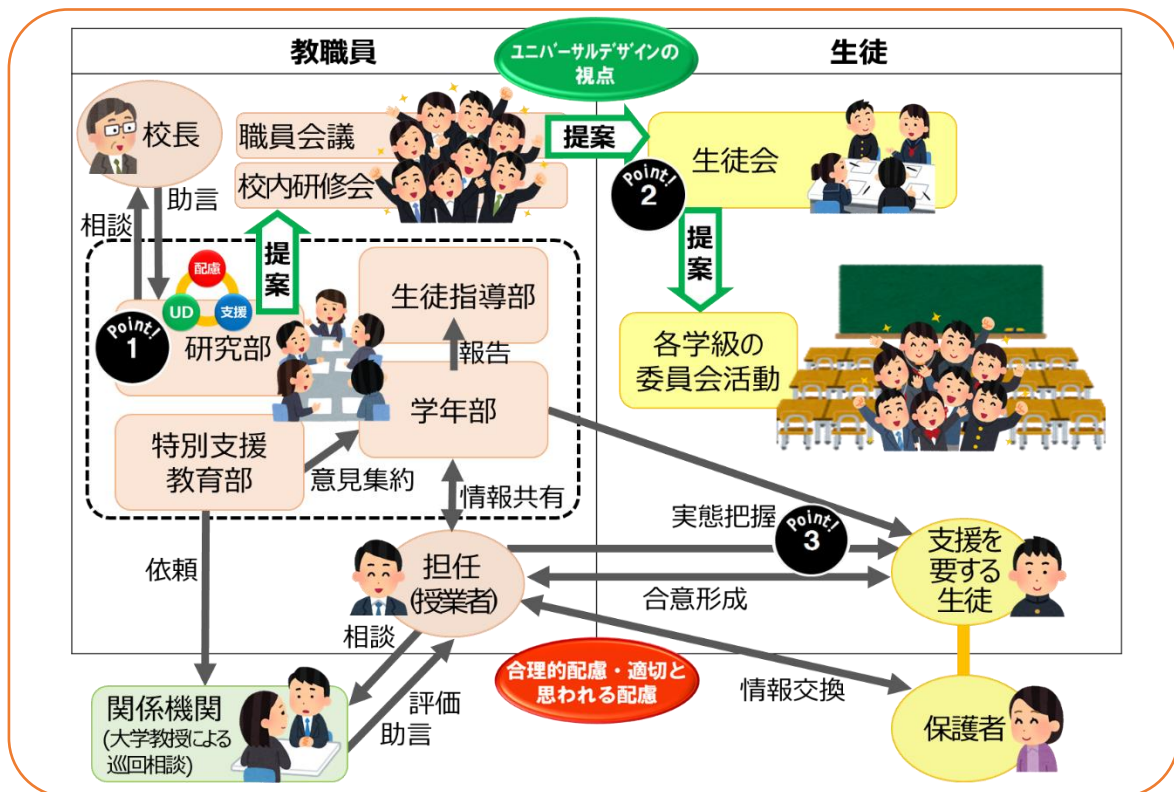
生徒会と連携して教室環境整備や学習規律の確立に取り組んでいるG中学校

校内での動き

ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくりを主題研究として掲げ、教職員が生徒会と連携して教室環境の整備や学習規律の確立に取り組んでいる学校です。全ての教室で統一された教室環境や学習規律に一役買っているのが、生徒会の各専門委員会の活動です。ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくりにおいて授業基盤となる教室環境や学習規律を整える上で、教職員だけでなく、生徒も一緒になって取り組んでいるところが特徴的です。

【生徒会との連携の年間スケジュール及び研究部を中心とした動き】

月	教職員	生徒会
2月	○研究主任：次年度の研究について校長に相談 → 校長：研究主任への助言	
3月	○研究部：次年度の研究構想について校内研修会で提案	
4月	○研究部：生徒会と連携するUDについて職員会議で提案 → 各教師：生徒会定例会で提案 ○学年部：サポートヒントシートの活用 → 担任：家庭訪問で聞き取った内容との整理	◇生徒会定例会で取組の共通理解 各学級で委員会活動の取組
5月	○研究部：校内研修会の実施（3つの要素についての研修）	各専門委員会定例会の実施 （取組の反省や課題の共有）
6月	○研究部：提案授業の実施（研究主任が3つの要素を取り入れた授業を提案）	
7月	●全教職員：学習指導案の作成・提出	
8月	○研究部：学習指導案検討	
9月	●全教職員：一人一実践	
10月	 〈授業公開月間の設定〉 ・教科や学年に関わらず相互に授業参観、意見交換	
11月		
12月		
1月		
2月	○実践のまとめ	
3月	○次年度の構想	



Point!
1

生徒会と一緒に取り組む内容を研究主任が職員会議で提案

年度末に、研究主任が、黒板に貼る「めあて」「まとめ」のカード、生徒の椅子の脚に付ける雑音遮断の脚カバーなど、今あるものと必要なものとを整理しました。4月の職員会議において、生徒会の執行部及び各専門委員会の役割分担について全教職員に提案し、共通理解を図りました。研究主任は、提案内容について事前に校長に相談して助言を受け、提案をスムーズに行うことができました。

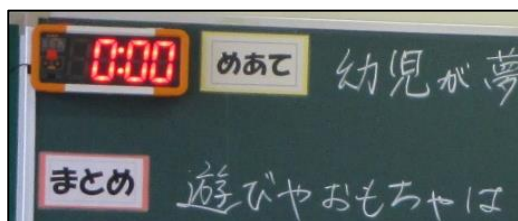
委員会（主な担当場所）	内容	具体的な取組
執行部	号令・チャイム席に関すること	○号令方法 … ①起立（椅子の左）②礼（1・2・3）③着席（椅子の正面に戻って座る） ○チャイム席の取組 … チャイムの前に席に座るよう促す
学習（黒板周辺）	授業の用具に関すること	○学習用具の管理 … カードやタイマーを黒板左上隅に常備する ○振り返りシートの補充 … 定期的に印刷し、教卓内に補充する
文化・厚生（教室後方左）	掲示物や雑音遮断に関すること	○掲示物の更新 … 各種掲示物を確実に更新させる ○雑音遮断の取組 … 椅子の脚カバー（テニスボール）を付ける
図書（前の棚）	配布物や本棚に関すること	○目隠しの設置 … カーテンを設置し、管理する ○棚の中の整理 … 棚の中を常に整理させる 提出物や余った配布物の置き場所を学級で決めておく

【学習規律・教室環境整備に関する役割分担（一部抜粋）】

Point!
2

各委員会の担当教師が生徒に提案し、各学級で委員会活動

研究主任からの提案を受け、4月の各委員会定例会において、各専門委員会の担当教員が、「学習規律・教室環境整備に関する役割分担」について提案しました。各委員会で提案された具体的な取組内容について共通理解を図り、各学級で取り組みました。生徒自身が取組の目的を理解した上で主体的に取り組む、毎月の生徒会定例会で、成果と課題を共有しています。各学級において各専門委員を中心に継続的に取り組むことで、教室は常に整理され、授業の雰囲気も落ち着いています。教職員と生徒会が連携し、継続して取り組める仕組みをつくることができている。



【黒板左上隅に常備したタイマー及びめあてとまとめのカード】



【棚の目隠しのカーテン】



【雑音遮断の椅子の脚カバー】

Point!
3

サポートヒントシートを活用した合理的配慮の提供※

4月に、学年部ごとにサポートヒントシートを活用して、支援を要する生徒の困難さの実態を把握しました。そして、把握した生徒の実態と、家庭訪問での聞き取り内容を照らし合わせる学年部会を行いました。また、生徒指導部会や職員会議で報告して教職員間の共通理解を図るとともに、日頃から校長をはじめ、全教職員で支援を要する生徒に積極的な声掛けを行っています。さらに、保護者との情報交換を密に行い、学校と家庭との共通理解を図っています。

※この手立ては、p.17 で示した内容と関連しています。

このような
本時目標で

幼児の年齢や心身の発達に応じた遊び方を工夫することを通して、発達と遊びの関係について理解を深めることができる。

このような
実態の生徒たちが

幼児と関わることは得意である。具体物の操作や視覚情報など、具体例の提示による体験的な学習における理解度が高い。

支援を要する生徒Nの実態

視覚情報による理解度が高い。情報の入力（聞く）が難しく、セルフイメージが低い。

主体的に学習を進めることができるように

指示内容を理解するとともに、安心して学習に参加できるように

自己存在感をもたせることができるように

ユニバーサルデザインの視点

- めあての焦点化
- 授業の道筋を明確化
- 指示や情報を視覚化
- 交流活動の工夫

合理的配慮・適切と思われる配慮

- ★指示や活動内容の視覚的な提示
- ★交流活動のメンバー構成に配慮
- ★机間指導を優先的に実施

学級の支持的風土

- ◆一人一人の思いや考えが認められる課題の設定
- ◆他者の考えをしっかりと聴く習態度の習慣化

3つの要素をこのように取り入れて指導しました

	主な学習活動	指導上の留意点（●：UD／★：配慮／◆：支持）
導入	1 前時までの学習を振り返り、本時のめあてをつかむ。 めあて 幼児が夢中になる遊び方を考えてみよう。	○学習内容を想起させるために、前時に製作したおもちゃを示し、工夫した点を振り返らせる。 ●ねらいとする学習内容に収束するように、本時のめあてを焦点化する。
展開	2 運動機能の発達と適したおもちゃ、心の発達に応じた遊び方の変化について知る。 3 課題について考え、アイデアを交流する。 〈課題〉年齢を設定し、幼児が夢中になる遊び方のアイデアを考えること (1)個人で考える。 (2)個人で考えたアイデアをグループで交流する。 (3)グループで交流したことを全体で発表する。	●授業の道筋を明確にし、見通しをもたせるために、授業の流れを黒板に提示する。 ●自分の考えをもって円滑で有意義な交流活動を行わせるために、課題を焦点化し、交流活動の手順を明確に示す。 ★●交流活動の手順などの情報を視覚的に捉えさせるために、実物投影機で映し出して説明する。 UD ◆自由な発想が認められる課題を設定する。 支持 ◆交流において、友達の考えをしっかりと聞くことを徹底する。 ★メンバー構成に配慮し、安心して交流に参加できるようにする。 配慮 ★必要に応じて補足説明したり、できたことを具体的な言葉で賞賛して成功体験につなげたりできるように、机間指導を優先的に実施する。
終末	4 本時の振り返りをする。	●めあてに対応したまとめで本時の内容を確認し、「振り返りシートA（記述型）」で自己の成長を実感させる。

UD

課題を焦点化し、手順を視覚化した交流活動

めあてや課題を焦点化することで、生徒の思考がねらいとする学習内容に収束されました。また、交流活動の手順や生徒が記述したワークシート等を実物投影機で映し出すことで、情報を視覚的に捉えさせることができました。これは、視覚情報による理解度が高いという生徒Nの実態を踏まえ、合理的配慮として提供した個別の配慮を、学級全体への支援として広げたいものです。



【余分な掲示がない教室前面及び実物投影機による視覚情報の提示】

課題	グループ交流の手順
課題 幼児が夢中になる遊び方を考え、班で1つのアイデアを提案しよう。	
年齢を設定し、幼児が夢中になる遊び方のアイデアを考えること	1. 自分のアイデアをまとめる (7分) 2. 班で自分のアイデアを発表する (5分) 3. 班で1つのアイデアをまとめる (7分)

【ねらいに基づいて焦点化した課題及び交流活動の手順】



「校内での動き：Point1・2」で述べたように、教室環境や学習規律を生徒会と連携して整えたことにより、学習に集中できる環境の中で授業が行われています。

支持 自分が必要とされている実感をもたせる場の工夫

幼児の年齢、遊ぶ相手と人数、遊び方について、一人一人の思いや考えが認められる課題を設定し、個人のアイデアのよさを認め合う交流を仕組みました。グループや全体の交流では、発表者の方に体を向けて発言を最後まで聴くことを徹底しました。授業の中で、自分が必要とされているという実感をもたせることで、生徒は自己存在感をもつことができました。



【発表者の方に体を向けて発表を聴く授業者及び生徒】

配慮 メンバー構成に配慮した交流活動

肯定的な関わり方をする生徒とのグループ編成（幼馴染みで同じ部活動の生徒、生徒Nの得意・不得意を理解している生徒）にすることで、生徒Nは安心して交流活動に参加することができました。実物投影機で視覚情報を提示したことに加え、人間関係を考慮してグループのメンバーを構成したことで、自信をもって交流活動で自分の考えを発表し、遊びと発達の関係について理解を深める生徒Nの姿が見られました。

「校内での動き：Point3」で述べたように、サポートヒントシートを活用して生徒Nの実態把握を行いました。



【生徒Nの人間関係を考慮したグループ】

授業者のコメント



ユニバーサルデザインの視点を生かした教室環境整備や学習規律の確立に生徒会と連携して取り組む中で、落ち着いた雰囲気の中で授業が進められることのよさを教師も生徒も実感することができています。また、生徒たちが主体的・対話的に学習に取り組めるようになっていきます。

このような
本時目標で

しなければいけないこと、しなくてもよいことを、have to / don't have to を用いて表現することができる。

このような
実態の生徒たちが

英文を書くことを難しいと感じている。
自分の学び方に合うワークシートの選択、
小集団での話し合いを希望する生徒が多い。

支援を要する生徒0の実態

英文を書くことが難しい。自
分の考えに近い英文やヒント
があると書ける。

主体的に学習を進めることが
できるように

自分の考えを書くことがで
きるように

習熟の度合いに応じて学習で
きるように

ユニバーサルデザインの視点

- 授業の道筋を明確化
- 指示や説明を視覚化
- 交流活動の課題の焦点化
- 交流活動の手順の表示

合理的配慮・適切と思われる配慮

- ★ 支援を受けやすい座席配置
- ★ 絵や図、文字やモデルなどの視覚的な提示
- ★ 机間指導を優先的に実施

学級の支持的風土

- ◆ 多様な考えが認められる課題の設定
- ◆ ワークシートやヒントカードの選択

3つの要素をこのように取り入れて指導しました

	主な学習活動	指導上の留意点
導 入	1 前時までの学習を振り返り、本時のめあてをつかむ。 めあて 「have to / don't have to」を使って文章が書けるようになる。	★座席を教卓の前に配置し、支援を受けやすくする。 ●電子黒板を用いて英文、写真及びイラストを提示し、前時の学習を振り返る。 UD
展 開	2 英文を反復練習する。 3 職業について「have to / don't have to」を用いた文章を考える。 (1)個人で考え、ワークシートに書く。 (2)個人の考えをグループで交流する。 (3)英文を短冊に清書し、色画用紙に貼る。 4 職業当てクイズをする。	●授業の道筋を明確にするために、授業の流れを提示する。 ●職業に関するイラストを用いながら口頭反復練習の場を設定する。 ●ジェスチャー交じりのデモンストレーションを行って、英文を考えやすくする。 ●課題を焦点化（What's my job?）し、英文をヒントに職業を当てるクイズを行う活動を仕組む。 ★机間指導を優先して行い、必要に応じて個別の配慮を提供する。 配慮 ★◆職業に関する「Word hints」をワークシートに掲載するとともに、職業ごとのヒントカード①及びヒントカード②（選択肢タイプ）を準備する。 ◆「easy / normal」を選択できるワークシートを準備する。 支持 ●交流活動の手順と視点を明確に示す。
終 末	5 本時の学習を振り返る。	●「振り返りシートB（問題型）」を使って、「have to / don't have to」の表現を使った評価問題を解く場を設定する。

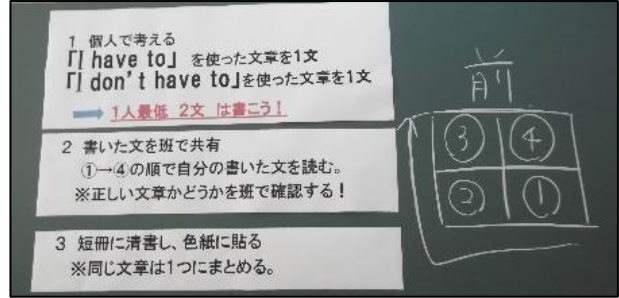


英語表現や説明を視覚的に提示

電子黒板を活用して絵と文字、モデル文を提示して前時の学習を振り返り、職業に関する英文を書きやすくしました。また、交流活動の手順を視覚的に提示し、個人思考の時間を十分に確保した後に、一人一人の考えを交流できるようにしました。手順にしたがって交流することで、全ての生徒の発言を保障することができました。



【電子黒板による絵と文字、モデル文の拡大】



【交流活動の手順を視覚化】



本人の求めに応じた配慮の提供

個人思考の時間には、生徒〇を優先して机間指導を行い、支援を行いました。ヒントカード①（仕事内容や必要な物等を職業ごとに記したもの）や教師の声掛けによって、生徒〇は「doctor」について、しなければいけないこと、しなくてもよいことの英文を、have to / don't have to を用いて書くことができました。



「校内での動き：Point3」で述べたように、サポートヒントシートを活用して生徒〇の実態把握を行いました。

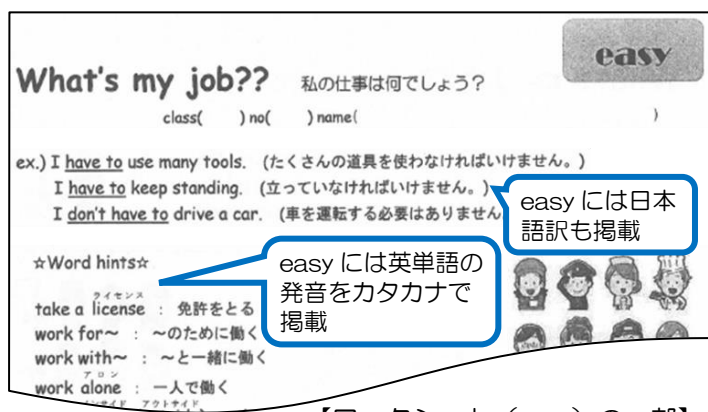
doctor
save lives of people : 人々の命を救う
a white coat : 白衣
hospital : 病院
use many tools : たくさんの道具を使う

【生徒〇が使用したヒントカード①】



習熟の度合いに応じた自己決定

表は normal, 裏は easy の2タイプを掲載したワークシートを準備し、自分の学び方に合わせて自己決定させました。生徒は自分に合うワークシートで、英文をつくりました。また、机間指導をしながら、生徒の希望に応じてヒントカード①を配布しました。自分に合った方法で、安心して学ぶ生徒の姿が見られました。



【ワークシート (easy) の一部】

授業者のコメント



ヒントカードを準備したりワークシートを工夫したりと、3つの要素を授業に取り入れることで、書くことが苦手な生徒も英文を書くことができました。これからも、研究部の提案や助言を基に、生徒一人一人を大切に、「できた・よく分かった」と全ての生徒が実感できる授業づくりを行ってきたいと思います。

事例 8

中

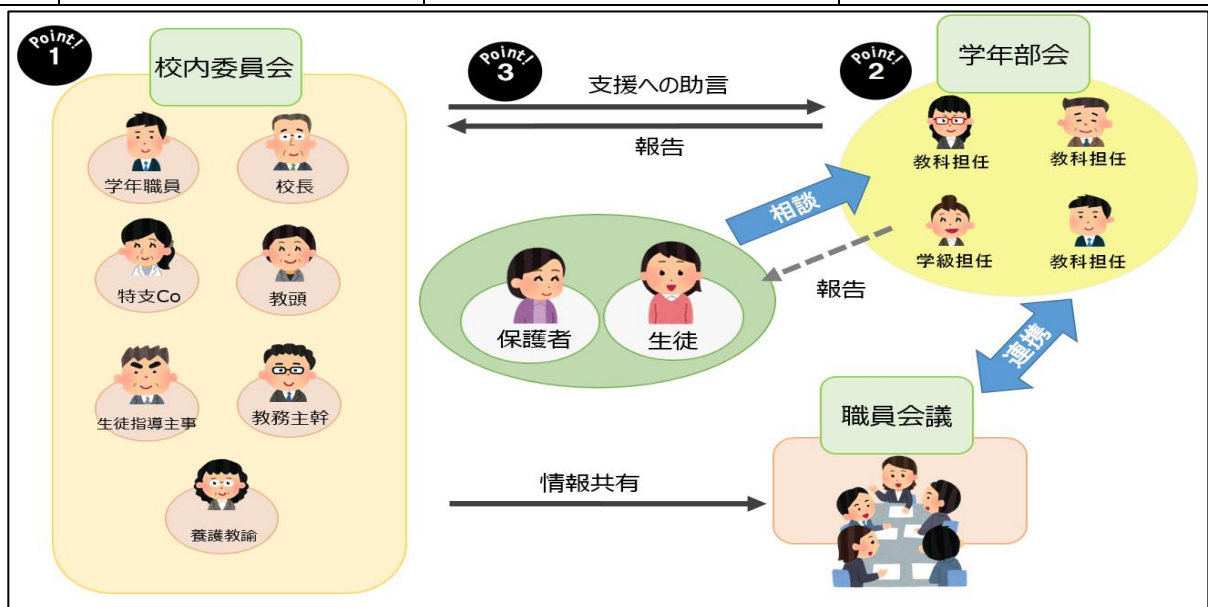
主幹教諭， 特支 Co， 養護教諭， スクールカウンセラー等が協働して， 支援体制の構築に取り組んでいるH中学校

校内での動き

学級の支持的風土づくりに重点を置いた取組を行っている学校です。学級の支持的風土を醸成する3つの視点（自己存在感をもたせる， 共感的人間関係を育成する， 自己決定の場を設定する）を日々の授業等で積極的に取り入れ， 学び合いを通して， 生徒の自己有用感や共感的人間関係の育成に努めています。また， 学校生活アンケート， 生徒理解アンケート等の活用や教職員間の情報の共有を積極的に行い， 各学級の生徒の実態を把握し， 毎月の校内委員会や学年部会で支援等を協議しながら， 学校全体で生徒を支える体制づくりに努めています。

【H中学校の年間のスケジュール】

月	学校行事	校内委員会	全職員
4月	新年度 各学年において， 支援を要する生徒の確認	Point 1 毎月1回定例の校内委員会の開催 (管理職・特支 Co 等)	朝礼の時間 (5分程度) や定例の職員会議等の場での情報の共有
5月	体育祭	Point 3	Point 2
6月	学校行事等で支援を要する生徒等の事前の確認・検討	会議では， 各学年の担当職員が生徒の学校， 家庭での状況を報告し学年の支援の在り方について協議	校内委員会からの情報等を基に， 学年職員でよりよい支援の方向性の検討
7月	学校行事等で支援を要する生徒等の事前の確認・検討	会議では， 各学年の担当職員が生徒の学校， 家庭での状況を報告し学年の支援の在り方について協議	校内委員会からの情報等を基に， 学年職員でよりよい支援の方向性の検討



Point!
1

毎月1回の校内委員会で、支援内容の協議、検討

協議事項は主に支援を要する生徒の生活状況や学習状況、その改善に向けた支援内容の検討についてです。特に、生徒の様子を観察したり、会話したりする機会が多い学年の教職員や養護教諭の情報は、困難さに気付いたり解決したりする上で有益であり、これらの情報を基に様々な解決の方途を協議していきます。

Point!
2

「担任を一人で悩ませない」支援体制づくり

校内委員会からの情報を基に、学年で支援を検討しています。中学校では、学年を中心とした指導・対応を行っていくことが多いため、学年の教職員で支援を要する生徒の実態把握や保護者との情報交換、授業でできる支援の工夫等を検討していきます。学年部会で協議したことは管理職、主幹教諭や生徒指導主事が把握し、必要に応じて学年を支えるメンバー（特支 Co、養護教諭、担任）に偏りがちな負担をチームで支え、管理職が中心となって「担任を一人で悩ませない」支援体制づくりに努めています。



【学年部会での話し合い】

Point!
3

合理的配慮の提供について、校内委員会で協議

小学校からの申し送り事項又は保護者からの要望を基に、主に校内委員会で、合理的配慮の提供について検討します。保護者への聞き取りや本人からの意思の表明を基に、「どうすれば安心して学ぶことができるか」「求められる合理的配慮は学校として提供可能か」といった観点で協議します。

例えば、注意集中において支援を要する生徒に対して、最前列中央の座席にして、教師からの個別の支援を受けやすいようにする等の合理的配慮を提供します。提供した合理的配慮は、個別の教育支援計画に明記し、見直しや引継ぎを随時行っていきます。



このような
本時目標で

未知の白い粉末が何なのかを、いくつかの実験から相違点や共通点を見付けていく活動を通して、物質には固有の性質があることを理解することができる。

このような
実態の生徒たちが

観察、実験で気付いたことを表現することに苦手意識がある。実験の結果から考察、推論をすることが不十分である。

支援を要する生徒 P の実態

分からないことは友人に尋ねる等、学習に意欲的に取り組むことができる。

主体的に学習を進めることができるように

安心して学習に参加できるように

自己存在感をもたせることができるように

ユニバーサルデザインの視点

- 手順表を用いた手順の説明
- 具体物を提示しながら指示

合理的配慮・適切と思われる配慮

- ★ T2 の実験時の操作の支援
- ★ 実験班のメンバー構成に配慮

学級の支持的風土

- ◆ 班内での役割分担
- ◆ 自己の考えを述べる場の設定

3つの要素をこのように取り入れて指導しました

	主な学習活動	指導上の留意点 (●:UD / ★:配慮 / ◆:支持)
導入	1 前時までの学習を振り返り、本時のめあてをつかむ。 〆あて 白い粉末の正体は何か確かめよう。	◆ 前時に決めた役割分担表を生徒に提示する。 ● 実験の手順表を示し、流れを確認する。 ● 具体物を提示しながら、薬品、器具の名称の確認、実験の際の留意点等を説明する。 UD
展開	2 実験を行い、物質の性質を探る。 (1) 色や粒の形、においを確認する。 (2) 水に溶けるか確認する。 (3) 加熱したときの変化を確認する。 (4) 粉末が燃えたら、集気びんで気体を集め、石灰水の変化を確認する。	◆ 事前に確認した役割に基づいて、実験の準備をするよう指示する。 ◆ 班員全員が器具に触れながら実験ができるよう、交代で実験を行うように伝える。 ● 実験の手順表で確認しながら、実験を行うように、声掛けを適宜行う。 ★ 安心して交流に参加できるように、メンバー構成に配慮する。 ★ 活動の際に教師の個別の支援が受けられることができるよう、支援を要する生徒 P に、T2 が積極的に声掛けを行うようにする。 支持 配慮
終末	3 班で話し合い、考えをまとめ、全体で交流する。 4 本時のまとめをする。	◆ 交流の手順と話し合う内容を示し、班で自由に話し合いができるよう、各自で考えを述べる場と班で確認する場を設定する。



実験の手順表を用いた導入段階の工夫

黒板に示した手順表と同じプリントを全生徒に配布し、本時の実験の手順の流れを提示することで、授業の見通しをもたせることができました。また、板書とワークシートを連動させることで、学習内容を視覚的に捉えさせることができました。



全員が役割をもって取り組める活動の工夫

前時に決めておいた、実験準備の役割分担表を基に、全員で必要な器具の準備をしたり、実験中は班員全員が器具に触れることができるようにしたりするなど、全員に役割をもたせたことで、自己存在感をもたせることができました。実験中、分からないことがある場合は、友達のアドバイスを参考に促したり、実験後は、実験結果を班員で確認しながら、記録用紙に記入させたりしたことで、生徒全員が認め合い、支え合っているという実感をもつことができました。



【安心して学習活動に取り組む生徒】



メンバー構成に配慮した班編成

生徒Pが班での学習に安心して取り組むことができるように、メンバー構成に配慮したグループ編成（生徒Pの得意・不得意を理解している生徒）を行いました。また、事前の打合せでT2の教師には、生徒Pの班に積極的に関わり、実験器具の使い方や実験の際の留意点を生徒Pに分かりやすく説明するよう打ち合わせておきました。合理的配慮を提供したことにより、安心して学習に参加して授業に取り組む生徒Pの姿が見られました。



【T2による個別の支援を受ける生徒】

校内委員会や学年部会の情報提供により、生徒Pに対して、T2と連携した対応ができるよう綿密な計画を立て、互いの役割を確認して授業を行うことができました。



授業者のコメント



生徒が安心して学習に参加できるように、手順表を用いて実験の手順を説明したり、班員の構成に配慮したりして、工夫しました。また、どのようにすれば安全に実験ができるかということについても、同教科の教師や指導方法工夫改善教員と十分に打合せをしました。学校全体として取り組むよさを実感しています。

このような
本時目標で

説明文を読み合い評価し合うことで、目的と対象に合った説明の仕方を理解することができる。

このような
実態の生徒たちが

「書くこと」に対して、苦手意識をもっている。説明の仕方や描写を工夫して書くことに課題がある。

支援を要する生徒Qの実態

課題が明確な学習に対しては、粘り強く取り組むことができる。

主体的に学習を進めることができるように

最後まで学習に取り組むことができるように

共感的人間関係を育み、自己存在感をもつことができるように

ユニバーサルデザインの視点

- 「学習計画表」の記入
- 具体物を提示しながら手順説明
- 付箋紙を活用した学習活動

合理的配慮・適切と思われる配慮

- ★ 計画的な机間指導
- ★ 交流活動のメンバー構成に配慮
- ★ 生徒Qを考慮した座席

学級の支持的風土

- ◆ 多様な意見を肯定的に受け入れる評価活動
- ◆ 班での「学び合い」

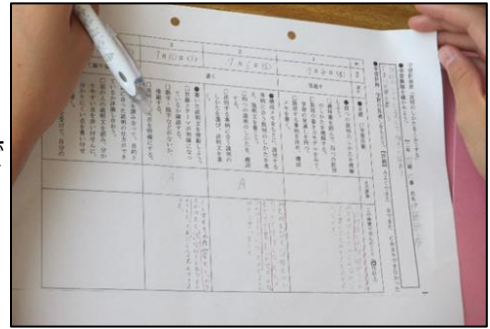
3つの要素をこのように取り入れて指導しました

	主な学習活動	指導上の留意点 (●:UD/★:配慮/◆:支持)
導 入	1 前時までの学習を振り返り、本時のめあてをつかむ。 めあて 説明文を読み合って、目的と対象にあった説明ができていのか評価し合おう。	○前時の学習を想起するために、前時のワークシートを見て学習内容を振り返る場を設定する。 ●活動の流れ等の学習の見通しを生徒がもてるよう、単元のゴール等を示した「学習計画表」に本時のめあてを記入するように指示する。 UD
展 開	2 四人班で、互いの説明文を読み合い、付箋紙を使って評価する。 (1)個人で評価する。 (2)班で相互評価を行う。 (3)もらったアドバイスを基に、自身の説明文を見直す。 (4)説明文の付加・修正を行う。	●具体物を示しながら、評価活動の手順を説明する。 ●分かりやすい点は赤い付箋紙に、分かりにくい点は青い付箋紙に具体的なアドバイスを含めて記入するよう指示する。 ◆多様な意見を肯定的に受け入れるよう、否定的な評価はせずに、よさや改善点を書くよう伝える。 支持 ◆班での評価を共有する場面では、話型を与えずに、班の中で自由な交流ができるようにする。 ★活動の際に教師の個別の支援を受けることができるよう、支援を要する生徒Qに対し、積極的に声掛けを行う。 配慮
終 末	3 本時の振り返りをする。	●「学習計画表」に本時の成果や次時の目標を記入するよう指示する。



主体的に学習できるようにする工夫

クリアの視点から、単元のゴールや学び方、学習の手順、目標・学習活動をまとめた「学習計画表」を作成・配布※しました。生徒が、自分で本時何をどのようにして学ぶのかをとらえやすいため、全員に学習の見通しをもたせることができました。このことが、生徒が主体的に学習を進めることにつながりました。



【学習の見通しをもたせる「学習計画表」】

※この手立ては、p.17で示した内容と関連しています。



共感的人間関係を育み、自己存在感をもたせるための交流

展開段階では、四人班で互いの説明文を読み合い、評価活動をさせました。友達の良いところを付箋紙に記入させ、その後、班で交流をさせました。こうした交流は、日頃から「学び合い」として位置付けています。よさを認め合う学び合いの積み重ねで、共感的人間関係が育成され、自己存在感をもつ生徒が増えました。



【班で交流活動を行う生徒】



生徒Qが最後まで活動に取り組める座席及び班の構成

友達からもらったアドバイスを基に自分の作品を見直す時間では、個別の時間となるため、支援を要する生徒Qに対して意図的な机間指導を行い、授業の内容を補足説明したり、出来ている点を認めたりして、自信をもって学習できるようにしました。そのため、座席を前の方にしたり、生徒Qの座席近くに、生徒Qの特性を理解した友達を意図的に配置したりするなどの配慮をしました。生徒Qは、安心して最後まで授業に集中して取り組むことができました。



【教師の個別指導を受ける生徒Q】

個別の活動では、教師が積極的に声を掛け、学習内容の理解を確認したり、一人で学習活動に取り組めるよう解決の見通しを共に考えたりと、実態に応じた支援を行っています。



授業者のコメント



「書くこと」が苦手な生徒に対して、題材を「自分の好きなこと」としたこと、4つの説明の仕方の中から自分が一番書きやすい説明を選択させたことで、意欲的に説明文を書くことができていました。

事例 9

高

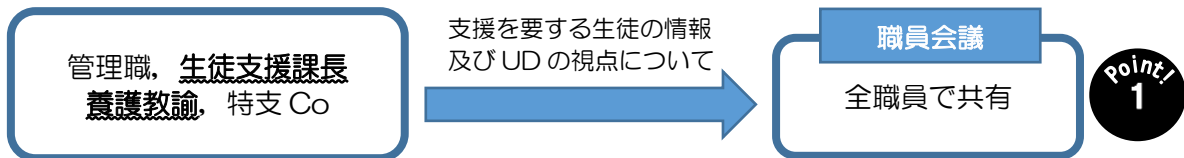
インクルーシブ教育推進校として、ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくりに取り組んでいる I 高等学校

校内での動き

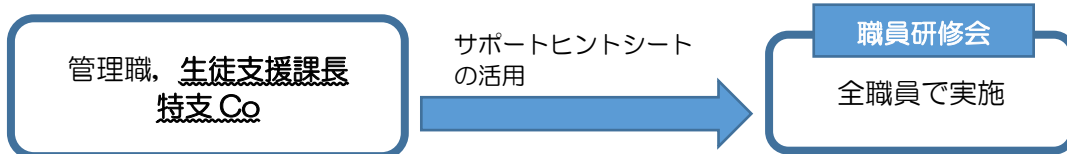
平成22年度から平成24年度まで、文部科学省より「高等学校における特別な教育的ニーズに対応するための教育課程及び指導方法に関する研究開発」についての研究指定を受け、ソーシャルスキルトレーニングに関する学習指導案及び教材等の開発に取り組んでいる学校です。特別支援教育に関する教職員の意識も高く、教職員間の連携の下、積極的にユニバーサルデザインの視点を生かした授業を行っています。

【教職員間の主な連携】

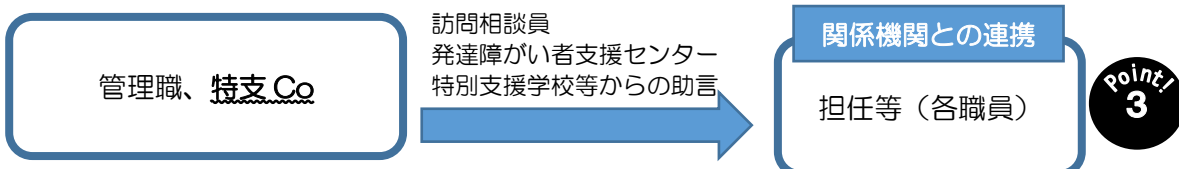
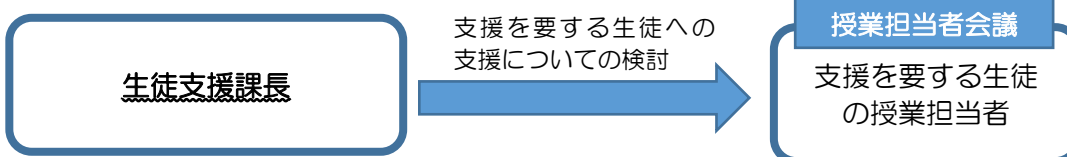
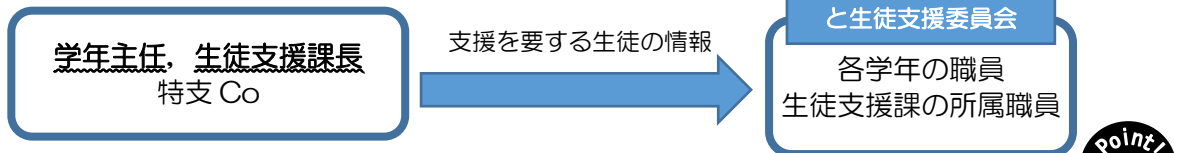
《年度当初（年度当初以外でも必要に応じて実施）》



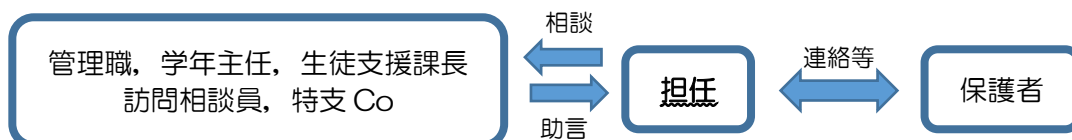
《夏季休業中》



《年間を通して》



【保護者との連携】



※部は主担当者

Point! 1

年度当初の組織的な取組

3月末に中学校との連絡会を実施しており、新1学年担当の学年主任・担任が参加し、支援を要する生徒の情報を収集しています。その際、個別の教育支援計画等を中学校より引き継いでいます。4月初旬の職員会議では、全学年の支援を要する生徒に関する状況と支援方法等の共有を図ると

ともに、1高等学校独自で作成したUDの視点を生かした授業づくりに関する冊子*を基に短時間の研修会を行い、教員の共通理解を図っています。その効果もあり、普段の授業においては、UDの視点を生かした授業づくりに加え、分かりやすいプリントの作成や机間指導時の生徒への声掛けなどにも気を配っています。また、進路部と生徒支援課が協力して主管し、SSTを取り入れた授業を各学年年間5回程度行っており、学級の支持的風土の醸成を図っています。したがって、支援を要する生徒が所属する各学級では、生徒同士が他の生徒の状況をよく理解しており、見守り、支え合う姿が見られます。

「わかる授業」づくりに向けてのルール

- ① コマの授業の組み立て（目標（めあて）・活動・まとめ）を工夫しましょう。
- ② わかりやすい発問、指示に努めましょう。
（短く、あまり多くの情報を一度に伝えようとしない）
- ③ ノートの取り方、書き方等の指導を確実にいきましょう。
- ④ 用語や解説は、わかりやすい言葉を用いて説明しましょう。
- ⑤ わかりやすい話し方と的確な指示、声の大きさに配慮しましょう。
- ⑥ 適切な言葉づかいを心がけ、正しい言葉づかいの指導に努めましょう。
- ⑦ 宿題、課題の提出日や提出方法等の指示を明確にしましょう。
- ⑧ チャイム着席の指導、指示を根気強く行いましょう。

【UDの授業づくりに関する冊子の一部抜粋】

第2回 ソーシャルスキルトレーニング

テーマ：コミュニケーションの基本

★**伝える人は相手が自分の話を理解しているかを確認しよう!**

★**聞く人は相手の話がよくわからない時は必ず聞き返そう!**

【SSTを取り入れた授業資料】

※この手立ては、p.17で示した内容と関連しています。

Point! 2

年間を通しての組織的な取組

毎週開催される各学年会議において、支援を要する生徒（気になる生徒）の情報共有を行い、それを受けて、生徒支援委員会（生徒支援課、特支 Co、人権教育課）を行い、生徒情報の共有と支援の在り方について検討し、必要に応じて支援を要する生徒の授業担当者会議（支援方法等の共有）を行っています。



【生徒支援委員会における情報共有の様子】

Point! 3

関係機関との連携

関係機関との連絡調整は特支 Co が中心に行っています（校内の支援に関する内容は、生徒支援課長が中心に行っています。）。

現在、発達障がい者支援センターや特別支援学校からの巡回相談や SSW、SC と連携をしています。また、進学先の大学に配慮事項を伝え、高等学校と大学の接続の充実も図っています。

このような
本時目標で

6世紀の東アジア情勢とヤマト政権内での蘇我氏の勢力拡大を関連させて理解するとともに、推古朝における厩戸王と蘇我馬子の中央集権国家を目指したそれぞれの政策について、その目的・歴史的意義等を考えて整理する。

このような
実態の生徒たちが

意欲的で積極的に発言する生徒が多いが、自尊感情が低く、消極的な生徒もいる。

支援を要する生徒Rの実態

運動部に所属し、活動的である。聴覚に障がいがあり、説明等の聞き取りが難しい。

学習内容の深い理解につなげるために

教師の説明や協議内容を理解するために

他者の意見を尊重し、考えを深めるために

ユニバーサルデザインの視点

- 電子黒板の利用
- 手順表、発問の明確化

合理的配慮・適切と思われる配慮

- ★補聴支援システムを使用
- ★机・椅子の脚にボール

学級の支持的風土

- ◆発言する機会を保障
- ◆グループ協議の設定
- ◆グループ協議の仕方の提示

3つの要素をこのように取り入れて指導しました

	主な学習活動	指導上の留意点（●：UD／★：配慮／◆：支持）
導入	1 飛鳥時代の学習内容を確認する。 (1)本時の授業の流れを確認する。	★補聴支援システムを用いる。 ○飛鳥時代の様子を簡潔に説明する。 ●本時の授業の流れを板書する。
展開	2 飛鳥文化について学習する。 (1)文化史における3つのポイントを整理する。 ・時期 ・時代的特徴 ・文化的特徴 (2)文化作品を確認する。 ・寺院建築：資料集で確認 ・仏像：グループ討議 (電子黒板に提示) ・その他の作品：資料集で確認	○学習プリントを配付する。 ◆グループで協議させた内容を全体で発表させる。 ●説明を簡潔に行う。 ●電子黒板で仏像の写真を映す。 ◆北魏様式と南朝様式の違いについてグループ協議させる。 ●説明を簡潔に行う。
終末	3 本時の内容を確認する。	○学習プリントの記述内容を確認させる。

配慮

合理的配慮・適切と思われる配慮の提供と対象生徒の様子

生徒Rには、補聴支援システムの送信機（教師用と生徒用のマイク）の場所について配慮（教師は首に掛け、生徒は発表の際にごく自然にマイクをもって発表する等）を行いました。生徒Rは教師の指示や説明を理解し、課題に取り組む姿が見られました。また、グループ協議の際も他者の話す内容を理解することができ、積極的に交流する姿が見られました。



【補聴支援システム活用の様子】



生徒Rに対する支援は、「校内での動き：Point2」の生徒支援委員会で検討し、授業担当者会議で支援方法の共有を行っています。

支持

学級の支持的風土を醸成する手立て

グループ協議（4人～5人）では、協議方法を事前に説明し板書して示しました。全ての生徒に発言する機会を保障することで、どの生徒も安心して自分の意見を発言していました。また、他者の意見を尊重しながら自他の考えを伝え合うことで、考えを広げ深めることができ、学習内容の深い理解につながっていました。



【グループ協議の様子】

UD

ユニバーサルデザインの視点を生かした手立て

教室環境は、生徒の集中を妨げる刺激を与えないように、整理されています。教師の説明や指示等も、シンプルで分かりやすく工夫されていました。授業の流れを導入段階で確認し、板書することで、いつでも確認できるようにしていました。また、電子黒板を有効に利用し、言葉だけではなく、視覚からの情報も与えることで学習内容の深い理解につながりました。



【電子黒板を活用している様子】

UDの視点を生かした授業づくりは、「校内での動き：Point1」の取組で共通理解を図っています



授業者のコメント



今日の授業では、支持的風土に重点をおいて指導しました。昨年度から授業にSSTを取り入れ、学級の支持的風土の醸成ができています。本時でも支持的風土を醸成する手立てを講じたことで、生徒Rはグループ協議で意欲的に発言していました。将来の社会生活のことを見据えて、継続して支援していきたいです。

このような
本時目標で

習得した知識を基に、新たな課題を解決しようとする意欲・態度を高める。
また、教材や発表内容を可視化することにより、言語活動を活発にするとともに
お互いを思いやる気持ちを育む。

このような
実態の生徒たちが

英語の授業に対しては消極的であり、授
業中に自らの考えを表現することが苦手な
生徒が多い。

支援を要する生徒Rの実態

運動部に所属し、活動的であ
る。聴覚に障がいがあり、説
明等の聞き取りが難しい。

学習内容の深い理解と、言語
活動を活発にするために

教師の説明や発表内容を理解
するために

お互いを思いやる気持ちを育
むために

ユニバーサルデザインの視点

- 本時の流れの可視化
- 電子黒板の利用
- 生徒の発表の反復と板書による可視化

合理的配慮・適切と思われる配慮

- ★ 補聴支援システムを使用
- ★ 教師の口の動きを顕示
- ★ 生徒の発表を板書

学級の支持的風土

- ◆ 生徒相互のチェック活動
- ◆ バズリーディング活動

3つの要素をこのように取り入れて指導しました

	主な学習活動	指導上の留意点 (●:UD/★:配慮/◆:支持)
導入	1 本時の学習内容を確認する。 (1)本時の授業の流れを確認する。 ① 教科書 check ⑤ 新出語句 ② 予習 check ⑥ 内容把握 ③ 音読 ⑦ 英問英答 ④ How Many Stars ⑧ 連絡	★補聴支援システムを用いる。 ●本時の授業の流れを可視化する。 配慮
展開	2 新出語彙・文型について学習する。 (1)予習のチェックを行う。 (2)音読練習をする。 (3)内容を把握する。	◆生徒相互によるチェックの言動を確認する。 ★スピーカー等の電子音は聞き取れないため、 モデルリーディングを行う。 ◆バズリーディングを設定する。 ●電子黒板を利用する。 ●★生徒の発表を反復、板書によって可視化する。 ○発表内容を共有し、思考のポイントを的確にする。 ○英問英答の際、助言を与える。 支持 UD
終末	3 本時の内容を確認する。 (1)本時を振り返る。 (2)次時の確認をする。	○本時の学習内容を確認させる。 ○次時の学習内容について確認する。

合理的配慮・適切と思われる配慮の提供と対象生徒の様子

配慮

生徒Rには、補聴支援システムの送信機（教師用は首に掛けたマイク）を使用し、授業を行いました。授業では、スピーカー等の電子音や英語独特の発音も聞き取りにくいので、教師の口の動き方を見せることで、生徒Rは教師の指示や説明を確認していました。また、他の生徒の発表内容を板書することで、きちんと理解し、課題に取り組む姿が見られました。



【補聴支援システム】

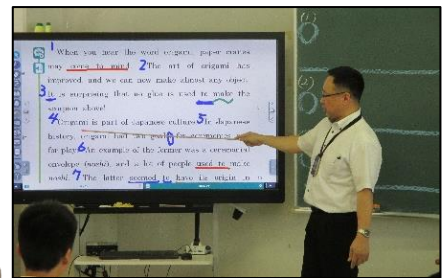
生徒Rに対する支援は、「校内での動き：Point 2」の生徒支援委員会で検討し、授業担当者会議で支援方法の共有を行っています。



UD

ユニバーサルデザインの視点を生かした手立て

教室環境は、生徒の集中を妨げる刺激を与えないようにすっきりと整理されています。授業の流れを導入段階で確認し板書することで、いつでも確認できるようにしていました。また、生徒の発表を復唱し、板書によって可視化することで思考や理解を整理していました。さらに電子黒板を活用し、深い理解につないでいました。



【電子黒板を利用して、文型を説明している様子】

UDの視点を生かした授業づくりは、「校内での動き：Point 1」の取組で共通認識を図っています。



支持

学級の支持的風土を醸成する手立て

予習してきたことを相互に確認させることで、自信をもって積極的に発表する姿が見られました。また、バズリーディング（自分のペースで声を出して読むこと）を設定することで、大きな声で音読に取り組み、その後の英問英答での発表時において、お互いを認め合いやりのある雰囲気の中で、自信をもって発表していました。そのことで、板書による発表の際は、級友と確認させることにより、安心して発表に臨んでいました。



【バズリーディングと相互確認】

授業者のコメント



生徒に自信をもたせ発表させることに重点をおいて指導しました。これまでの指導で生徒Rは説明等を聞き取ってきちんと理解し、ペア活動ができるようになってきましたが、もっと自己肯定感を高め自分をアピールすることができるよう学級担任と連携し支援していきたいです。

事例 10

高

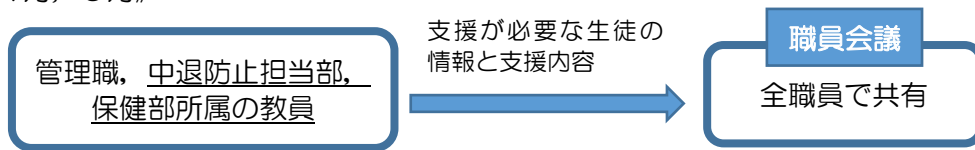
支援を要する生徒が多く在籍し、合理的配慮・適切と思われる配慮を開校当初から提供しているJ高等学校

校内での動き

中退防止（中途退学未然防止）担当部が中心となり、中高連携，教職員間の情報共有やケース会議を行っている学校です。支援を要する生徒が多く在籍するため，全教職員での情報共有を年3回行っており，また頻繁に教職員間で生徒の情報共有を行っています。生徒の思いに寄り添い，親切丁寧に接し，よいところ，得意なところを見つけ，個性を尊重する校風が育まれています。

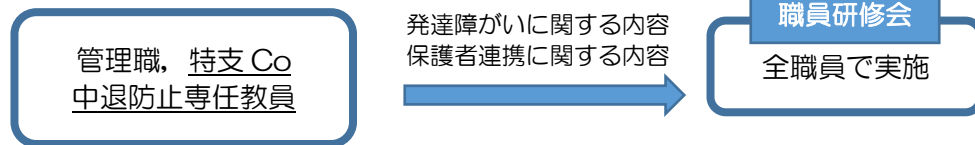
【職員間の主な連携】

《4月，9月》

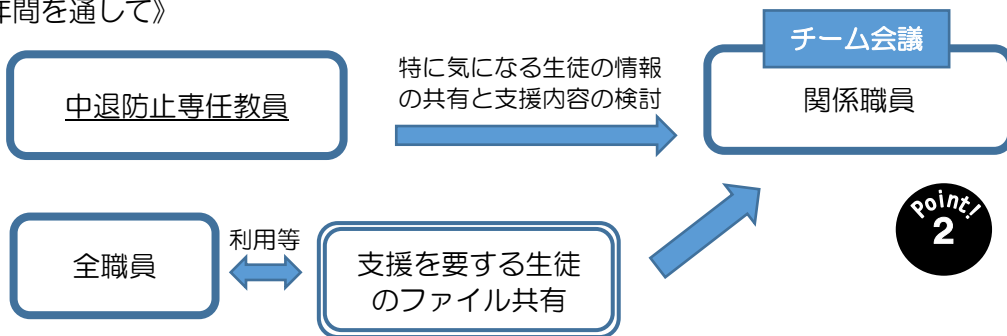


Point! 1

《研修会を定期的実施》



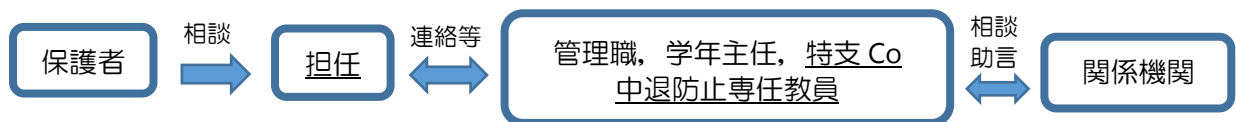
《年間を通して》



Point! 2

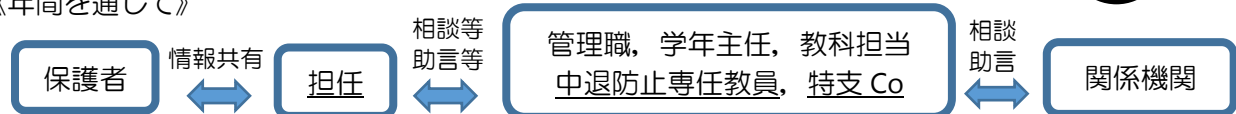
【保護者・関係機関との連携】

《合格者オリエンテーション後》



Point! 3

《年間を通して》



※ _____部は主担当者

Point!
1

年度当初の組織的な取組

合格者オリエンテーションの後に相談コーナーを設け、保護者からの個別相談に応じています。中退防止専任教員や保健部、新1年生の学年主任が相談に応じ、配慮や支援が必要な生徒の情報を収集しています。

4月、9月の職員会議では、保健部が作成した全学年の支援を要する生徒に関する情報と配慮方法等について共有を図っています。また、転任者対象の研修会を行うことで、生徒に対して、「威圧的に接しない（言葉遣い、態度）」「生徒の特性に配慮した座席」「生徒の名前は〇〇さん（姓）と呼ぶ」「生徒の話をもっと聴く」の4点の徹底を全教職員で図っています。

また、発達障がいに関する内容の研修会や三者面談前にテーマを決めての保護者連携に関する内容（例：入学したがやる気がでない等）の研修会（ロールプレイング）を実施し、教職員の理解や意識の向上を図っています。



Point!
2

年間を通しての組織的な取組

特に気になる生徒に関しては、中退防止専任教員が関係職員に働き掛け、チーム会議を行い、支援内容等を検討しています。学校全体の取組として支援を要する生徒のファイルの活用が挙げられます。

生徒情報は、面談の内容、気になる出来事等をまとめ、卒業するまでホームルーム担任間で引き継ぎながら、生徒を支援するための貴重なデータとして活用しています。



Point!
3

保護者・関係機関との連携

合格者オリエンテーションの際に、保護者からの個別相談を実施することで、毎年多くの保護者と生徒の情報を共有することができています。普段は、中退防止専任教員が長期欠席等の生徒に関して、特支 Co が発達障がい等の生徒に関して関係機関と連携し対応しています。



このような
本時目標で

ワークシートを基に、実物投影機を操作して、作品制作の工程を説明することができる。また、他の生徒の中間発表を聞き、提示された作品のよさや美しさを感じ、鑑賞する楽しさや味わいを表現することができる。

このような
実態の生徒たちが

自己の表現における諸能力を高めることを希望しているが、デザインの表現活動やコミュニケーションに対して苦手意識や抵抗を感じる生徒がいる。

支援を要する生徒の実態

他者とコミュニケーションをとることを苦手としている。

学習の見通しをもたせ分かりやすく伝えるために

気持ちや考えを整理し発表しやすくするために

互いを尊敬し合う人間関係を構築するために

ユニバーサルデザインの視点

- 実物投影機の利用
- 授業展開の流れを板書
- 発問の焦点化

合理的配慮・適切と思われる配慮

- ★ 発表用ワークシートの工夫
- ★ 座席の自由

学級の支持的風土

- ◆ Iメッセージ
(よさを認めるメッセージ)

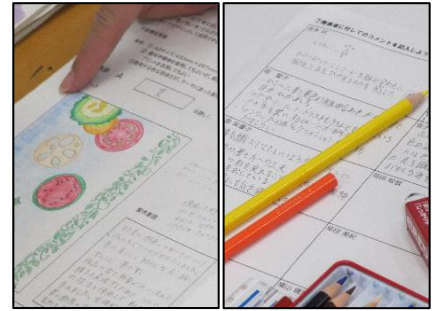
3つの要素をこのように取り入れて指導しました

	主な学習活動	指導上の留意点 (●UD/★配慮/◆支持)
導入	1 前時の振り返りと本時の学習内容の確認。 (1)前時の中間発表の内容を振り返る。 (2)本時の学習内容を確認する。 「中間発表を行おう」	○前時に発表した生徒へのコメントを通して、デザインのよさや改善点を伝える。 ●★ワークシートをまとめて発表することを確認する。
展開	2 中間発表を行う。 (1)ワークシートを作成する。 ・デザインされた2種類の作品について制作工程を振り返る。 (2)下描きを制作する。 (3)中間発表の鑑賞を行う。 ・作成したワークシートを基に発表する。 ・鑑賞から感じた良さや美しさを言葉で表現する。 (4)指導助言を聞く。 ・気づき等をワークシートに記入する。	★構成の秩序、季節にちなんだ配色効果についても必ず触れるように助言する。 配慮 ○空間のバランスに注意させる。 ●実物投影機を用いて発表させる。 UD ★実物投影機の操作を支援する。 ◆鑑賞の際は、発表者に注目させる。 ◆生徒の様々な意見を尊重する。 支持 ◆発表者・鑑賞者の両方の意見を取り上げながら助言を与える。
終末	3 本時の振り返りを行う。 (1)本時の内容を振り返る。 (2)次時の予告を聞く。	○作品のよさや美しさを通しての形体や色彩の構成の理解度を確認する。 ○次時の内容を説明する。

配慮

合理的配慮・適切と思われる配慮と生徒の様子

座席を自由にするにより、自分で落ち着く席を選択することができ、授業に集中して取り組むことができました。発表しやすくするために、何をどの順で発表すればよいのかを整理した「発表用ワークシート」を提示しました。その結果、デザインや配色効果等の教科の目標に合う内容を発表することができ、目標を達成することができました。発表の際は、実物投影機の操作を支援することで、自信をもって発表に臨むことができていました。



【発表用ワークシート】

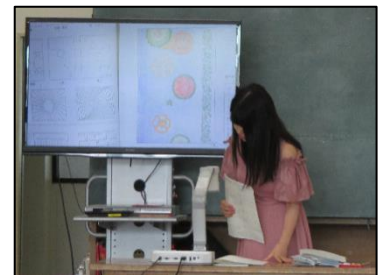


「校内での動き Point:1,2」の取組を通して、全教職員で支援を要する生徒の情報を共有することが、日々の授業に生かされています。

UD

ユニバーサルデザインの視点を生かした手立てと授業の様子

授業の流れを、導入段階で確認して板書することで、全ての生徒がいつでも確認できるようにしました。また、教師の説明や指示等もシンプルで分かりやすく工夫しました。生徒に電子黒板を用いて発表させることで、自分が制作した作品について、鑑賞する全ての生徒に分かりやすく説明することができていました。よって、発表後の鑑賞者の発言も的確なものになっていました。



【電子黒板を用いた発表】

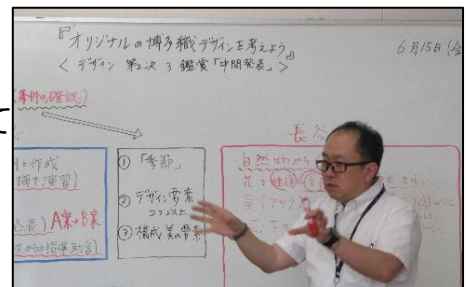
「校内での動き Point1」で共有された生徒に対する関わり方の意識が、分かりやすい授業の取組に生かされています。



支持

学級の支持的風土を醸成する手立てと学級の様子

生徒が発表する際は、発表しやすい雰囲気（発表者に注目する等）をつくりました。発表内容に対する鑑賞者の発言は、「メッセージ（良いところを見つけて発表者を認めるメッセージ）」がどの生徒のコメントにも含まれていて、発表した生徒は自己存在感や自己有用感を味わうことができていました。また、発表内容と鑑賞者の発言を踏まえた教師による助言が、生徒たちに自信を与えていました。※この手立ては、p.17で示した内容と関連しています。



【教師の助言の様子】

日々の教師と生徒の関り方が信頼関係につながり、学級の支持的風土を生み出しています。



授業者のコメント



自分の作品について発表したり他者の作品を鑑賞したりして、自己存在感や自信をもたせるとともに、表現の豊かさに気付かせたり、多様性を尊重する心の育成を目指したりしました。授業後は、高度な内容の習得に向け積極的に質問に来る生徒が増えました。

このような
本時目標で

「1から始まる自然数の和」「奇数の和」「等差数列の和の公式」を「図」が表す規則性を利用して考察することができるようになる。また、これらを利用して「1から始まる自然数の2乗の和」を「図」が表す規則性を利用して考察することができるようになる。

このような
実態の生徒たちが

数学を不得意と感じている生徒が多く、主体的に自分で考えて発表することやグループ活動に対して苦手意識をもっている。

支援を要する生徒の実態

他者とのコミュニケーションを苦手としている。

思考を焦点化させ、学習内容の理解を深めるために

思考しやすい場を与え、学習内容の理解を深めるために

自分が必要とされているという自己存在感を与えるために

ユニバーサルデザインの視点

- 授業の流れを板書
- 電子黒板の利用
- ワークシートの工夫
- 操作物（タイル）の利用

合理的配慮・適切と思われる配慮

- ★ 学習環境の自己決定
- ★ ワークシートの工夫
- ★ 操作物（タイル）の利用

学級の支持的風土

- ◆ アイスブレイク
- ◆ 話し方、聞き方の確認（傾聴等）
- ◆ エキスパート活動
- ◆ ジグソー活動

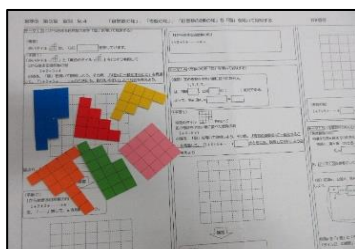
3つの要素をこのように取り入れて指導しました

	主な学習活動	指導上の留意点（●UD／★配慮／◆支持）
導入	1 本時の学習内容等を確認する。 (1) 本時の学習内容を確認する。 (2) 学習環境を決定し座席を移動する。 (3) 自己紹介などを行う。	● 本時の流れを板書し、見通しをもたせる。 ○ ワークシートと「タイル」を配付する。 ★ 一人、二人、グループのどの環境で学習するか自己決定させる。 ◆ アイスブレイクを行う。 配慮
展開	2 数列の和の求め方を考察する。 (1) 1から始まる自然数の和【テーマ13】と奇数の和【テーマ14】を考察する。 ・ 個人で考える。 ・ エキスパート活動を行う。 ・ ジグソー活動を行う。 ・ 正解を確認する。 (2) 1から始まる自然数の2乗の和【テーマ16】を考察する。 ・ 個人で考える。 ・ グループで協議する。 ・ 正解を確認する。	● 電子黒板を利用し問題把握を支援する。 ★ ワークシートと「タイル」を用いて考察させる。 ◆ エキスパート活動の支援を行う。 ◆ ジグソー活動の支援を行う。 ● 電子黒板を利用し、解法を説明する。 ● 電子黒板を利用し、問題把握を支援する。 ★ ワークシートと「タイル」を用いて考察させる。 ◆ 協議の際の話し方、聞き方を確認する。 ● 電子黒板を利用し、解法を説明する。 支持 UD
終末	3 本時の振り返りを行う。 (1) 本時の学習を振り返る。 (2) 次時の予告を聞く。	○ 具体物で事象を考察する有用性や楽しさを確認する。 ○ 次時の内容を説明する。

合理的配慮・適切と思われる配慮と生徒の様子

配慮

生徒にじっくり考えさせるために課題を協議させる場面を設定していますが、コミュニケーションを苦手としている生徒が多いため、「一人席」「二人席」「グループ席」を生徒



【ワークシートとタイル】



【授業の様子】

の希望に応じて分けています。生徒は落ち着く席を選んで、解法を考えることができていました。また、思考を支援するワークシートと操作物（タイル）が有効に働き、数列の様々な和について自分なりの解法を考えだすことができていました。



「校内での動き：Point1, 2, 3」で述べているように、年間を通して組織的に生徒の情報を保護者も含めて共有していることが、日々の授業に生かされています。

支持

学級の支持的風土を醸成する手立てと授業の様子

協議の際、アイスブレイク（話し方、聞き方の確認を含む）を取り入れることで、緊張をほぐし安心して協議できるようにしました。また、協議を、解法を他者に説明する「エキスパート活動」としてジグソー法で実施したことで、自信をもって丁寧に他者に説明を行うことができ、生徒は「自分が必要とされている」と実感できていました。



【グループ協議の様子】

教師と生徒の日々の信頼関係が、授業全体の支持的風土を醸成しています。

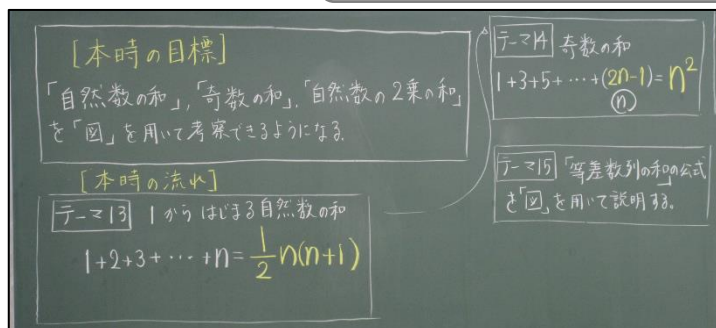


UD

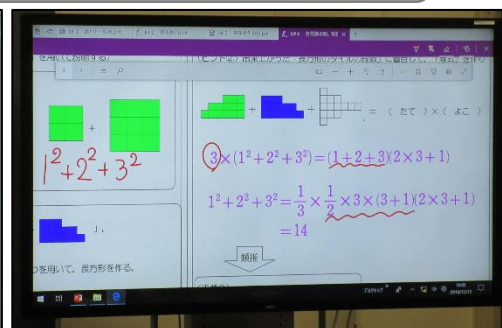
ユニバーサルデザインの視点を生かした手立てと授業の様子

授業の流れを板書しておくことで、生徒は見通しをもって授業に臨むことができ、いつでも今何を学習しているのかを確認できました。また、ワークシートと連動した電子黒板の画面は大変分かりやすく、生徒の思考を助け、協議の活性化につながりました。

「校内での動き：Point1」で述べているように、職員の生徒一人一人への関わり方の徹底が、分かる授業にも生かされています。



【授業の流れの板書】



【電子黒板を活用している様子】

授業者のコメント



授業では、できるだけ生徒自身にじっくり考えさせたいと思い、教材の準備をしています。問題を自己決定させたり、ジグソー活動を仕組んだりすることで自信をもって他者に説明できるように工夫しました。

第3章

コラム編

児童生徒の成長を喜び合う関係に！ 保護者との連携



児童生徒の成長を願う気持ちは、保護者も教師も同じです。児童生徒の健やかな成長のためには、児童生徒を常に中心にして保護者と連携していくことが大切です。「通常の学級でよりよく学ぶには」という視点を共有し、どのような支援があればできるだろうかという「できる文脈」で対話することがポイントです。

1 空き時間を活用した宿題のリハーサル

ある小学校では、保護者の了承の下、休み時間や放課後の時間を一部活用して、宿題の設問のうち2～3問を教師と一緒に解いてから、持ち帰るようにしています。対象児童は、宿題のリハーサルに取り組むことで、「自分で宿題ができる」という実感をもてるようになりました。「自分でできるようになりたい」という意欲が高くなり、少しずつ自ら解き方を尋ねてくることが増え、効果的な取組となっています。

2 学校と家庭との協力体制から生まれる信頼関係

6月、ある小学校の1年生の児童の保護者から、平仮名が読めていないようだという電話相談を受けた担任は、管理職及び特支 Co に報告し、対応を検討しました。検討の結果、学校では、一か月間で平仮名をどの程度覚えられるか様子を見ることにしました。家庭でも絵と文字の平仮名カードを使った取組を継続して行ってもらいました。その間、連絡帳を通じて、担任と保護者とのこまめなやり取りを大事にしました。学校と家庭との協力体制の中で取組を続けた結果、一か月後、読める平仮名は16個から44個に増えました。その後、夏季休業中の個人面談においては、今後も児童の理解面が心配されることを伝え、心理検査を実施し、今後の支援を検討したいことを提案しました。これまでの対話で、学校と保護者との信頼関係を構築できていたため、前向きに支援について検討することができました。

3 学校(担任)と保護者とのつながり

ある高等学校では、合格者オリエンテーションの際に保護者からの個別相談を実施し、保護者の思いと願いを聴く取組を行っています。また、日頃から担任も保護者に連絡する際は、「今日は〇〇ができるようになりましたよ。」「頑張っていますよ。」と、よい面を常に伝えていきます。このようなつながりがあるため、保護者の理解や協力を得ることができています。

学校をバックアップ！ 関係機関との連携



「外部の専門家から、何かヒントをもらえたらいいな」と考える学校も多いと思います。その「何か」の部分は、非常に重要です。関係機関から、どのようなことに対して助言を得たいのかを焦点化すると、効果的に連携を図ることができます。



1 学校と専門機関をつなぐ市町村教育委員会の働き

専門機関との連携が必要な場合に、市町村教育委員会に専門機関とのパイプ役になってもらうことができます。

ある小学校では、保護者からの相談を受け、校内委員会での協議を経て、関係機関と連携して対応することになりました。管理職は、どのような関係機関と連携すると効果的か、町教育委員会の指導主事に相談しました。指導主事は、学校に専門機関（町内の児童発達相談センター）を紹介しました。後日、校長から保護者に、専門機関のことを伝えました。その結果、心理検査が実施され、児童の実態をより詳細に把握することができました。

検査結果については、保護者の了承を得て学校側も見せてもらうようにし、児童の支援へとつなぐことができました。

2 巡回相談による指導内容・方法の助言

気になる生徒について、巡回相談を利用することで、生徒の実態を客観的に知ることができます。また、生徒が必要とする支援の内容と方法について、専門的な立場から助言を受けることができます。

ある中学校では、提出物（英単語などの各教科の毎日の宿題）を期限内に出すことが難しい生徒への支援方法について、巡回相談を利用して相談することにしました。巡回相談では、期限を守ることが難しい要因の一つに、スケジュール管理の苦手さがあるため、「いつまでに・何を・どれくらいといった見通しをもたせることが大切である」という助言を受けました。そこで担任は、毎日の帰りの会で帰宅後にやるべきことを確認するなど、スケジュール管理に関する支援を始めました。課題を細分化し、小さな目標を設定することで、生徒は提出物を期限内に提出できるようになり、前向きに取り組めるようになりました。巡回相談での助言により、担任はスケジュール管理が個別の支援の一つであることについて、生徒はスケジュールリングの方法について理解することができました。

途切れのない支援を実現！ 異校種間の連携



障がいの有無にかかわらず、どの幼児児童生徒にとっても、卒園・卒業し、新たな学校や社会へ入学・入社していくことは、非常に緊張するものです。一人一人の幼児児童生徒の思いに寄り添い、支援を継続したり、発達の段階に応じて支援を変更・調整したりしていくことは、幼児児童生徒の健やかな成長を支えるものであると同時に、保護者との信頼関係の構築につながるものです。

「どのような様子か」という状態に加えて、「どのような支援が効果的か」といった支援の具体や経過を共有することが大切です。

1 10月から始める保幼小の連携

ある小学校では、10月末の新入児健診に主幹教諭、養護教諭が参加し、受付時から子供の様相観察を行います。そして、気になる子供については、町の人権部会において、保育園及び幼稚園から子供の実態のみならず、支援内容について情報を提供してもらっています。

2 児童の安心を保障する小中の連携

ある小学校では、小学校6年生担任と中学校の教職員とで、中学校入学予定者について情報の共有を行っています。中学校への入学に当たり不安がある児童には、校長、担任、本人、保護者で中学校の学校見学を行い、安心して中学校で過ごせるような取組を進めています。

3 将来を見据えた高大の連携

ある高等学校では、支援を要する生徒の将来(大学へ進学した後の学び)を考え、校内委員会での検討を十分に行い、保護者の了承を得て、進学先の大学へ生徒の状況を説明するなど、高大の連携を図っています。

4 中学校の校内研修会への参加を軸とした、校区内及び中高の連携

ある中学校校区では、校区内の小中学校の主幹教諭、研究主任が中心となり、それぞれの校内研修会の日程の一覧表を作成し、お互いの校内研修会への参加を定期的に行っています。その校区の中学校は、卒業生の多くが進学している県立高等学校及び私立高等学校の先生方にも、校内研修会への参加を呼び掛けています。

授業参観を通じて、児童生徒の実態や各校の取組を具体的に把握し、引継ぎや授業づくりに生かすことができました。また、授業整理会は、貴重な意見交流の場になり、有効な支援を共有することにつながりました。

困ったときこそ、前進のチャンス！ 校内の工夫



「なかなか時間がとれない」「学校全体として取り組むことが大変」など、取組を始めたものの、次の課題に直面している学校も多いと思います。そのようなときには、同僚に相談することで、よいアイデアがひらめく場合があります。そのためには、日頃からどのようなことでも相談できる、風通しのよい職員室づくりが大切です。

1 生徒の個人ファイルを、身近な場所に保管

ある中学校では、支援を要する生徒の情報について、「担任はよく理解しているが、職員間で共通理解が図れていない」「情報共有の時間がない」ということを解消するために、個別の指導計画等を含めた生徒の情報ファイルを職員室内のロッカーで保管するようにしました。そして、全教職員が、いつでも閲覧したり、新たな情報を加筆したりできるようにしました。この取組を始めたことで、これまで以上に生徒の情報共有が進みました。

(※カギ付きロッカーを設置するなど、個人情報の取扱いに留意しましょう。)

2 教科指導で学級の支持的風土を醸成 「国語科通信」の取組

ある中学校の国語科の先生は、教科指導を受け持っている学級において、全体的に自分の考えに自信をもてない生徒が多いことが気になっていました。そこで、同じ教科の先生に相談して始めたのが、生徒に配付する「国語科通信」の発行です。一年前から定期的に、生徒が授業中に書いた作品とそのよさをまとめ、発行しています。この取組を実践した先生は「始めたばかりですが、自信をもつ生徒が増えてきました」と、効果を実感していました。また、友達同士で作品のよさを認める姿もあり、学級の支持的風土を醸成することにつながりました。

国語科通信

いろは

○自分流「枕草子」、なかなか上手に書けている人が多かったです。そのなかでも、とても良かった作品を紹介します。

【テーマ】食べ物


春はたけのこ。冬が去った頃、春のおとずれを待っていたかのように、頭の先を出しているたけのこはいとをかし。揺ったとき、冬が寒かったのか、茶色の衣をたくさん身につけているのは、いとをかし。

夏はスイカ。やうやうと暑さが厳しくなるとき、母がスイカを切って持ってくるのは、いとよろし。夏の暑さを忘れてしまうほど、夢中になって食べる姿は、いとをかし。また、暑苦しいから楽しめるスイカはよし。

秋は焼きいも。少し寒く感じる頃、ほかほかの焼きいもはよろし。落ち葉を集めて焼くのもよろし。焼きいもを半分にすれば、満月のように黄色く輝くのは、あはれなり。

冬は鍋。寒くなれば、家族と食卓を囲み鍋をつつくのは、よろし。また、外の寒さを吹き飛ばすように、体がほかほかしてくる鍋はともよし。だが、私の具が兄に食べられていたのは、わるし。

「茶色の衣」という表現がいいね！



「国語科通信」一部抜粋

参考文献・参考ウェブサイト

- ・発達障害を含む障害のある幼児児童生徒に対する教育支援体制整備ガイドライン 文部科学省（H29）
- ・特別支援教育推進ガイド ～一人一人が輝く共生社会の実現を目指して～ 福岡県教育委員会（H30）
- ・（小学校・中学校・高等学校用）特別支援教育コーディネーターガイド 福岡県教育委員会（H30）
- ・人権教育研修会資料集 福岡県教育委員会（H30）
- ・そこが知りたい！大解説 インクルーシブ教育って？ 木船 憲幸（2014）明治図書
- ・共生社会の時代の特別支援教育 第1巻 新しい特別支援教育 インクルーシブ教育の今とこれから 柘植雅義（2017）ぎょうせい
- ・共生社会の時代の特別支援教育 第2巻 学びを保障する指導と支援 全ての子供に配慮した学習指導 柘植雅義（2017）ぎょうせい
- ・共生社会の時代の特別支援教育 第3巻 連携とコンサルテーション 多様な子供を多様な人材で支援する 柘植雅義（2017）ぎょうせい
- ・通常学級のユニバーサルデザインと合理的配慮 阿部利彦編集（2016）金子書房
- ・児童心理 特集「自分の居場所」がない子（2017. 9）金子書房
- ・児童心理 特集 ふれあいのあるクラス（2015. 4）金子書房
- ・「特別支援教育指導資料第20集」群馬県総合教育センター（H20）
- ・特別支援教育のための校内支援体制ケースブックー校内組織を活用したチームアプローチー 秋田県総合教育センター（2016）
- ・通常の学級におけるユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり 福岡県教育センター（H27）
- ・インクルーシブ教育システムの構築に向けた特別支援教育の充実 ～合理的配慮提供の7 steps～ 福岡県教育センター（H29）
- ・保護者との信頼関係を高める教師のコミュニケーションスキルアップ 福岡県教育センター（H21）
- ・文部科学省 <http://www.mext.go.jp/>
- ・（独）国立特別支援教育総合研究所 <http://www.nise.go.jp/cms/>
- ・福岡県教育庁「義務教育課各種資料ページ」（特別支援教育関係資料）
http://gimu.fku.ed.jp/one_html3/pub/default.aspx?c_id=76

おわりに

小学校・中学校・高等学校においては、特別支援教育に関する校内研修が実施され、「ユニバーサルデザインの視点」や「合理的配慮」を授業の中に取り入れようとする取組が広がっています。

私たち特別支援教育チームは、「ユニバーサルデザインの視点」「合理的配慮」に関する過去の研究成果をさらに発展させることが求められ、そのためには、各学校の課題を把握する必要があります。児童生徒の個々の困難さや教育的ニーズの多様化への対応、困難さや必要な支援に対する本人・保護者と学校側との認識の違い、校内委員会等を中心とした校内組織や関係機関との連携の在り方など、学校における課題は多岐に渡っています。これらの課題に対応する研究成果が求められました。

小学校・中学校・高等学校の通常の学級における全ての児童生徒の学びを支えるためには、授業の充実が欠かせません。そのために必要な要素とは何かを求め、3つの要素に整理しました。本人・保護者の意思表示から始まる「合理的配慮」に加え、「適切と思われる配慮」を新たに提案しています。このことで、各学校では支援を要する児童生徒に対して、主体的に配慮提供しやすくなると考えます。また、「学級の支持的風土」の醸成として、居心地のよい環境づくりを提案しています。これらに、「ユニバーサルデザインの視点」を含めた3つの要素については、「特別」ではなく、「当たり前」として、各学校で取り入れていただくことを強く願っています。

また、学校全体として授業の充実に取り組むために、校内委員会等との協働、保護者との連携、関係機関との連携が求められます。会議の時間は限られ、様々な業務を抱える学校現場で、実効性のある組織的な動きを検討し、授業との関連で整理し提案しています。組織的な対応は、3つの要素を取り入れた授業を一貫性・継続性・発展性のあるものにすると考えます。各学校の組織体制や運営状況に応じて、役立てていただくことを強く願っています。

本調査研究の成果物として、本書の内容を短時間で研修できる「校内研修スライド」を作成しました。本書と併せて御活用いただけると幸いです。

最後になりましたが、貴重な御指導、御助言を賜りました福岡教育大学 藤金倫徳教授をはじめ、調査に御協力いただきました各調査研究協力校の校長先生並びに諸先生方に、心から厚く御礼申し上げます。

福岡県教育センター調査研究特別支援教育チーム

調査研究協力員

平成29・30年度

福岡教育大学 特別支援教育講座 教授 藤金 倫徳

調査研究協力校

平成29・30年度

苅田町立苅田小学校	苅田町立馬場小学校
苅田町立南原小学校	苅田町立与原小学校
苅田町立片島小学校	苅田町立白川小学校
苅田町立苅田中学校	苅田町立新津中学校
福岡県立博多青松高等学校	福岡県立東鷹高等学校

福岡県教育センター 調査研究 特別支援教育チーム

平成29年度

特別支援教育部長	菊池 修			
主任指導主事総括	八田 信人	葉玉 千賀子		
主任指導主事	島津 千恵子	富重 英明		
指導主事	立川 嘉彦	井手 久美	古賀 弘行	田中 晃詞
	野中 昭秀	江口 将生	花田 将明	堀 修二

平成30年度

特別支援教育部長	太田 信			
主任指導主事総括	八田 信人	市場 敏彦		
主任指導主事	内本 郁美	山下 博之	江口 将生	
指導主事	鳥巢 将之	井手 久美	瀧口 博章	百留 裕幸
	藤岡 太郎	佐藤 美和子	堤 久幸	宮城 亜樹
	藤木 雄一郎	相浦 愛子		

福岡県教育センター 研究紀要 No. 203

インクルーシブ教育システムの構築に向けた通常の学級における学びを支える方途

小中高 学びを支える3つの要素

平成 31 年 3 月発行

福岡県教育センター

〒811-2401

福岡県糟屋郡篠栗町高田 2 6 8

TEL 092-947-2409 FAX 092-947-8082

URL <http://www.educ.pref.fukuoka.jp>